

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金助成事業
 焼津福祉文化共創研究会

2022年度「地域共生社会をめざす仕組み検証事業」

ホッとする，安心した地域づくり
 その意識と実態調査報告書



「若者発 ご近所福祉かるた」

企画・制作：静岡福祉文化を考える会 協力：焼津福祉文化共創研究会

焼津福祉文化共創研究会

公益財団法人 さわやか福祉財団 地域助け合い基金助成事業
2022 年度「地域共生社会をめざす仕組み検証事業」
ホッとする、安心した地域づくりその意識と実態調査報告書

【目 次】

➤	はじめに 高齢者とともに、ホッとする、地域共生社会を拓く	…	p.2
➤	第 1 章 調査の概要	…	p.3
	1. 調査実施意図	5. 調査実施機関	
	2. 調査方法と調査日	6. 調査協力	
	3. 調査票の形式及び調査項目	7. 回収状況	
	4. 調査対象と調査票の発送		
➤	第 2 章 サンプル構成／基本属性	…	p.8
	1. 性別	5. 居住年数別	
	2. 年齢別	6. 居住地域別	
	3. 職業別	7. 世帯状況別	
	4. 居住形態別	■ クロス集計表	
➤	第 3 章 調査結果	…	p.12
	1. 基本属性		
	2. 生活状況（高齢者自身）に関すること		
	3. 家庭・家族に関すること		
	4. 地域との関わりに関すること（意識）		
	5. 地域との関わりに関すること（実態）		
	6. 地域参加の動向		
	7. 地域環境に関すること		
	8. 提言（自由意見）		
➤	第 4 章 調査のまとめ	…	p.42
➤	第 5 章 資料編	…	p.48
	1. 2022 年度活動経過報告		
	2. 焼津福祉文化共創研究会 3 年間の歩み		
	3. 焼津福祉文化共創研究会 2022 年度活動計画		
	4. 地域共生社会調査研究部会設置要綱		
	5. 調査実施要項		
	6. 調査票		
	7. 「焼津福祉文化共創研究会通信」（本会機関紙）		
	8. 焼津福祉文化共創研究会要覧		
	9. 焼津福祉文化共創研究会規約		
☆	これからの福祉を考えるネットサイト		

はじめに

高齢者ととともに、ホッとする安心した地域共生社会を拓く

本会は、2016年度～2018年度まで、焼津市内中学校区約5,400世帯の管内において、住民主体で開講した「港地域ささえあい講座」に関わった有志が、講座から得た尊い地域課題をもとに、「港地域の支え合いを考えていこう」と、2019年4月に結成し、4年目の活動に取り組んできました。

- (1) 「さまざまな分野で活動する人が、専門分野と世代を超えて交流を図る」
- (2) 「会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に開かれた活動をする」
- (3) 「既存のコミュニティ・福祉活動から取り残された問題や新しく発生した問題を大切にし、常に市民生活に密着した活動をする」

の「3つの活動基調」により、「地縁組織」（自治会・町内会〔お互い様〕）の諸活動に、「志縁組織」（目的・使命による活動集団）として、本研究会は、「協働」の取り組みとして、「焼津市赤い羽根共同募金地域福祉促進助成事業」と「静岡県コミュニティづくり推進協議会・コミュニティ活動集団助成事業」により、管内の福祉課題解決に向けた提言をし、地域環境の改善に努めてきました。今年度は、「公益財団法人さわやか福祉財団地域助け合い基金助成事業」の決定をいただき、事業の目的を次のように掲げました。

「今日、地域コミュニティへの参画の希薄化とともに、家族機能やご近所のささえあいは、制度や施策等公助ありきの意図的支援が当たり前のような社会環境になりつつある。加えて、長引く厳しいコロナ禍下、ますます、地域コミュニティのつながりがなくなり、ご近所のささえあいの希薄さが浮き彫りになっている。こうした制約された社会環境の中で、生活している高齢者自身の現状や、地域社会の共助の実情を検証し、コロナ明けの地域社会をどのように望んでいるかを管内生活者の立場から把握し、高齢者の社会的孤立を防ぐとともに、高齢者等の積極的な地域参加を促し、これからの望ましい地域環境づくりを問い、地域ぐるみの支え合いにより、世代を超えた地域共生社会の在り方を検証する。」

そして、事業テーマを「地域共生社会をめざす仕組み検証事業 高齢者ととともに、地域共生社会を拓く～ホッとする地域づくりは誰が担うか～」とし、(1)「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」の実施、(2)「地域共生社会調査研究部会」の設置と開催、(3)調査報告書の作成、(4)「地域共生社会（ご近所福祉）を語る集い」の開催、(5)協働団体との意見交換の開催、(6)地域共生社会広報啓発を主な内容としました。

ここに、事業が終わりましたことを報告するとともに、この報告書では、主に管内の自治会・町内会役員、港地区民生委員児童委員協議会、さわやかクラブ連合会管内単位クラブ等、多くの関係団体・地域住民のご支援ご協力により取り組みました「ホッとする、安心した地域づくりその意識と実態調査」の結果を報告いたします。

結成初年度は、改正介護保険制度の下、各地域で課題として取り上げられている「居場所」について、「港地域の“ご近所”を切り拓く、集まる居場所で地域ぐるみのささえあい」を検証し、「集める居場所」ではなく「集まる居場所」を発信しました。2年目は、「ご近所福祉その意識と実態調査」に取り組み、地域コミュニティへの関わりの希薄化は、厳しいコロナ禍でさらに浮き彫りになりました。そして、3年目は、244名の尊い子どもたちからの回答から、大人社会への提言検証事業に取り組みました。今年度は、高齢者から地域社会への提言検証報告書としてまとめました。決して、単に調査結果を出すことが目的ではなく、「相互理解」し、「協働」による地域活動により、これからの港地域づくりへの提言としています。本会の小さな試みを大きく発展できるよう、さらに努力してまいります。

改めて、本会の活動にご支援・ご協力をいただきました皆様方に、謹んで感謝申し上げます。

この「ホッとする、安心した地域づくり その意識と実態調査報告書」が、これからの地域づくりの一助になることを期待します。

2023(令和5)年2月18日 焼津福祉文化共創研究会

第1章 調査の概要

1. 調査実施意図

本会の活動は、結成以来、「調査研究活動」、「地域総合型公開学習活動」、「見える化・わかる化活動」と大きく分けて3つの柱立てにより展開している。

とりわけ、「調査研究活動」の取り組みは、地域の現状や課題を知らずして、問題解決・改善に向けた、真の地域活動はあり得ないことを基盤に、これまで地域の福祉課題をテーマに、結成以来3年間、下記の内容で取り組んだ。

■ 1年目(2019年度)

活動テーマ【港地域のご近所を切り拓く 集まる居場所で地域ぐるみのささえあいを検証する】

約5,000世帯をもって構成されている「港地域づくり推進会」(港第14・23自治会)管内において、今日まで、地域や個々の人々のつながりの中で、気兼ねなく集まり、会話を交わし、ふれあい交流し、普段の拠り所としている「居場所的機能」を持つ55の既存の各種団体・グループを把握し、「集める居場所から集まる居場所」を課題提起した。

■ 2年目(2020年度)

活動テーマ【港地域のご近所を切り拓くパート2ー協働による地域課題解決を探る】

1年目に取りまとめた結果をもとに、さらに把握に努めるとともに、管内関係団体や住民に機会があるごとに情報を提供し、改めてこうした既存の団体グループの様々な取り組みを地域住民が共有し、積極的に地域参加する機会を呼掛け、「ご近所福祉 その意識と実態調査」に取り組み、地域で顔の見える“近助”の関係づくりができる「協働による地域づくり」を働きかけた。

■ 3年目(2021年度)

活動テーマ【港地域をつなぐ・ささえあう“ご近所福祉”を創る】

本会は2019年度に結成して2年間、地域の福祉課題をテーマに、大人社会を対象に調査研究活動に取り組んできた。2020年度に取り組んだ「ご近所福祉 その意識と実態調査」から、地域住民相互のつながりやささえあいが弱くなり、地域コミュニティへの関わりについて、その意識と実態が希薄化の傾向にあることが浮き彫りになった。

こうした地域環境で生活している、次世代を担う子どもたちの「思いやりの心」が、確実に管内地域に醸成されているか、加えて、厳しいコロナ禍の続く今日にあって、子どもたちの福祉に対する意識と実態の現状はどうかを問い質すこととした。

身近な生活圏域において、地域の大人社会と向き合う子どもたちを対象にご近所や同居する高齢者(認知症高齢者含)、障がい児者等への思いやり等について、「基本属性」、「生活状況(子ども自身)」、「家庭・家族のこと」、「地域社会・地域活動のこと」、「体験事例」、「地域への期待」の各項目の意識と実態を把握し、子どもたちを取り巻く地域環境の課題を改善・解決し「共生社会」をめざした、地域社会(大人社会)に提言することを目的に取り組んだ。

この調査に取り組むにあたり、管内自治会・町内会をはじめ、民生委員児童委員協議会、管内2つの小学校、子ども会関係者の全面的な支援をいただき成果を上げた。

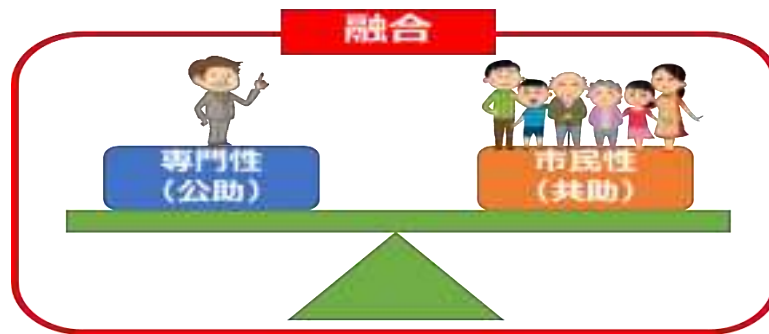
4年目の2022年度は、長引く厳しいコロナ禍で、尊い地域コミュニティは、さらに希薄化の傾向が伺われ、「共助」、「自助」がますます退行傾向にある。

こうした社会環境の中で暮らす、高齢者の現状を把握するとともに、コロナ明けに地域(ご近所)のささえあいの仕組みづくりに期待することは何か問い質し、これから、地域社会が果たす課題をまとめ、広く管内の住民に提言することとした。

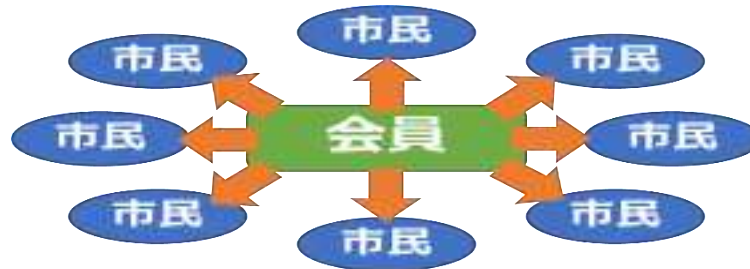


本会は、「さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考えてその改善のために努力していく」ことを活動目的とし、次の3つの「活動基調」を掲げている。

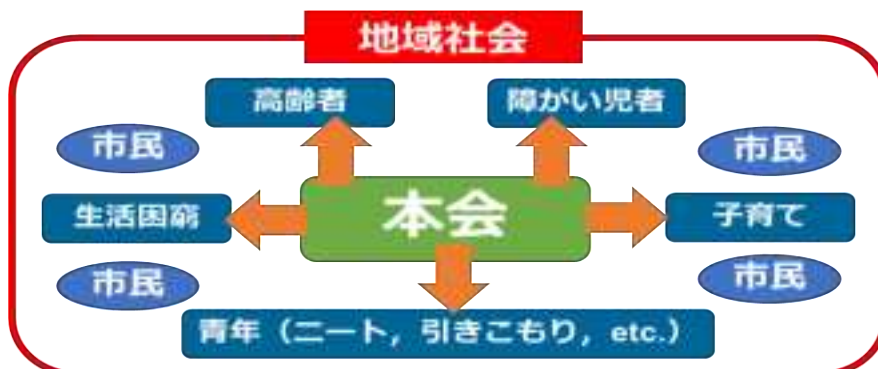
- 活動基調 1. さまざまな分野で活動する人が、専門分野と世代を超えて交流を図る。
 - ✓ 「専門性と市民性」、「理論と実践」、「教育と福祉」を『融合』する努力。



- 活動基調 2. 会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に開かれた活動をする。
 - ✓ 「地域総合型研修会」、「公開型研修会」で市民性を高める努力。



- 活動基調 3. 既存のコミュニティ・福祉組織活動から取り残された問題や新しく発生した問題を大切に、常に市民生活に密着した活動をする。
 - ✓ 「調査研究活動」を重視し、地域課題を掘り起こし、その考察等を地域社会に提言。



本会の活動は、このような「活動目標」、「活動基調」をもとに、プロセスを重視し、管内の地域課題を浮き彫りにし、「地縁団体」、「志縁団体」（本会等）による「協働」で地域の課題提起に努めてきた。



2. 調査方法と調査日

(1) 調査票・項目の検討

2022年4月～8月、定例研究会及び「地域共生社会調査研究部会」を研究会内に設置し、会員以外にも、自由に参加できる場を提供するとともに、協働団体の「静岡福祉文化を考える会」の各種研修会や、委員会において協議した意見を本会活動に反映する試みをした。

「第1回地域共生社会調査研究部会」（7月30日開催）及び「第2回地域共生社会調査研究部会」（8月6日開催）において、集中的に協議した。

(2) 調査票の完成

調査検討協議を積み重ね、「予備調査」を実施し、8月25日に「調査票」を完成。

(3) 調査依頼（実施期間）

調査時点を9月1日とし、会員を中心に、港地域づくり推進会（自治会・町内会）、港地区民生委員児童委員協議会、管内福祉施設連絡会、さわやかクラブやいづり連合会等の協力のもと、9月1日～10月31日を調査実施期間として調査活動に取り組んだ。

「第3回地域共生社会調査研究部会」（9月3日開催）及び「第4回地域共生社会調査研究部会」（10月1日開催）において、調査実施状況の把握について協議した。

(4) 回収・入力（単純集計）期間

「第4回地域共生社会調査研究部会」（10月1日開催）、「2022年10月（第43回）定例研究会」（10月8日開催）より、調査データ入力に関する協議を開始し、9月1日～9月30日の間、4名のデータ入力会員により、順次回収した調査票のデータ入力作業における問題点を出し合いながら、作業を進めた。回収・入力作業状況を見ながら、「単純集計」、「クロス集計」作業の準備を並行して取り組み、「第6回地域共生社会調査研究部会」（12月3日開催）において、回収データ794枚の集計結果を確認した。

(5) 分析・考察

厳しいコロナ禍で、会員全員が出席できる状況が困難な中、LINE等による連絡網を維持し、「定例研究会」や「地域共生社会調査研究部会」を開催し、活動を継続してきた。

そして、「第7回地域共生社会調査研究部会」（12月7日開催）と「2022年12月（第45回）定例研究会」（12月24日開催）において、報告する方法を確認し、全体調整作業を継続し、「第8回地域共生社会調査研究部会」（1月7日開催）と「2023年1月（第46回）定例研究会」（1月14日開催）において意見を集約し「報告書」に取りまとめた。

(6) 公表・報告

データ入力作業期間中、「中間報告」の機会を2回ほど設け、本会関連各種会議や、関係機関・団体等の各種研修会で経過を報告し、かつ「焼津福祉文化共創研究会通信」で随時経過・概要を報告した。

正式公表を、「公開型研修会：地域共生社会を語る」（2023年2月18日開催）をもって最終的な公表とした。

3. 調査票の形式及び調査項目

(1) 調査票の形式

A3版、両面2ページ、33項目の設問

(2) 調査項目

No.	調査項目	設問 No.	設問数
1	基本属性	設問 1. (問 1.～問 7.)	7
2	生活状況（高齢者自身）に関すること	設問 2.～設問 6.	5
3	家庭・家族に関すること	設問 7.～設問 12.	6
4	地域との関わりに関すること（意識）	設問 13.～設問 17.	5
5	地域との関わりに関すること（実態）	設問 18.～設問 20.	3
6	地域参加の動向	設問 21.～設問 25.	5
7	地域環境に関すること	設問 26.～設問 32.	7
8	提言（自由意見）	設問 33.	1

この調査票の組み立てについては、これまで3年間実施してきた「調査票」からも、今回の調査実施の趣旨に基づき、「設問」として、活かせる内容として、「14の設問」を再び採用。

そして、今回の調査結果との比較・考察し、地域社会の変化を併せて把握することを確認。また、新たな設問として、「18の設問」を組み立てた。

4. 調査対象と調査票の配布及び回収

(1) 対象・回収目標

「港地域づくり推進会」管内（港第14・23自治会）に在住する65歳以上の高齢者を対象に、約200名の調査票回収を目標に実施。

(2) 配布及び回収方法

本来、会員を主体とした調査実施であるが、「協働」による成果を期待するとともに、今後の地域づくりを、こうした活動を通じて、連携した取り組みの意義を基に、調査の実施にあたり、管内関係方面への協力依頼の必要性から、「港地域づくり推進会」（港第14・23自治会）への文書による協力呼びかけと説明の機会を設けていただいた。

「港地区民生委員児童委員協議会」における、定例会議において、調査実施の趣旨説明と協力の呼びかけをお願いした。「さわやかクラブ連合会」へは、事前に協議の場をお願いし、管内の単位クラブへの協力をお願いした。

長引くコロナ禍で、状況を見ながら調査活動に取り組めるように、9月1日（木）～10月31日（月）の2カ月間を調査回収期間とした。

「地縁団体」、「志縁団体」には、調査の回収には、ゆとりを持って取り組んでいただくようお願いし、回収できた調査票は、その都度本会の方で、ここに受け取る努力をした。

配布作業、そして回収作業の一連の取り組みから、改めて「協働の重要性」を働きかける

とともに、「焼津福祉文化共創研究会」を理解していただくための努力をした。
 具体的には、以下の通りである（次のページへ）。

No.	配布先・依頼先	回収数	配布数	パーセンテージ
1	会員（現在 11 名）	117	115	101.7%
2	志縁組織	158	220	77.3%
3	地縁組織	40	85	47.1%
	計	315	420	75.0%

5. 調査実施機関 焼津福祉文化共創研究会

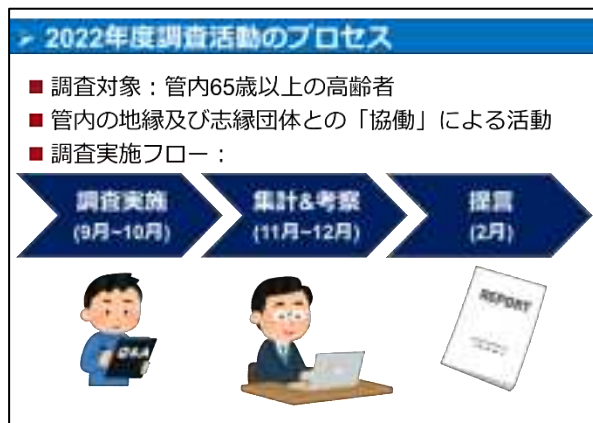
本会結成以来 2 年間、取り組んできた調査研究活動は、定例研究会を中心に議論をしてきた。

また、昨年度から、協働団体である「静岡福祉文化を考える会」との密接な連携とともに、さらに、小回りのきく、「部会」設置の必要性から 3 年目の調査研究活動から、「調査部会」を新たに立ち上げ、更に 4 年目は「地域共生社会調査研究部会」として、単に調査実施の議論だけではなく、本事業全体の活動テーマに基づき、きめの細かい議論を積み重ねるとともに、関係団体等との日常的連携をもとに、進行管理体制を明らかにしながら取り組んだ。

2022 年度は、下記の通り「地域共生社会調査研究部会」を設置し、円滑な運営に努力した。

回	開催日時・会場	研究協議内容（概要）
1	07 月 30 日（土）18:30 @北川原公会堂	研究会の位置づけと方向性，地域の現状，課題整理
2	08 月 06 日（土）18:30 @北川原公会堂	調査実施計画協議（調査実施要項・調査個票・調査票配布）
3	09 月 03 日（土）18:30 @北川原公会堂	調査実施上の課題反響，調査集計作業
4	10 月 01 日（土）18:30 @北川原公会堂	調査回収状況，調査集計作業，協働の課題
5	11 月 05 日（土）18:30 @北川原公会堂	調査集計作業&考察作業（意識と実態と提言）
6	12 月 03 日（土）18:30 @北川原公会堂	調査から見えた意識と実態と地域づくりの課題考察①
7	12 月 17 日（土）18:30 @北川原公会堂	調査から見えた意識と実態と地域づくりの課題考察②
8	01 月 07 日（土）18:30 @北川原公会堂	調査報告書ページ仕立て作業，入稿，報告研修会計画
9	02 月 04 日（土）18:30 @北川原公会堂	調査結果の検証，報告研修会の具体化
10	03 月 04 日（土）18:30 @北川原公会堂	研究会総括（成果），さわやか福祉財団へ報告

6. 調査協働 静岡福祉文化を考える会



第2章 サンプル構成・基本属性

この章では、本調査の基本となる「サンプル構成」、「基本属性」をまとめた。

本会が結成した2019年度～2020年度の2年間、「大人対象（20歳以上）」の調査活動に取り組んでいるため、引き続き広く取り組まれている「基本調査」、「世論調査」、「動向調査」等で活用している項目を参考にした。

「基本属性」については、

- | | | | |
|----------|--------|--------|----------|
| 1. 性別 | 2. 年齢別 | 3. 職業別 | 4. 居住形態別 |
| 5. 居住年数別 | 6. 地域別 | 7. 世帯別 | |

の7項目とした。

議論の中で「3. 職業別」については、今日高齢者の社会参加を積極的に呼びかけていることを念頭に、選択肢を、①自営業（農村漁業）、②自営業（商工サービス）、③会社または団体役員、④無職、⑤パートタイム臨時被雇用者、⑥フルタイム被雇用者、⑦収入を伴う仕事はしていない等と幅を広げた。「2. 年齢別」は、60代を考察するうえで、①65歳～69歳を意図的に選択肢に入れた。そして、②70歳～74歳を設けて、①と②で「前期高齢者」の領域を設けた。

さらに、「後期高齢者」を、③75歳～79歳、④80歳以上に区分した。

また、「7. 世帯別」については、選択肢を、①夫婦のみ、②単身世帯、③複世代との同居、④その他の4つとしていたが、③と④を混同している回答があった。

今回の調査実施にあたり、「第1章 調査の概要」で述べたとおり、これまで3年間実施してきた、「調査票」から、今回の調査実施の趣旨に基づく、「設問」として、活かせる内容として、「14の設問」を再び採用した。

主な内容は、

- | | |
|------------------|----------------------|
| ① 困ったときの相談相手は誰か | ⑧ 地域の行事や活動参加の有無 |
| ② 生活情報の入手方法 | ⑨ 地域行事や活動の内容 |
| ③ 一人でも安心して暮せる地域か | ⑩ 地域からの活動参加呼びかけへの対応 |
| ④ 地域の人々との交流の有無 | ⑪ 呼びかけの参加の内容 |
| ⑤ 超高齢社会の生活の支え | ⑫ 在宅生活維持のために希望する支援内容 |
| ⑥ 地域コミュニティの在り方 | ⑬ とともに、助け合う地域づくりの環境 |
| ⑦ ご近所との行き来 | ⑭ 地域の見守りの支援体制の有無 |

である。

考察にあたり、今回の調査結果との比較・考察し、地域社会の変化を併せて把握することを確認した。新たな「設問」として、「18の設問」を組み込んだ。

主な設問内容を挙げると、

- | | |
|----------------|-----------------------------|
| ✓ 「生活の不安の有無」 | ✓ 「ホッとする居場所はどこか」 |
| ✓ 「家族関係」 | ✓ 「これまでの人生を振り返る」 |
| ✓ 「高齢者の果たす役割」 | ✓ 「これからも、住み慣れた地域で生活するための環境」 |
| ✓ 「生活圏域の親しい関係」 | ✓ 「有償ボランティアの活用」 |
| ✓ 「ご近所の付き合い」 | ✓ 「居場所の運営に望むこと」 |

等である。

- ◆ このたびの調査の回答実数は、**315名**であることが確認できた。
- ◆ 設問 1.の問 1.～問 7.の項目の回答において、一部重複回答と無回答があり、回答状況が315名に達しないところと、315名以上の集計項目が見受けられた。
本会としては、この点を安易に、主催者の立場で処理することなく、高齢者の回答選択肢を尊重し、個々の集計実数をもって表示した。
- ◆ パーセンテージは、小数点以下の扱いをせず、整数表示としている。

				行計	項合計	項目内比
設問1	問1	性別	男性	①	136	43%
		女性	②	177	313	57%
	問2	年齢	65歳～69歳	①	46	15%
			70歳～74歳	②	83	27%
			75歳～79歳	③	89	29%
			80歳以上	④	94	312
	問3	職業	自営業(農村漁業)	①	11	4%
			自営業(商工サービス)	②	13	4%
			会社または団体役員	③	4	1%
			無職	④	189	61%
			パートタイム臨時被雇用者	⑤	28	9%
			フルタイム被雇用者	⑥	6	2%
			収入を伴う仕事はしていない	⑦	59	310
	問4	居住形態	持ち家	①	319	99%
			公営借家	②	0	0%
			民営借家	③	2	1%
			間借り	④	2	1%
			その他()	⑤	0	323
	問5	今の地域の居住年数	5年未満	①	4	1%
			10年未満	②	6	2%
			20年未満	③	38	12%
			20年以上	④	263	311
	問6	居住地域	港第1・4自治会	①	174	56%
			港第2・3自治会	②	139	313
	問7	世帯状況	夫婦のみ	①	130	43%
			単身世帯	②	36	12%
			複数世代との同居世帯	③	121	40%
			その他()	④	13	300

1. 性別

(1) 男性…136名 (43%)

(2) 女性…177名 (57%)

- ✓ 性別では、本会として、均等に調査票を配布していないが、2年前に実施した調査の男性47%、女性53%と比較すると、若干男性は少ないが、大きく差がない範囲内で、本事業を考察することができた。

2. 年齢別

(1) 65歳～69歳…46名 (15%)

(3) 75歳～79歳…89名 (29%)

(2) 70歳～74歳…83名 (27%)

(4) 80歳以上…94名 (30%)

- ✓ 今回の調査では、高齢者を対象とした「地域の支え合い」の意見をもとに考察するうえで、年齢別回答は、重要な意義を持つ。特に、「前期高齢者層」と「後期高齢者層」の意識と実態の考察も考慮するよう努力した。
- ✓ 結果的には、年代層が高まるに従い、回答者が多い状況にある。置き換えれば、「前期高齢者層」42%に対して、「後期高齢者層」58%と、「後期高齢者層」が積極的な回答を寄せている。
- ✓ 調査の回答過程から、高齢者の思いは、年齢が重なるごとに、本調査への思いが多く寄せられている。

3. 職業別

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| (1) 自営業（農村漁業）…11名（4%） | (5) パートタイム臨時被雇用者…28名（9%） |
| (2) 自営業（商工サービス）…13名（4%） | (6) フルタイム被雇用者…6名（2%） |
| (3) 会社または団体役員…4名（1%） | (7) 収入を伴う仕事はしていない…59名（19%） |
| (4) 無職…189名（61%） | |

- ✓ 回答結果から、明らかに、高齢者の社会参加の傾向は多い。「無職」61%の回答以外は、何等かの形で、日常的に地域のつながりを有していることがわかる。

4. 居住形態別

- | | |
|-------------------|----------------|
| (1) 持ち家…311名（99%） | (4) 間借り…2名（1%） |
| (2) 公営借家…0名（0%） | (5) その他…0名（0%） |
| (3) 民営借家…2名（1%） | |

- ✓ 回答者の99%が、ご近所との関わりができる環境にある「持ち家」である。その意味では、「地域社会との関わり合い」を、居住環境から考察できる。

5. 居住年数別

- | | |
|------------------|---------------------|
| (1) 5年未満…4名（1%） | (3) 20年未満…38名（12%） |
| (2) 10年未満…6名（2%） | (4) 20年以上…263名（85%） |

- ✓ ①20年以上…263名（85%）、②20年未満…38名（12%）、③10年未満…6名（2%）、④5年未満…4名（1%）の回答順。高齢者の居住年数から、約97%はご近所との関わりが可能な環境である。

6. 居住地域別

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| (1) 港第14自治会…174名（56%） | (2) 港第23自治会…139名（44%） |
|-----------------------|-----------------------|

- ✓ 今回の調査目的から、会員中心に取り組む活動であったが、地縁団体の「自治会・町内会」や、志縁団体の「さわやかクラブ」、「地区民生委員児童委員協議会」の多大な協力により、本会の活動領域である「港地域づくり推進会」（港第14・23自治会）における調査に取り組むことができた。

7. 世帯状況別

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| (1) 夫婦のみ…130名（44%） | (3) 複世代との同居…115名（39%） |
| (2) 単身世帯…36名（12名） | (4) その他…13名（4%） |

- ✓ 回答結果から、①夫婦のみ…130名（44%）、②複世代との同居…115名（39%）、③単身世帯…36名（12名）、④その他…13名（4%）とそれぞれの世帯生活状況から、地域ぐるみで支え合う環境に対する意識と実態の回答の考察が求められる。



【「ホッとできる安心した地域づくり その意識と実態調査」調査項目とクロス集計】

今回の調査の考察については、「地域共生社会調査研究部会」及び「定例研究会」の協議で、下記のよ
うなクロス集計をもとに考察することができた。

設問No.・区分・内容		基本属性							
		1 性別	2 年齢層	3 職業	4 居住形態	5 居住年数	6 居住地域	7 世帯状況	
2	生活状況	暮らし向きについて	●	●		●	●	●	
3		現在の生活上の不安について	●	●			●	●	●
4		毎日の暮らしの中で困ったとき、誰に相談するか	●	●			●	●	●
5		日常生活における生活情報源について	●	●	●	●	●	●	●
6		親しくしている友人・仲間はどの程度か	●	●				●	
7		家族を大切にしているか	●	●				●	
8	家庭・家族	家族はどのような意味を持つか	●	●			●	●	●
9		家族と食事をどのようにとっているか	●	●	●			●	●
10		子どもとともに生活したいか	●	●				●	
11		一番家族が必要だと感じる時はいつか	●	●			●	●	●
12		家族の中で高齢者が果たす役割について	●	●		●	●	●	●
13		地域意識	「一人でも安心して暮せる地域である」と思うか	●	●			●	●
14	自分の住んでいる地域の人々との交流について		●	●	●		●	●	●
15	“超高齢社会”における、今日の「生活の支え」		●	●			●	●	●
16	地域コミュニティについて		●	●				●	
17	これから参加してみたい興味のある地域活動		●	●			●	●	
18	地域実態	あのときは良かったと今感じる内容について	●	●			●	●	●
19		ご近所の人とお付き合いについて	●	●	●		●	●	●
20		ご近所に親しくしていき来する家があるか	●	●			●	●	●
21	地域参加動向	地域の行事や活動に参加しているか	●	●	●		●	●	●
22		(設問21.で)主に「参加している」内容	●	●	●			●	
23		地域活動への参加	●	●				●	
24		(設問23.で)主な活動内容	●	●				●	
25		(設問23.で)主な理由	●	●	●			●	
26	地域環境	一番安心(ホッと)できる場所について	●	●			●	●	●
27		在宅生活を維持していくために必要と思われる支援	●	●				●	
28		共に助け合う地域環境	●	●			●	●	●
29		「地域ぐるみで見守り活動」をする支援体制はあるか	●	●			●	●	●
30		今の地域で暮らし続けるために必要と思われること	●	●			●	●	●
31		生活上困ったときの「有償サービス」支援の利用	●	●				●	
32		「居場所」の運営(環境)	●	●				●	
33	提言	意見・提言	●	●					

第3章 調査結果

第3章では、焼津市港地域づくり推進会管内（港第14・23自治会）における65歳以上の高齢者315名から回答をいただいた、「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」を単純集計結果と、第2章 サンプル／基本属性に基づき、クロス集計結果をまとめた。このたびの「32の設問項目」を大きく「7つの領域」に分けて考察した。また、今回の調査に協力いただいた関係者からの意見を加えた。

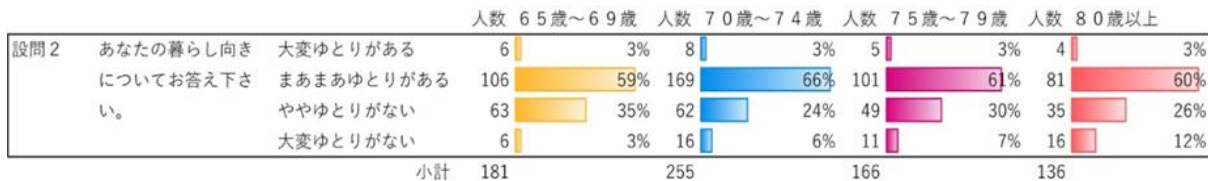
- (1) 高齢者の生活状況に関する項目（設問2.～設問6.）
 - ① 高齢者の暮らし向きの現状について
 - ② 高齢者の現在の生活上の不安は何か
 - ③ 毎日の暮らしの中で困ったとき、だれに相談をするか
 - ④ 日常の生活の福祉の情報源はなにか
 - ⑤ 親しくしている友人・仲間の状況について
- (2) 高齢者の家庭・家族に関する項目（設問7.～設問12.）
 - ① 家族を大切にしているか
 - ② 家庭はどのような意味を持っているか
 - ③ 家族と食事をどのようにとっているか
 - ④ 子供とともに生活をしたいか
 - ⑤ 一番家族が必要だと感じる時はいつか
 - ⑥ 家庭の中で、高齢者の果たす役割はどのようなことか
- (3) 高齢者の地域との関わり（意識）に関する項目（設問13.～設問17.）
 - ① あなたの地域は、「一人でも安心して暮らせる地域」であるか
 - ② 自分の住んでいる地域の人々との交流についての考え方
 - ③ “超高齢社会”の今の「生活の支え」について
 - ④ あなたの地域のコミュニティの考え方について
 - ⑤ これから参加してみたい興味のある地域活動について
- (4) 高齢者の地域との関わり（実態）に関する項目（設問18.～設問20.）
 - ① 人生を振り返り「あの時はよかった」と感じる内容
 - ② ご近所の人とおつきあいについて
 - ③ ご近所に、親しく行き来する家の有無
- (5) 高齢者の地域参加の動向に関する項目（設問21.～設問25.）
 - ① 地域の行事や活動の参加の有無
 - ② 参加している内容
 - ③ 「地域づくり」に参加呼び掛けがあった時の参加の有無
 - ④ 参加したい活動の内容
 - ⑤ 参加したくない理由について
- (6) 高齢者の地域環境に関する項目（設問26.～設問32.）
 - ① 一番安心（ホッと）できる場所について
 - ② 地域で困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて
 - ③ とともに、助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすいか
 - ④ あなたの地域に、「地域ぐるみで見守り活動」の支援体制はあるか
 - ⑤ 今の地域で暮らし続けるために必要と思われること
 - ⑥ 生活上困ったときに「有償サービス」の利用について
 - ⑦ 地区住民同士がひと時を過ごす「居場所」の運営について
- (7) 「ホッとする、安心した地域づくり」に関する意見・提言（設問33.）
- (8) 調査協力者から寄せられた意見

1. 高齢者の生活状況に関する項目（設問 2. ～設問 6.）

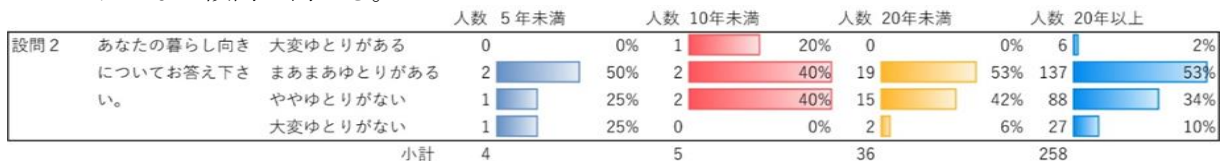
設問2. 高齢者の暮らし向きに関する現状について



- ✓ 暮らし向きは、「経済的状況」と「精神的状況」の面からみると、全体的には、「まあまあゆとりがある」54%、「大変ゆとりがある」2%を合わせると56%と半数以上が「ゆとりがある」と回答。「ややゆとりがない」34%、「大変ゆとりがない」10%で、約43%は「ゆとりがない」と回答。男女別でも、ほぼ同じ傾向である。

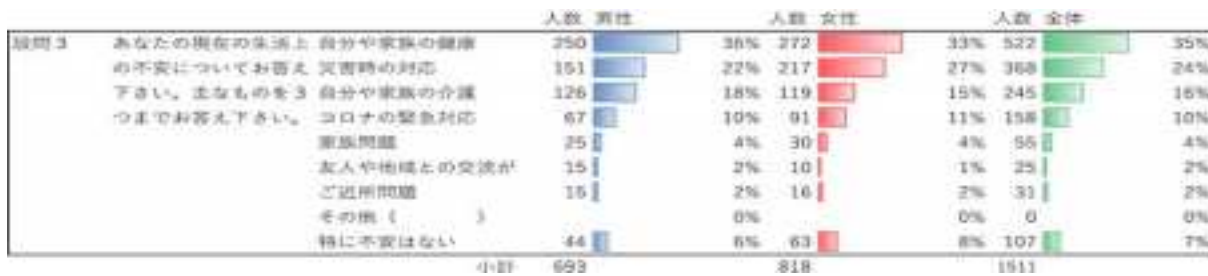


- ✓ 年代別では、70～74歳は、他の領域よりも、ややゆとりがあるとの回答が伺える。65～69歳では、他の領域よりも「ゆとりがある」の回答状況が低い。70～74歳を前後して、生活のゆとりがない傾向が伺える。



- ✓ 居住年数から、生活のゆとりを考察すると、「全体的にゆとりがある傾向」は、5年未満50%、10年未満60%、20年未満53%、20年以上55%。ここでは、10年未満が60%と高く、次に20年以上55%、20年未満53%である。10年未満を前後して生活のゆとりが分かれる。居住形態別では、少数回答ではあるが、間借りの回答ではゆとりのない傾向が伺える。

設問3. 高齢者の現在の生活上の不安は何か



- ✓ 高齢者の現在の生活上に不安についての回答結果では、全体の結果から、回答の多い順にまとめると、①自分や家族の健康35%、②災害時の対応28%、③自分や家族の介護16%、④コロナの緊急対応11%、⑤特に不安はない4%、⑥家族問題4%、⑦ご近所問題各2%、⑧友人や地域との交流がない1%。



- ✓ 年齢別に考察すると、全体的には、加齢とともに不安要素が伺える。全体の考察と大きな開きはないが、「自分や家族の介護」は、65～69歳で回答が多いことが伺える。このことは、実社会における動きが伺える結果である。また、「特に不安はない」の回答では、65～69歳6%、75～79歳5%の回答をしている。それなりに生活基盤が確立している年代とも読み取れる。



- ✓ 世帯状況別で、現在の生活上の不安は何かの考察では、全体的には、一番回答の多い不安内容は「夫婦のみ」では、「自分や家族の健康」35%、「単身世帯」では、「災害時の対応」31%、「複世代との同居世帯」は「自分や家族の健康」35%の回答状況である。「特に不安はない」の回答では、単身世帯の6%、次に夫婦のみ4%、複世代との同居世帯各5%の回答。

設問4. 毎日の暮らしの中で困ったとき、誰に相談をするか

- ✓ 全体的な考察では、回答の多い順にまとめると①家族37%、②友人・知人22%、③親戚関係17%、④医師・保健師、近所の人各6%、⑤特に困ったことはない5%、⑥地域包括支援センター2%、⑦自治会・町内会関係者、民生委員児童委員、利用している介護事業所関係者、社会福祉協議会各1%。回答内容から、地域ではなく身内関係と受け止められる。また、少しずつ、公的制度等を活用した問題解決に努力されていることが伺える。性別では、男性よりも女性の方が、友人・知人、親戚関係への相談の割合が多い。年齢別回答では、80歳以上になると、近所の人回答が伺える。



- ✓ 世帯状況別に見ると、「夫婦のみ」では、「家族」40%、「友人・知人」23%、「親戚関係」18%。「単身世帯」では、「友人・知人」29%、「家族」20%、「親戚関係」13%、「近所の人」10%。「複世代との同居」では、「家族」37%、「友人・知人」21%、「親戚関係」19%、「医師・保健師」6%、「近所の人」5%。この結果から、「単身世帯」は、「友人・知人」や「近所の人」を重視していることがわかる。

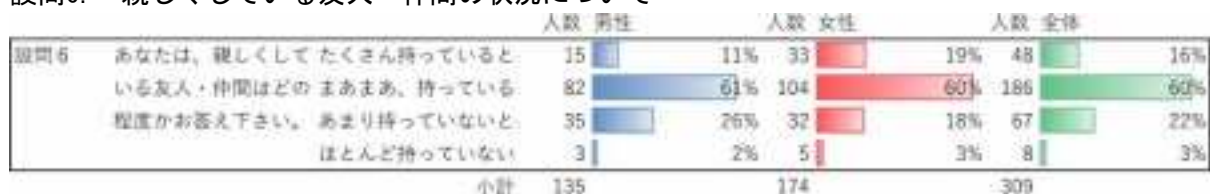


設問5. 日常生活の福祉の情報源は何か



- ✓ 全体の回答状況を多い順にまとめると、①ラジオ・テレビ 25%、②新聞 21%、③家族 18%、④知人・友人 13%、⑤スマホ・パソコン 12%、⑥回覧板 6%、⑦行政広報誌(紙)等 2%、⑧社会教育施設(公民館だより等)、自治会発行広報誌(紙)等、町内会発行広報誌(紙)等 1%で、マスメディアの傾向が多い。家族の日常的な生活の会話の中から得る情報は意義ある回答と感じる。地域の機能を維持していくための回覧板の位置づけの課題が見える。性別にみると、家族、友人・知人からは、女性の方が多い。スマホ・パソコンは、男性の方が多い。回覧板は、女性の方が多く回答している。
- ✓ 年齢別にみると、共通的に、ラジオ・テレビが多い。友人・知人からは、70～74歳までは、加齢化とともに多い傾向にある。スマホ・パソコンは、65～69歳までは23%と多く、加齢とともに低く、80歳以上では5%と低い。
- ✓ ここで、高齢者への生活情報源を考察すると、マスコミからの情報入手が大きく浮き彫りになっている。また、家族や友人からの情報も頼りにしている。従来、身近な地域において重視されている回覧板機能は、この調査結果から、住民同士が、今後維持していく上で、活用方法を創意工夫することが求められる。新たに、高齢者に向けて浮かびあがってきたのは、スマホ・パソコンによる情報入手の課題である。65～74歳の年代層では、約2割が情報入手に活用していることが伺える。
- ✓ 世帯状況別に、情報入手の多い順に見ると、「夫婦のみ」では、「新聞」「ラジオ・テレビ」23%、「家族」19%、「友人・知人」「スマホ・パソコン」13%、「回覧板」5%、「行政広報誌」2%、「社会教育施設」「自治会発行広報誌」「町内会広報誌」各1%。「単身世帯」では、「ラジオ・テレビ」27%、「新聞」17%、「友人・知人」15%、「回覧板」13%、「家族」10%、「スマホ・パソコン」9%、「行政広報誌」、「社会教育施設」、「自治会発行広報誌」各2%、「町内会広報誌」1%。「複世代との同居世帯」では、「ラジオ・テレビ」26%、「家族」「新聞」20%、「友人・知人」13%、「スマホ・パソコン」11%、「回覧板」5%、「行政広報誌」2%、「社会教育施設」「自治会発行広報誌」、「町内会広報誌」1%。

設問6. 親しくしている友人・仲間の状況について



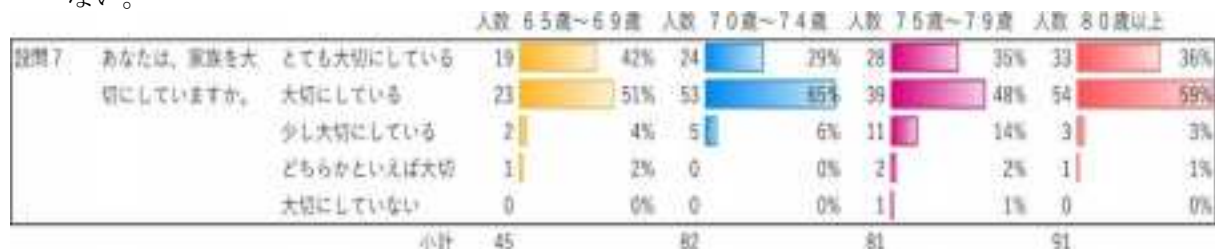
- ✓ 全体的な考察では、「持っている」傾向が76%、「持っていない」傾向が25%。約1/4が親し

2. 高齢者の家庭・家族に関する項目（設問 7. ～設問 12.）

設問7. 家族を大切にしているか



- ✓ 全体的な考察では、「家族を大切にしている」は91%と高い。性別、年齢別でも、ほぼ変わらない。



- ✓ 年代別では、75～79歳の回答では、「大切にしている」が83%で、他の年代層と比較すると10%と程低い回答である。

設問8. 家庭はどのような意味を持っているか



- ✓ 全体的には、「休憩安らぎの場」31%、「家族の団らんの場」27%、「家族の絆を強める場」20%、「家族が共に成長する場」16%、「夫婦の愛情を育む場」2%、「子どもを産み育てる場」、「子どもをしつける場」、「親の世話をする場」各1%である。性別は、全体の回答とほぼ同じである。家庭・家族機能が明確に回答されている。



- ✓ 年代別に回答の多い順にみると、65～69歳は「家族の団らんの場」28%、70～74歳「休憩安らぎの場」34%、75～79歳「休憩安らぎの場」29%、80歳以上「休憩安らぎの場」32%と、若干の違いが伺える。



- ✓ 世帯状況別では、単身世帯は「休憩安らぎの場」、「家族が共に成長する場」、「家族の絆を強める場」、「家族の団らんの場」の順。夫婦のみ世帯は、「休憩安らぎの場」、「家族の団らんの場」、「家族の絆を強める場」、「家族が共に成長する場」の順。複世代との同居世帯では、「家族の団らんの場」、「休憩安らぎの場」、「家族の絆を強める場」、「家族が共に成長する場」と、多少受け止め方が異なる回答である。夫婦のみ世帯と単身世帯は、休憩安らぎを求めた回答となっている。複世代との同居世帯は、家族間の関係を大切にする意見と感じられる。



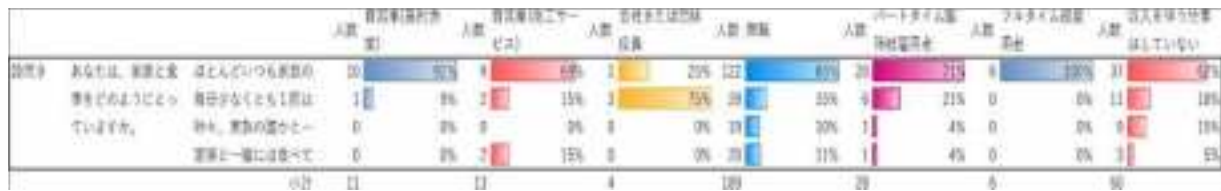
- ✓ 居住年数別結果では、5年未満と20年以上は、「休憩安らぎの場」、10年未満と20年未満は「家族団らんの場」の回答がそれぞれ多い。

設問9. 家族と食事をどのようにしているか

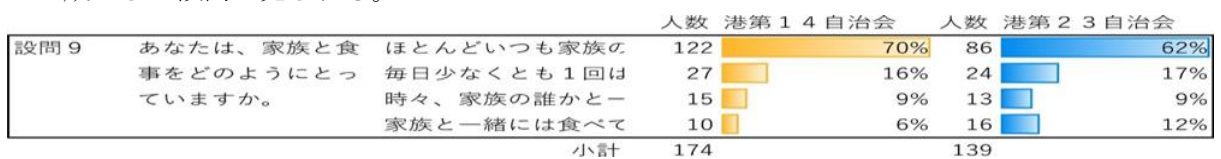
ここでは、高齢者が日常生活における家庭・家族との関係の一面を把握する目的で設問とした。



- ✓ 全体の回答結果では、「ほとんどいつも家族の誰かと一緒に食べている」66%、「毎日少なくとも1回は家族の誰かと一緒に食べている」16%、「時々、家族の誰かと一緒に食べている」9%、「家族と一緒に食べていない」8%（単身世帯）。性別では、やや、女性の方が、家族と食事をとることが少ない回答が伺える。女性の単身世帯が「家族と食事をとっていない」が51%の回答と関連性を持つ。男性は0%である。

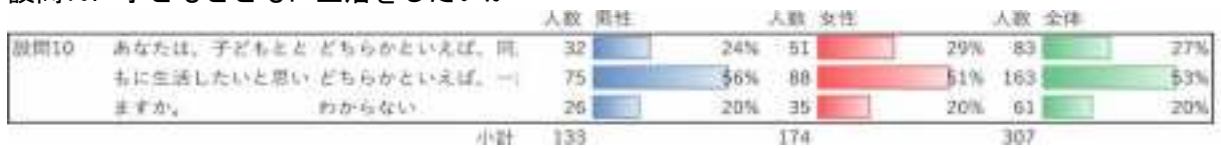


✓ 年齢別では、80歳以上が14%、65～69歳で7%が「家族と一緒に食事をとっていない」と回答している。単身世帯と同居していても、家族構成から一緒に食事をとることができない状況と伺える。職業別で見ると、「家族と一緒に食事をとっていない」が「無職」11%は家族構成からの傾向と見られる。

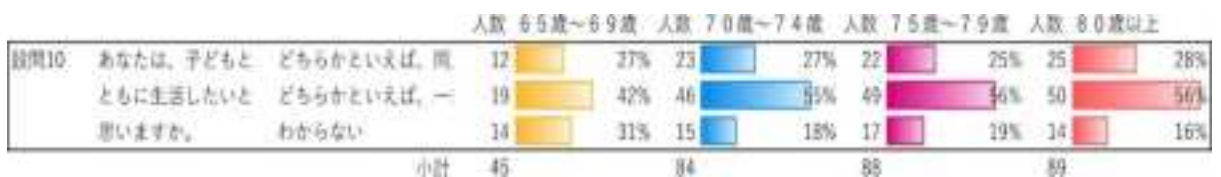


✓ ここで、地域別の傾向をみると、「ほとんどいつも家族の誰かと一緒に食べている」第14自治会は70%、第23自治会は、62%。「家族と一緒に食べていない」は、第14自治会は6%、第23自治会は12%の回答結果である。

設問10. 子どもとともに生活をしたいか



✓ 子どもとの同居についての回答結果では、全体的には、回答の多い順に、「どちらかといえば、一緒に住みたい」53%、「どちらかといえば、同居したくない」27% 「わからない」20%と「同居したい」回答が多い。これを性別にみると、「同居したい」傾向は同じであるが、男性の方がより同居したい意向が強いことが伺える。

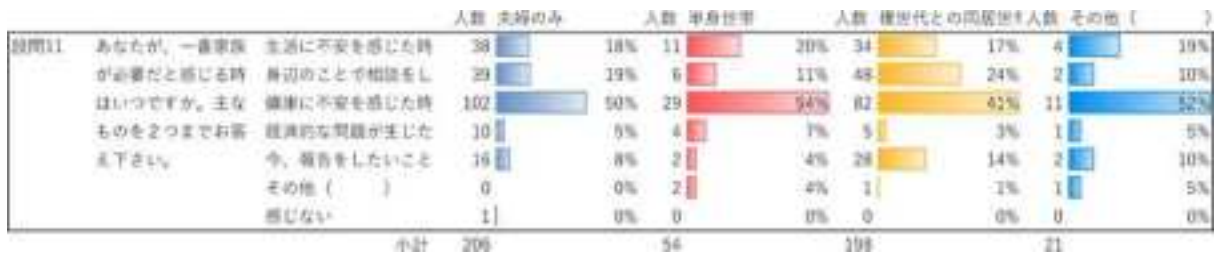


✓ 年代別にみると、どの年代も「子どもとの同居を望む」回答結果であるが、加齢とともに、その意向は高い回答である。65～69歳では、「わからない」31%と多い。子どもとの同居を多方面から考察していく時代でもある。子ども側からの回答も含めた「共生社会」を考察する課題がある。子どもの独立心と高齢者の自立の両面の課題を今後につなげたい。

設問11. 一番家族が必要だと感じる時はいつか



- ✓ 高齢者が、家族を一番必要と感じる時の回答では、全体的には、回答の多い順に、「健康に不安を感じたとき」47%、「身近のことで相談をしたいとき」19%、「生活に不安を感じたとき」18%、「今、報告をしたいことが生じたとき」10%、「経済的な問題が生じたとき」4%。性別、居住年数の領域では、ほぼ、全体的結果と同じ傾向である。



- ✓ 世帯状況別にみると、全体的な結果とほぼ同じ回答状況であるが、単身世帯における「健康に不安を感じたとき」の回答が54%と、他の領域よりも回答が多い。複世代との同居世帯では、「今、報告したいこと」14%、「身近のことで相談したいこと」24%は、身近な生活問題での解決策として、他の領域よりも回答率が高い。



- ✓ 年齢別にみると、ほぼ、全体的・性別の結果とほぼ同じ傾向であるが、80歳以上では、特に「健康に不安を感じたとき」53%と、他の年齢層よりも多い回答である。この回答は、単身世帯の回答との関連性がある。

設問12. 家庭の中で、高齢者の果たす役割はどのようなことか



- ✓ 家庭の中で、高齢者の果たす役割の回答結果は、全体的では、回答の多い順にあげると「家族・親族の相談相手になる」29%、「家族の支え手」27%、「家事を担う」19%、「家族や親族関係の取りまとめ役」9%、「病気や障害を持つ家族の面倒を見る」2%、「子どもの世話」1%。



- ✓ 年齢別では、どのような変化があるかを考察した結果、65～69歳、70～74歳は「家族・親族の相談相手になる」、75～79歳では「家族の支え手」、80歳以上は「家事を担う」の回答が多い。加齢とともにその認識は深まっていることが伺える。

		人数	5年未満	人数	10年未満	人数	20年未満	人数	20年以上
図解11 あなたは、家庭の中で高齢者の果たす役割はどのようなことだと思いますか。	家事を担う	1	25%	0	0%	0	0%	19	22%
	家族・親族の相談相手になる	1	25%	4	8%	10	43%	13	27%
	家族や親族関係の取りまとめ	0	0%	0	0%	3	14%	26	9%
	家族の支え手になる	1	25%	1	1%	13	56%	14	27%
	子供の世話	0	0%	0	0%	1	3%	3	1%
	病気や障害を持つ家族の面倒を見る	0	0%	0	0%	1	3%	4	2%
	その他()	0	0%	0	0%	0	0%	3	1%
わからない	1	25%	1	1%	1	3%	20	31%	
小計		4		6		37		274	

- ✓ 居住年数別にみると、5年未満では、「わからない」が25%、10年未満、20年未満では、「家族・親族の相談相手になる」、20年以上では、「家族・親族の相談相手になる」、「家族の支え手」とその認識は広がっている。

		人数	夫婦のみ	人数	単身世帯	人数	複世代と同居世帯	人数	その他()
図解12 あなたは、家庭の中で高齢者の果たす役割はどのようなことだと思いますか。	家事を担う	22	14%	11	31%	19	15%	4	11%
	家族・親族の相談相手になる	39	28%	7	19%	43	34%	4	11%
	家族や親族関係の取りまとめ	9	7%	4	11%	16	13%	1	8%
	家族の支え手になる	44	32%	5	14%	35	28%	2	15%
	子供の世話	1	1%	0	0%	3	2%	0	0%
	病気や障害を持つ家族の面倒を見る	7	5%	0	0%	1	1%	0	0%
	その他()	0	0%	2	8%	0	0%	0	0%
わからない	15	11%	7	19%	10	8%	2	15%	
小計		137		36		127		13	

- ✓ 世帯状況からの考察では、夫婦のみの世帯では、「家族の支え手になる」32%、単身世帯では、「家事を担う」31%、複世代と同居世帯では、「家族や親族の相談相手」34%と異なる回答。

【高齢者の家庭・家族に関する考察】

- 「家族を大切にしている」の回答は91%と高い。性別、年齢別でも、ほぼ変わらない。
- 「家庭はどのような意味を持っているか」の全体的な回答は、「休憩安らぎの場」、「家族の団らんの場」、「家族の絆を強める場」、「家族が共に成長する場」、「夫婦の愛情を育む場」、「子どもを産み育てる場」、「子どもをしつける場」、「親の世話をする場」の順である。65～79歳までは、「家族の団らんの場」、70～79歳・80歳以上では、「休憩安らぎの場」の回答が多い。単身世帯は、「休憩安らぎの場」、「家族が共に成長する場」、「家族の絆を強める場」の回答が多い。
- 家族との食事のとり方を、家族関係を考察する目的で調査した結果、全体の回答結果では、「家族と食事をとる」回答が約8割強であった。女性の単身世帯の51%が「家族と食事をとっていない」の回答であった。
- 子どもとの同居についての全体の回答結果は、53%が「同居を望む」、「同居を望まない」27%と別れた。性別にみると、「同居したい」傾向は同じであるが、男性の方がより同居したい意向が強いことが伺える。65～69歳では、「わからない」31%と多いが、なかでも「同居したい」意向は42%と多い。現在の社会問題を踏まえて、子どもと親それぞれの「社会的自立」とともに、いかに「共生社会」を築き上げるかを、世代を超えて考えていく課題が浮き彫りになっている。
- 家族を一番必要と感じる時の全体の回答の多い順に、「健康に不安を感じたとき」、「身近なことで相談をしたいとき」、「生活に不安を感じたとき」、「今、報告をしたいことが生じたとき」、「経済的な問題が生じたとき」、「感じない」。80歳以上の「健康に不安を感じたとき」54%は、他の年齢層よりも多い回答である。そして、単身世帯における「健康に不安を感じたとき」の回答が49%と他の領域よりも回答が多い。ここから、これからの生活の維持は、「健康であること」の認識が強い。
- 家庭の中で、高齢者の果たす役割の全体の回答結果は、多い順に「家族・親族の相談相手になる」、「家族の支え手」、「家事を担う」、「家族や親族関係の取りまとめ役」、「病気や障害を持つ家族の面倒を見る」、「子どもの世話」。65～69歳では「家族・親族の相談相手になる」35%と高い。また、70～74歳も「家族・親族の相談相手になる」33%と高い。75～79歳では、「家族の支え手」34%と高い回答である。

3. 高齢者の地域との関わり（意識）に関する項目（設問 13. ～設問 17.）

設問13. あなたの地域は、「一人でも安心して暮らせる地域」であるか



- ✓ 「一人でも安心して暮らせる地域であるか」の全体的な回答結果は、「強く思っている」13%、「少し思っている」53%、「あまり思っていない」20%、「まったく思っていない」3%、「わからない」11%。「安心して暮らせる地域である」が66%で「安心して暮らせる地域ではない」は、「わからない」を含めて34%の回答である。



- ✓ 年齢別に考察すると、「安心して暮らせる地域である」回答は、「65～69歳」80%、「70～74歳」61%、「75～79歳」61%、「80歳以上」68%と、世代により、受け止め方に少し変化がある。「わからない」の回答については、地域に関わる努力の必要性が感じられる。



- ✓ 居住年数別では、「強く思っている」「少し思っている」を合わせて、「安心して暮らせる地域である」回答は、「5年未満」25%、「10年未満」83%、「20年未満」73%、「20年以上」64%。居住年数が短い「5年未満」層では否定的回答となっている。また、「わからない」の回答が、65～69歳では、50%と高く、それぞれの地域の実情を十分知る状況にはないように感じる。加齢とともに、地域の良さを受け止めているが、80歳以上では、現状を含めた不安感からやや疑問視の割合である。



- ✓ 地域別では、「強く思っている」港第14自治会12%に対して、港第23自治会は、16%と高い。「安心した地域」は、港第23自治会73%に対して、港第14自治会61%と12%の開きがある。「わからない」は、港第23自治会の9%に対して、港第14自治会は12%と高い。地域への関わりを更に積極的に強めていき、「見える化」の工夫が求められる。

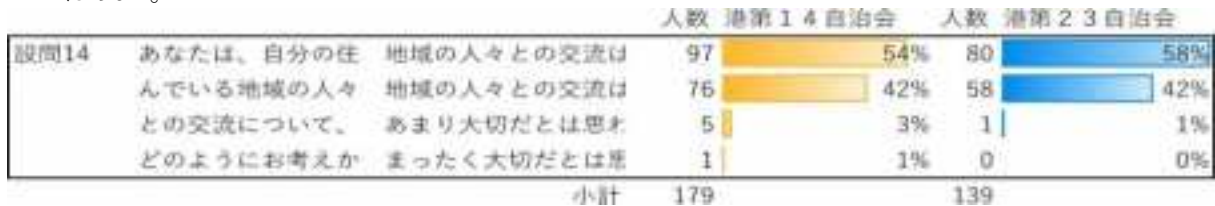
設問14. 自分たちの住んでいる地域の人々との交流についての考え方



- ✓ 全体的な考察では、回答の多い順に、「地域の人々との交流は大切である」55%、「地域の人々との交流はどちらかといえば大切である」43%、「あまり大切だとは思わない」2%、「まったく大切だとは思わない」0%。性別の回答結果は、同じ傾向であるが、女性の方が男性よりも「地域の人々との交流は大切である」は、7%高い。年齢別では、全体的回答と同じ回答状況であるが、80歳以上では99%と高い。しかし、65～69歳では、「あまり大切だとは思わない」回答が8%ある。職業別、居住年数別、地域別、世帯状況別も、ほとんど「交流の必要性」の回答である。



- ✓ 世帯状況別の「交流の必要性」は、単身世帯100%、夫婦のみ世帯98%、複世代との同居世帯は96%。

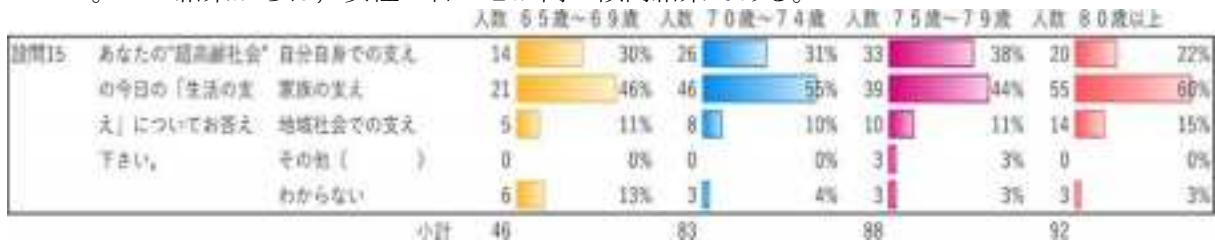


- ✓ 地域別の回答をみると、「あまり大切だとは思わない」「全く大切だとは思わない」は、港第14自治会4%、港第23自治会1%である。

設問15. “超高齢社会”の今の「生活の支え」について



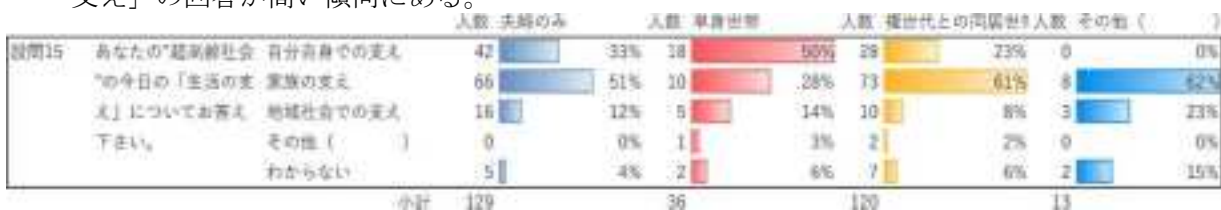
- ✓ “超高齢社会”の今の「生活の支え」の全体的回答の多い順に、「家族の支え」52%、「自分自身での支え」30%、「地域の支え」12%、「わからない」5%。性別の回答傾向は、全体的回答と同じ傾向であるが、「自分自身での支え」男性27%に対して、女性32%と5%女性の回答が高い。「家族の支え」男性54%に対して女性は51%、男性の「家族の支え」が女性よりも3%高い。この結果からは、女性の自立心が高い傾向結果である。



- ✓ 年齢別では、「80歳以上」では、「家族の支え」が60%と高い回答。「75～79歳」では、「家族の支え」44%、「自分自身の支え」38%と、他の領域よりも、自立度は高い回答結果である。

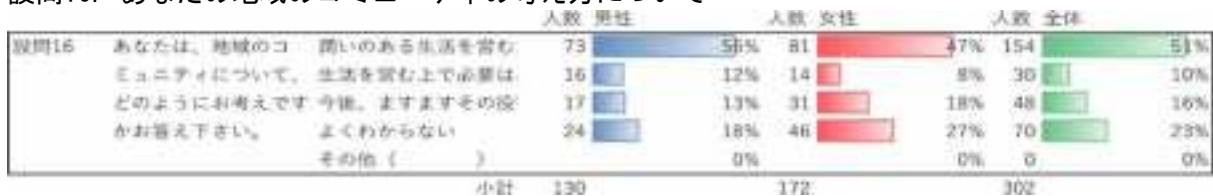


- ✓ 居住年数別では、「5年未満」では、「自分自身での支え」50%、「家族の支え」50%と高い。10年未満は、「家族の支え」67%と「わからない」33%が目立つ。居住年数が長いほど、「家族の支え」の回答が高い傾向にある。



- ✓ 世帯状況別では、「夫婦のみ」は、「家族の支え」51%、「自分自身での支え」33%。「単身世帯」では、「自分自身での支え」が50%と高い。「複世代との同居世帯」では、「家族の支え」61%と高く、「自分自身での支え」は23%にとどまっている。

設問16. あなたの地域のコミュニティの考え方について



- ✓ 「地域のコミュニティの考え方」の全体的な回答の多い順に、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」51%と多い反面、「よくわからない」23%の回答である。更に、地域への関心を高め、若い世代に責任をもってつなぐ地域づくりの課題が浮き上がっている。「今後、ますますその役割は薄れてくる」16%、「生活を営む上で必要は感じていない」10%と合わせると「やや悲観的」回答が26%ある。性別では、前向きな回答は、女性の47%に対して、男性は55%と約9%男性が高い回答である。「わからない」回答が男性18%より女性27%と、約9%女性の方高い回答になっている。



- ✓ 年齢別の回答では、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」は、80歳以上53%、65～69歳53%、70～79歳49%。加齢とともに、関心度が薄れているのか「わからない」の回答が多い傾向である。

設問17. これから参加してみたい興味のある地域活動について



- ✓ 全体的回答の多い順に、趣味や特技を生かせる活動 33%、特にない 23%、高齢者を対象にした健康交流の活動 22%、環境美化に関する活動 7%、世代間交流ができる学習活動、身近な地域防災に関する活動、世代間交流ができる文化伝承活動各 5%。性別では、女性は男性よりも高齢者を対象にした健康交流の活動」の回答が 9%多い。「高齢者の地域参加」を課題にした

		人数 65歳～69歳	人数 70歳～74歳	人数 75歳～79歳	人数 80歳以上			
図解17	あなたがこれから参加してみたい趣味の、ある地域活動についてお答え下さい。	趣味や特技を生かせる	環境美化に関する活動	高齢者を対象とした健康交流ができる学習	世代間交流ができる文化	身近な地域防災に関する	その他()	特にない
		18	3	5	4	2	1	9
		43%	7%	12%	10%	5%	2%	21%
		30	18	0	0	6	0	20
		35%	21%	0%	10%	7%	0%	23%
		27	22	5	5	3	1	23
		30%	24%	5%	5%	2%	1%	25%
		29	23	4	3	4	0	18
		37%	26%	4%	3%	4%	0%	20%
	小計	42	86	91	90			

- ✓ 年齢別では、加齢化とともに、「高齢者を対象にした健康交流の活動」が多い回答。各年代層でも、約 2 割層が「特にない」と回答している。

【高齢者の地域との関わり（意識）に関する考察】

- 約 7 割が「一人でも安心して暮らせる地域」と受け止めているが、「安心して暮らす地域ではない」「わからない」等を含めると、約 3 割が安心して暮らせる地域ではない回答である。居住年数別では、10 年前後を境に「地域の暮らし」に悲観的回答が寄せられている。特に、「5 年未満」の回答の半数が否定的な回答であるが、居住年数が長くなると、やや否定的傾向の回答結果である。年齢別では、加齢とともに地域の暮らしをやや悲観している回答傾向である。
- 地域の人との交流については、「地域の人々との交流は大切である」55%、「地域の人々との交流はどちらかといえば大切である」43%と、ほぼ回答者全てが意識的に前向きな回答している。しかし、具体的な関わりは薄いように感じる。性別回答は、いずれも「交流の必要性」を回答としている。世帯状況別では、単身世帯の全てが、交流の大切さを回答されている。
- 「“超高齢社会”の今の生活の支え」の回答の多い順に、「家族の支え」52%と半数以上の回答。次に、「自分自身での支え」30%、「地域の支え」12%、「わからない」5%。性別では、男性の「家族の支え」が女性よりも 3%高く、女性の自立心が高い傾向が伺える。特に、「自分自身での支え」男性 27%に対して、女性 32%と 5%女性の回答が高い。「80 歳以上」では、「家族の支え」が 52%と高い回答。居住年数別では、「5 年未満」では、「自分自身での支え」、「家族の支え」が各 50%。そのほかは、「家族の支え」の回答が多い。世帯状況別では、「夫婦のみ世帯」、「複世代との同居世帯」は、「家族の支え」が半数を超えているが、「単身世帯」では、「自分自身での支え」50%と高い。
- 本会では、これまで「地域のコミュニティの考え方」について、年々、希薄化の傾向にあると強調してきたが、今回、高齢者対象の調査では、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」51%と高い回答。性別では、男性の方が、コミュニティへの期待感が高い。加齢化とともに、「わからない」の回答が多い傾向。
- 「これから、参加してみたい地域活動」の回答では、回答の多い順に、「趣味や特技を生かせる活動」33%、「特にない」23%、「高齢者を対象にした健康交流の活動」22%、「環境美化に関する活動」7%、「世代間交流ができる学習活動」、「身近な地域防災に関する活動」、「世代間交流ができる文化伝承活動」各 5%。性別では、女性は男性よりも「高齢者を対象にした健康交流の活動」の回答が 9%多い。「高齢者の地域参加」を課題にしたとき、「特にない」回答層への働きかけの課題がある。年齢別では、加齢化とともに、「高齢者を対象にした健康交流の活動」が多い回答。各年代層でも、約 2 割層が「特にない」と回答。高齢者の積極的な地域参加の働きかけの課題は大きい。

4. 高齢者の地域との関わり（実態）に関する項目（設問 18. ～設問 20.）

設問18. 人生を振り返り「あの時はよかった」と感じる内容



- ✓ この設問では、高齢者の時代回想により、今日の地域社会のあり方を問い質していただく目的で実施した。
- ✓ 「人生を振り返り、あの時はよかったと感じる内容」の全体的に回答の多い順に主な内容をまとめると、①家族との和やかなひととき 20%、②健康・スポーツ・レクリエーション活動 18%、③子どもたちの元気な姿 17%、④趣味仲間との活動 13%、⑤近所同士の交流 9%、⑥町内会活動 6%、⑦自治会活動・行事・高齢者との交流（居場所・サロン・ミニデイサービス等）・運動会・老人クラブ各 2%等となっている。家族→仲間→ご近所→コミュニティ活動が描かれている。
- ✓ 性別では、男性は「健康・スポーツ・レクリエーション活動」「家族との和やかなひととき」、「子どもたちの元気な姿」の回答が多く、女性は、「家族との和やかなひととき」、「健康・スポーツ・レクリエーション活動」「子どもたちの元気な姿」の回答順であった。
- ✓ 年齢別で回答の多い内容をまとめると、65～69歳「子どもたちの元気な姿」、「健康・スポーツ・レクリエーション活動」、「家族との和やかなひととき」「趣味仲間との活動」、70～74歳・75～79歳「家族との和やかなひととき」、「子どもたちの元気な姿」、「健康・スポーツ・レクリエーション活動」、80歳以上「健康・スポーツ・レクリエーション活動」、「家族との和やかなひととき」、「ご近所同士の交流」、「趣味仲間との活動」。

設問19. 近所の人との付き合いについて



- ✓ 全体的な回答の多い順にあげると、外で立ち話をする程度 28%、会えば挨拶する程度 25%、おすそ分けをする関係 22%、相談に応じる関係を持つ 6%、お茶や食事を一緒にする関係 5%、家事やちょっとした用事も頼める 5%、ご近所のしきたりに従う 5%。
- ✓ 性別では、男性は、会えば挨拶する程度→外で立ち話をする程度、女性は、外で立ち話をする程度→おすそ分けをする関係と、より社交的な関係を維持している。また、男性にはない、

お茶や食事を一緒にする関係をもっている。年齢別では、大きな違いは見られない。



- ✓ 居住年数別の回答の多い内容では、5年未満「会えば挨拶する程度」、「おすそ分けする関係」「ご近所のしきたりに従う」、10年未満「会えば挨拶する程度」、「おすそ分けする関係」、「外で立ち話をする程度」、20年未満「外で立ち話をする程度」、「会えば挨拶する程度」、「おすそ分けする関係」、20年以上「外で立ち話をする程度」、「会えば挨拶する程度」、「おすそ分けする関係」。「おすそ分けの関係」は、共通して回答している。

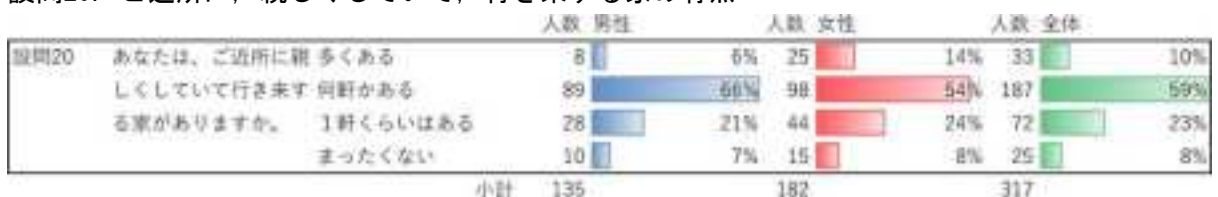


- ✓ 世帯状況別では、夫婦のみ「外で立ち話をする程度」→「会えば挨拶をする程度」、単身世帯では、「おすそ分けする関係」→「会えば挨拶をする程度」、複世代との同居世帯では、「外で立ち話をする程度」→「会えば挨拶をする程度」→「おすそ分けする関係」。単身世帯の回答からは、積極的にご近所への関わりに努めている一面が伺える。
- ✓ 居住年数別では、年数が長くなるにつれて、「おすそ分け」、「お茶や食事を一緒にする」、「相談に応じる」等踏み込んだ付き合いがみられる。



- ✓ 地域別をみると、港第23自治会は、「外で立ち話をする程度」が31%と高く、その次が「会えば挨拶する程度」25%、「おすそ分け」23%、「お茶や食事を一緒にする」6%と、港第14自治会よりも高い回答率である。

設問20. ご近所に、親しくして、行き来する家の有無



- ✓ 「ご近所に、親しくして、行き来する家はあるか」の全体的な回答結果は、「何軒かある」59%、「多くある」10%、「1軒くらいはある」23%、「まったくない」8%。性別では、女性は、「多

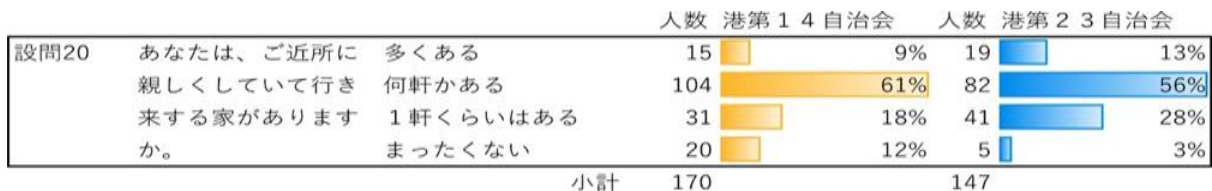
くある」14%に対して、男性は6%である。「まったくない」は、男性7%に対して、女性は8%であるが、全体的には、ご近所との関わりは、女性の方が積極的である回答結果である。



- ✓ 年齢別では、65～69歳「全くない」16%と高く、「80歳以上」は4%と、加齢とともに、ご近所との関わりは多い回答である。居住年数は、長いほど、ご近所の付き合いは良いと伺える。



- ✓ 世帯状況別で、ご近所との付き合いの多い回答順では、複世代との同居世帯 75%、夫婦のみ 73%、単身世帯 47%と、単身世帯の地域での孤立の傾向が伺えるが、一軒程度はある 42%と自助努力は伺える。単身世帯への近隣地域の歩み寄りの課題がある。



- ✓ 地域別をみると、港第23自治会は、「近所との付き合いがまったくない」3%と、近隣との関係づくりは、港第14自治会より維持されている回答である。

【地域との関わり（実態）に関する考察】

1. 地域との関わりの実態を、「人生を振り返り、あの時はよかったと感じる内容」から把握することを試みた結果回答の多い順にまとめると、「家族」（家族との和やかなひと時・子どもたちの元気な姿）→「仲間」（健康・スポーツ・レクリエーション活動・趣味仲間との活動）→ご近所（近所同士の交流）→コミュニティ活動（町内会活動・地域のお祭り・自治会活動（行事）・高齢者との交流（居場所）・サロン・ミニデイサービス等）が描かれている。加齢とともに、「家族」から「仲間」へと広がっている。
2. ご近所の人とのつきあいは、外で立ち話をする程度→会えば挨拶する程度→おすそ分けする関係→相談に応じる関係を持つ→お茶や食事を一緒にする→家事やちょっとした用事も頼める関係→ご近所のしきたりに従う→趣味を共にする・病気の時に助け合う、と広がっている。ここで明らかになったことは、男性のご近所との関係は、女性よりも消極的である。世帯状況別では、夫婦のみ「外で立ち話をする程度」→「会えば挨拶をする程度」、単身世帯では、「おすそ分けする関係」→「会えば挨拶をする程度」、複世代との同居世帯では、「外で立ち話をする程度」「おすそ分けする関係」と、共に高い回答結果である。単身世帯の回答からは、積極的にご近所への関わりに努めている一面が伺える。
3. さらに、ご近所における親しい関係を具体的に回答した結果では、やはり、女性は男性よりも、積極的な付き合いが伺える。年齢別では、加齢とともに、ご近所との関わりは多い回答である。居住年数が長くなるほど、ご近所とのつながりは関係が深まっている。世帯状況別で、ご近所との付き合いの多い回答順では、複世代との同居世帯→夫婦のみ世帯→単身世帯と、単身世帯の地域での孤立の傾向は伺えるが、個人的つながり（一軒程度）の自助努力が回答結果から伺える。本会が、福祉文化の視点で「ご近所福祉」の意義を強調している中で、今回の調査から、厳しいコロナ禍で少なからず、歩み寄りの「ご近所福祉の再構築」の課題が浮かび上がっている。

5. 高齢者の地域参加の動向に関する項目（設問 21. ～設問 25.）

設問21. 地域の行事や活動の参加の有無



- ✓ 「地域の行事や活動に参加しているか」の全体的な回答の多い順では、「時々参加している」58%、「積極的に参加している」28%、「ほとんど参加していない」14%。「参加している」回答は88%と高い。性別では、「ほとんど参加していない」は、男性12%に対して、女性の方が15%とやや高い。年齢別では、ほぼ8割以上が参加の回答。「ほとんど参加していない」は、65～69歳13%、80歳以上が18%と回答。職業別では、「ほとんど参加していない」回答は、「フルタイム被雇用者」33%、「会社または団体役員」25%、「無職」18%、「パートタイム臨時被雇用者」14%、「収入を伴う仕事はしていない」11%。



- ✓ 世帯状況別では、単身世帯の方も、地域行事に参加の努力をしていることが伺える。

設問22. 参加している内容



- ✓ 地域の行事や活動に参加している主な内容を回答の多い順にあげると、①防災訓練33%、②清掃活動28%、③自治会・町内会活動18%、④奉仕活動6%、⑤地域の祭り5%、⑥健康・スポーツ関連行事・趣味活動各4%、⑦文化関連行事・交通安全活動各1%等である。

設問23. 「地域づくり」の参加呼びかけがあったときの参加の有無



- ✓ 「地域づくりへの参加の呼びかけについて」、全体的な調査結果は、「呼掛けがあれば参加してもよい」74%と高い。「ぜひ、参加したい」8%で、前向きな参加の回答が約8割と高い。「参加したくない」18%。性別では、参加に前向きな回答は、男女とも同じ回答。年齢別では、ほぼ約8割は参加に前向きな回答。

設問24. 参加したい活動の内容

	人数 男性	人数 女性	人数 全体
設問24 設問23で「①ぜひ参加したい呼びかけがあれば参加してもよい」と回答の方にお伺いします。主な活動を2つまでお答え下さい。	15	9	8
子育てや子どもの見守り	16	32	48
高齢者や障害者への支援	40	64	104
介護者や介護を必要とします。主な活動	6	13	19
自治会・町内会等運営内容	20	13	33
を2つまでお答え下さい。	23	6	29
防災・防犯等生活安全	19	20	39
スポーツ・文化・レクリエーション等	11	18	31
世代を超えた趣味・地域行事等交流活動	0	1	1
青少年健全育成活動	3	14	17
高齢者同士の見守り	8	4	12
生活改善（環境美化・緑化・まちづくり等）	5	2	7
生産就労（農園芸・飼育・シルバー人材センター）	5	2	7
教育・文化活動（学習会・子供会育成・郷土芸能等）	0	1	1
その他（ ）	3	9	12
特になし	3	9	12
小計	176	217	393

- ✓ 回答の多い内容順にあげると、①健康づくりや生きがいづくり 26%、②高齢者や障がい者への支援（買い物・家事・移送等）12%、③スポーツ・文化・レクリエーション等の活動 10%、④子育てや子どもの見守り・世代を超えた趣味、地域行事等交流活動・自治会・町内会運営の参画各 8%、⑤防災・防犯等生活安全に関する活動 7%、⑥介護者や介護を必要とする方への支援 5%、⑦高齢者同士の見守り 4%、⑧生活改善（環境美化・緑化・まちづくり等）・特になし各 3% ⑨教育・文化活動（学習会・子供会育成・郷土芸能等）・生産就労（農園芸・飼育・シルバー人材センター） 2%。

設問25. 参加したくない理由について

	人数 男性	人数 女性	人数 全体
設問25 設問23で「③参加したくない」と答えた人	2	10	12
に、主な理由を2つまでお答え下さい。	5	7	12
自分に合った活動がない	7	4	11
健康でない	8	7	15
費用が掛かる	1	2	3
近くに活動がない	0	0	0
情報が入らない	0	1	1
一緒に活動する人がいない	1	1	2
参加のきっかけがない	1	1	2
参加したいと思わない	4	5	9
社会の動きが気になる	0	0	0
その他（ ）	1	3	4
小計	30	41	71

- ✓ 「参加したくない」18%の回答者の全体的な主な意見は、「健康でない」21%が一番多い回答。次に、「時間がない」、「興味がわからない」各 17%、「自分に合った活動がない」15%、「参加したいと思わない」13%、「費用が掛かる」4%、「参加のきっかけがない」、「一緒に参加する人がいない」各 3%、「情報が入らない」1%。
- ✓ 性別でみると、男性で一番多い回答は「健康でない」27%、「自分に合った活動がない」23%、「興味がわからない」17%、「参加したいと思わない」13%。女性では、「時間がない」24%、「健康でない」、「興味がわからない」各 17%、「参加したいと思わない」13%、「自分に合った活動がない」10%、「費用が掛かる」5%等があげられている。

		人数 65歳～69歳		人数 70歳～74歳		人数 75歳～79歳		人数 80歳以上		
設問25	設問23で「③参加したくない」と答えた人に、主な理由を2つまでお答え下さい。	時間がない	5	28%	2	13%	2	13%	3	14%
		興味がわからない	3	17%	2	12%	4	27%	3	14%
		自分に合った活動がない	4	22%	3	19%	2	13%	1	5%
		健康でない	2	11%	6	38%	1	7%	6	29%
		費用が掛かる	0	0%	0	0%	3	20%	0	0%
		近くに活動がない	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		情報が入らない	0	0%	0	0%	0	0%	1	5%
		一緒に活動する人がい	0	0%	1	6%	1	7%	0	0%
		参加のきっかけがない	1	6%	0	0%	1	7%	0	0%
		参加したいと思わない	2	11%	1	6%	1	7%	5	24%
		社会の動きが気になる	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
		その他()	1	6%	1	6%	0	0%	2	10%
		小計	18		16		15		21	

- ✓ 年代別では、65～69歳「時間がない」28%、70～74歳「健康でない」38%、75～79歳「興味がわからない」27%、80歳以上「健康でない」29%が主な回答。

【地域参加の動向に関する考察】

1. 高齢者の日頃の地域参加の状況については、約9割と、「前向きに参加している」回答である。男性よりも、やや女性の方が消極的傾向の回答であった。65～69歳、80歳以上では、やや消極的傾向の回答である。世帯状況からは、単身世帯の社会参加の努力が伺える。
2. 高齢者の「地域の行事や活動に参加している主な内容」を回答の多い順にあげると、①防災訓練33%、②清掃活動28%、③自治会・町内会活動18%、④奉仕活動6%、⑤地域の祭り5%、⑥健康・スポーツ関連行事・趣味活動各4%、⑦文化関連行事・交通安全活動各1%等である。
3. 「地域づくりへの参加の呼びかけについて」、全体的には、「呼掛けがあれば参加してもよい」74%と高い。「ぜひ、参加したい」8%を合わせると、前向きな参加の回答が約8割と高い。性別では、ほぼ同じ回答で参加は前向きである。
4. 「参加したい活動の内容」の多い順に、①健康づくりや生きがいづくり26%、②高齢者や障がい者への支援（買い物・家事・移送等）12%、③スポーツ・文化・レクリエーション等の活動10%、④子育てや子どもの見守り・世代を超えた趣味、地域行事等交流活動・自治会・町内会運営の参画各8%、⑤防災・防犯等生活安全に関する活動7%、⑥介護者や介護を必要とする方への支援5%、⑦高齢者同士の見守り4%、⑧生活改善（環境美化・緑化・まちづくり等）・特になし各3%、⑨教育・文化活動（学習会・子供会育成・郷土芸能等）・生産就労（農園芸・飼育・シルバー人材センター）2%。
5. 「参加したくない」全体的な意見は、「健康でない」21%が一番多い回答。次に、「時間がない」、「興味がわからない」各17%、「自分に合った活動がない」15%、「参加したいとは思わない」13%、「費用が掛かる」4%、「参加のきっかけがない」、「一緒に参加する人がいない」各3%、「情報が入らない」1%。性別でみると、男性で一番多い回答は「健康でない」27%、「自分に合った活動がない」23%、「興味がわからない」17%、「参加したいと思わない」13%。女性では、「時間がない」24%、「健康でない」「興味がわからない」各17%、「参加したいと思わない」13%、「自分に合った活動がない」10%、「費用が掛かる」5%等があげられている。今後の課題として、住み慣れた身近な地域において、高齢者が健康でいきいきと積極的に、地域参加をし、地域全体で、つなぐ・つながる仕組みづくりが出来るかである。

6. 高齢者の地域環境に関する項目（設問 26. ～設問 32.）

設問26. 一番安心（ホッと）できる場所について

設問26	あなたの一番安心（ホッと）できる場所についてお聞いします。	人数 男性		人数 女性		人数 全体	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
	家庭・家族	118	81%	143	77%	261	79%
	ご近所	2	1%	6	3%	8	2%
	友人との付き合い	16	11%	24	13%	40	12%
	趣味仲間	9	6%	7	4%	16	5%
	地域の「居場所・サロン」	0	0%	3	2%	3	1%
	利用している福祉施設	0	0%	2	1%	2	1%
	社会教育施設(公民館)	0	0%	1	1%	1	0%
	その他（ ）	0	0%	0	0%	0	0%
	なし	0	0%	0	0%	0	0%
	小計	145		186		331	

- ✓ 「あなたの一番安心（ホッと）できる場所」について、全体的な回答結果の多い順にまとめると、①家庭・家族 79%、②友人との付き合い 12%、③趣味仲間 5%、④ご近所 1% ⑤地域の「居場所・サロン」・利用している福祉施設各 1%。性別では、女性は、①家庭・家族 77%、②友人との付き合い 13%、③趣味仲間 4%、④ご近所 3% ⑤地域の「居場所・サロン」2% ⑥利用している福祉施設・社会教育施設（公民館）各 1%。男性は、①家庭・家族 81%、②友人との付き合い 11%、③趣味仲間 6%、④ご近所 1%で、男性の社会性は、女性よりも弱い傾向が伺える。年齢別では、ほぼ、同じ傾向の回答であるが、加齢とともに、「地域の居場所・サロン」や「利用している福祉施設」に移行している傾向である。

設問26	あなたの一番安心（ホッと）できる場所についてお聞いします。	人数 夫婦のみ		人数 単身世帯		人数 複世代との同居世帯		人数 その他（ ）	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
	家庭・家族	113	85%	29	58%	102	80%	13	93%
	ご近所	4	3%	1	2%	1	1%	0	0%
	友人との付き合い	10	8%	11	26%	18	14%	0	0%
	趣味仲間	5	4%	4	9%	6	5%	0	0%
	地域の「居場所・サロン」	1	1%	1	2%	1	1%	0	0%
	利用している福祉施設	0	0%	0	0%	0	0%	1	7%
	社会教育施設(公民館)	0	0%	1	2%	0	0%	0	0%
	その他（ ）	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	なし	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
	小計	133		43		128		14	

- ✓ 世帯状況別の回答結果では、「家庭・家族」は、夫婦のみ世帯 85%、複世代との同居世帯 80%と高い回答であるが、単身世帯 58%で、「友人との付き合い」26%、「趣味仲間」9%へと広がりを見せている。

設問27. 地域で困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて

- ✓ 「今後、あなたが困った状態のとき、地域において、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービス」の全体的に多い回答順の結果では、①見守り・声掛け（安否確認）30%、②災害時の手助け 13%、③移動支援 10%、④同行（買い物・通院等）9%、⑤話し相手 7%、⑥掃除（草取り）6%、⑦ゴミ出し簡単な介助・介護各 5%、⑧定期的なふれあいサロン（居場所）・配食各 4%、⑨調理・簡単な修理各 2%、⑩墓の掃除・洗濯・趣味特技の援助各 1%。性別、年齢別は、全体の回答と傾向はほぼ同じである。

設問27	今後、あなたが地域において、困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについてお聞いします。	人数 性別 1～4 回答者		人数 性別 5～9 回答者	
		人数	割合	人数	割合
	見守り・声掛け(安否確認)	112	30%	91	24%
	移動支援	34	9%	33	11%
	同行(買い物・通院等)	32	8%	33	11%
	配食	16	4%	9	3%
	子育て支援	1	0%	0	0%
	ゴミ出し	13	3%	24	8%
	調理	7	2%	4	1%
	定期的なふれあいサロン(居場所)	14	4%	14	5%
	掃除(草取り)	17	5%	21	7%
	災害時の手助け	58	15%	29	9%
	話し相手	23	6%	25	8%
	趣味・特技の援助	5	1%	5	2%
	簡単な介助・介護	24	6%	12	4%
	洗濯	4	1%	2	1%
	小動物の世話	0	0%	3	1%
	墓の掃除	2	1%	2	1%
	簡単な修理	11	3%	3	1%
	その他()	4	1%	0	0%
	小計	377		310	

設問27	内容	人数 男性		人数 女性		人数 全体	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
	今後、あなたが地域に「見守り・声かけ(家畜種	92	32%	111	38%	203	30%
	において、困った状態の相談支援	37	13%	31	10%	68	10%
	時、畜産法を維持し 同行(買い物・酒飲等、	23	8%	42	14%	65	9%
	ていくために必要と思 制度	10	3%	16	5%	26	4%
	われる支援、サービ ス 等で支援	0	0%	1	0%	1	0%
	について、主なものを ごと出し	18	6%	19	6%	37	5%
	コトまでお答えする 制度	2	1%	0	0%	11	2%
	い。	0	0%	10	3%	28	4%
	相談(車取り)	12	4%	26	9%	38	6%
	言葉時の手助け	44	15%	43	14%	87	13%
	話し相手	16	5%	31	10%	47	7%
	趣味・特技の援助	7	2%	2	1%	9	1%
	簡単な介助・介護	16	5%	21	7%	37	5%
	洗濯	1	0%	5	2%	6	1%
	小動物の世話	1	0%	2	1%	3	0%
	お墓の管理	0	0%	4	1%	4	1%
	簡単な修理	4	1%	10	3%	14	2%
	その他()	0	0%	4	1%	4	1%
	小計	292		396		688	

✓ 地域別では、港地域づくり推進会管内といえども、港第14自治会と港第23自治会の福祉ニーズの違いがあることが、今回の調査から明らかになっている。

設問28. とともに、助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすいか

設問28	内容	人数 男性		人数 女性		人数 全体	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
	あなたは、ともに助け 地域が抱えている課題	58	26%	47	17%	105	21%
	合う地域づくりに向け 一緒に活動する人(仲	75	33%	105	38%	180	36%
	で、どのような環境が 一人ひとりが気軽に参	52	23%	89	33%	141	28%
	れば活動しやすい 団体や活動に関する情	6	3%	5	2%	11	2%
	ると思いますか。主な 長期休暇や労働時間の	2	1%	0	0%	2	0%
	ものを2つまでお答え ボランティア休暇など	9	4%	10	4%	19	4%
	下さい。 退職等により、時間	11	5%	6	2%	17	3%
	公共的な活動を積極的	12	5%	5	2%	17	3%
	どんな環境でも活動し	1	0%	4	1%	5	1%
	その他()	1	0%	2	1%	3	1%
	小計	227		273		500	

✓ 「ともに、助け合う地域づくりに向けて、どのような環境があれば活動しやすいか」の全体的な回答結果は、

- ① 一緒に活動する人(仲間)がいること … 36%
- ② 一人ひとりが気軽に参加できる活動の機会があること … 28%
- ③ 地域が抱えている課題の情報が提供されていること … 21%
- ④ ボランティア休暇など、公共的な活動に参加しやすい仕組みがあること … 4%
- ⑤ 公共的な活動を積極的に評価し、支援する仕組みがあること … 3%
- ⑥ 退職等により、時間的なゆとりができること … 3%
- ⑦ 団体や活動に関する情報の入手が容易い … 2%
- ⑧ どんな環境でも活動したいとは思わない … 1%

✓ 性別では、「地域が抱えている課題の情報が提供されていること」は、男性の回答の方が多い。女性は、男性より「一緒に活動する人(仲間)がいること」を望んでいる回答である。後は、全体の回答とほぼ同じ傾向。年齢別、世帯状況別、地域別とも、回答結果は、全体的な回答と同じ傾向である。「どんな環境でも活動したいとは思わない」の回答は1%と少ない。

設問29. あなたの地域に「地域ぐるみで見守り活動」の支援体制はあるか

設問29	内容	人数 男性		人数 女性		人数 全体	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
	あなたの地域には、 地域が一体となって積	8	6%	22	13%	30	10%
	「地域ぐるみで見守り ある程度地域住民が取	59	44%	55	33%	114	38%
	活動」をやる支援体制 どちらかというと消極	16	12%	12	7%	28	9%
	はありますか。 ほとんど活動はしてい	10	8%	9	5%	19	6%
	わからない	40	30%	71	42%	111	37%
	小計	133		169		302	

✓ 「地域に、地域ぐるみで見守り活動の支援体制はあるか」の全体的な回答結果は、「地域が一体

となって積極的に取り組んでいる」10%、「ある程度地域住民が取り組んでいる」38%で、「見守り体制がある」回答は約5割であるが、「どちらかというとな消極的な取り組みである」9%、「ほとんど活動はしていない」6%で、「地域全体への広がりではない」15%の回答から、地域全体への広がりではなく、関係者の認識の範囲内にとどまっている傾向にある。「わからない」回答37%からは、具体的な福祉活動を「見える化」していく課題がある。



✓ 年齢別回答からは、65～69歳、80歳以上の年代層では、「わからない」回答が多いことが伺える。特に、80歳以上の回答が約5割である。



✓ 世帯状況別では、支援体制の認識は約5割であるが、単身世帯の回答では、「わからない」42%と高い回答結果である。複世代との同居世帯32%、夫婦のみ世帯38%の回答結果であるいずれにせよ、こうした福祉活動の取り組みの必要性を、いかに全世代に啓発していくかの課題がある。居住年数別からも、さらに、きめ細かな啓発活動が求められる。

設問30. 今の地域で暮らし続けるために必要と思われることは何か



✓ 新たな設問項目「今の地域で暮らし続けるために必要と思われること」の全体的結果の多い回答順は、

- ① ご近所の支え合い … 29%
- ② 身近な人の見守りと助言体制 … 18%
- ③ コミュニティ組織体制の確立 … 13%
- ④ 身近なところでの「居場所」の開設 … 9%
- ⑤ 相談体制や情報提供の充実 … 8%
- ⑥ 地縁団体(自治会・町内会)の積極的な歩み寄り … 7%
- ⑦ 市町行政の地域への積極的な歩み寄り … 6%
- ⑧ 福祉人材の養成 … 3%
- 福祉団体の地域への積極的な歩み寄り … 3%
- ⑨ 企業・学校・地域社会での「福祉教育」の推進 … 2%
- NPO法人等志願団体による困りごと支援体制 … 2%

- ✓ 高齢者の身近な生活圏域における、つながる関係を強く求めている回答結果が伺える。生活圏域での住民個々の語れる環境を、いかに住民相互の努力で築き上げあげられるか、また、自治会・町内会運営における地域環境づくりと行政等の地域への歩み寄りも浮き彫りになっている。
- ✓ 性別回答については、男性の「コミュニティ組織体制の確立」の組織意向に対して、女性の「身近な人の見守りと助言体制」と個別意向が異なる回答である。「NPO 法人等志縁団体による困りごと支援体制」の認識は、これからの課題とも伺える。



- ✓ 年齢別では、加齢化とともに、「ご近所のささえあい」、「身近な人の見守りと助言体制」等個別的関わりを求めている傾向がある。居住年数別では、全ての年代で、身近な環境でのつながりを求めている結果である。

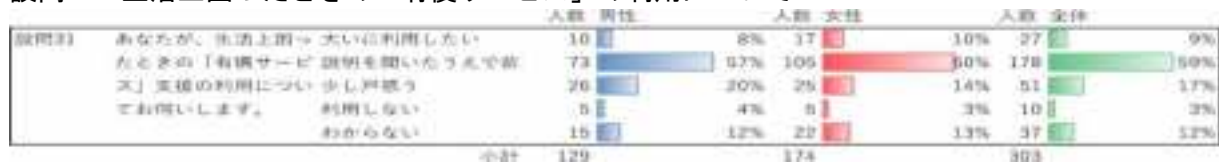


- ✓ 地域別の結果をみると、2つの自治会とも、身近な生活環境における関わりが強く伺える回答である。港第14自治会では、「相談体制や情報提供の充実」を求める回答がある。

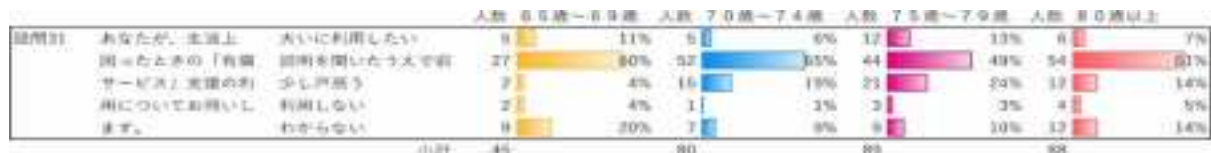


- ✓ 世帯状況別で、目立った回答は、単身世帯は、「身近なところでの「居場所」の開設」14%と高い回答である。「コミュニティ組織体制の確立」6%と低い。より身近な生活圏域でのつながりを期待している。その点では、夫婦のみの世帯や複世代との同居世帯は、組織的な関わりが強い回答傾向にある。

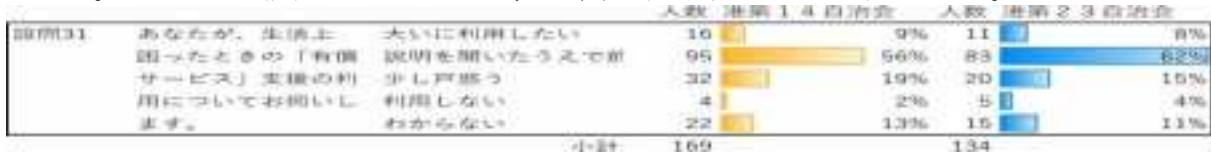
設問31. 生活上困ったときの「有償サービス」の利用について



- ✓ 「生活上困ったときの「有償サービス」支援の利用」の全体的な回答結果では、①「説明を聞いた上で前向きに考えたい」59%、②「少し戸惑う」17%、③「大いに利用したい」9%、④「わからない」12%、⑤「利用しない」3%。福祉活動の「有償化」は、今後さらに、住民への啓発を通じて充実していく課題がある。性別では、女性の方が、制度を有効に活用しようとする傾向が伺える。



- ✓ 年齢別では、若い年代では、「大いに利用したい」「説明を聞いたうえで前向きに考えたい」を合わせると、7割以上が前向きな回答結果であるが、70歳以上では、やや慎重な回答である。これからの福祉のあり方を更に、地域社会に啓発していく課題がある。



- ✓ 地域別では、港第23自治会では、地域の仕組み活用に対する認識はやや高い回答である。また、「わからない」回答もやや少ない。

設問32. 地区住民同士がひと時を過ごす「居場所」の運営について

- ✓ すでに、家庭・家族機能の大きな変化とともに、県内各地において、高齢者等の孤立防止、身近な生活圏域における拠点づくりとして、積極的に取り組まれている「居場所」について、今回の調査項目に、あえて取り上げることにした。これまでの「居場所」から、これからの「居場所」のあり方を問い質すことを狙いに、地域において、地区住民同士がひと時を過ごす「居場所」はどのような運営（環境）であればよいかを回答いただいた。



- ✓ 「高齢者が望む、地域の居場所の運営（環境）」の回答結果は、全体的な考察から見ると、
 - ① 自由にいつでも出入りできる環境 … 62%
 - ② 利用者同士で仲間づくりができる環境 … 17%
 - ③ 自治会・町内会等の主体的な活動としての運営 … 10%
 - ④ ボランティアによる計画的な運営 … 7%
 - ⑤ 利用者が主体となって運営できる環境 … 3%
 - ⑥ 福祉施設が地域貢献活動として運営する環境 … 1%
- ✓ 回答から、考察できることは、「語る、対等で自由な環境が保障されていること」、「参加者が主体であり、上下の関係がなく、対等な関係が維持されていること」、「居場所が参加する住民をつなぎ、共助関係を維持できる」、「地縁団体組織で継続的に維持できる運営基盤が保障されていること」で、「ボランティア主体、福祉施設等の依存」の回答は低い。性別の回答では、女性の方が、男性より、柔軟な自由な環境を求めている。「利用者同士で仲間づくりが

できる環境」は、女性 20%に対して、男性は 13%と協調性でも女性の方が積極的な傾向が伺える。年齢別の回答状況は全体の回答とほぼ同じ。

- ✓ 地域別回答結果では、「自由にいつでも出入りできる環境」は港第 14 自治会 66%，港第 23 自治会 59%と、自由な運営の捉え方が多少違う回答結果である。

【地域環境に関する考察】

1. 高齢者が、安心（ホッと）できる場所（環境）は、「家庭・家族」が一番で、次に「友人との付き合い」、「趣味仲間」、「ご近所」と回答している。男性の社会性は、女性よりも弱い傾向にあり、年齢別では、加齢とともに「家族・家庭」から「地域の居場所・サロン」や「趣味の仲間」「利用している福祉施設」の回答である。また、単身世帯では、「友人との付き合い」「趣味仲間」へと広がり求めている。
2. 地域において、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスは、日頃から身近な生活圏域で、見守り・声掛け（安否確認）、災害時の手助け、移動支援、同行（買い物・通院等）、話し相手、清掃（草取り）、ゴミ出し、簡単な介助・介護、定期的なふれあいサロン（居場所）、配食、調理・簡単な修理、墓の掃除、洗濯、趣味・特技の援助等が求められている結果である。
3. こうした、支援・サービスを地域で維持していくための環境として、「一緒に活動する人（仲間）がいること」が男性よりも女性が多い意見である。「地域が抱えている課題の情報が提供されていること」の“地域を見える化”する課題が浮き彫りになっている。
4. 「地域ぐるみで見守り活動の支援体制はあるか」の回答では、「ある程度地域住民が取り組んでいる」「地域が一体となって積極的に取り組んでいる」で約 5 割を占めている。「わからない」約 4 割の回答から見ると、地域全体への広がりではなく、関係者の認識の範囲内にとどまっている傾向にある。年齢別では、65~69 歳、80 歳以上で「わからない」回答が多い。居住年数別から見ると、加齢とともに、十分な受け止めではない回答傾向である。世帯状況別では、単身世帯の回答では、支援体制の認識は 52%と高いが、複世代との同居世帯 50%、夫婦のみ 46%の意識であるが、「わからない」の回答はいずれも約 3~4 割ある。大きな社会の変化の中で、さらに、地域ぐるみの見守りの必要性を地域全体でいかに取り組んでいくかの課題が浮き彫りになっている。また、「見える化した福祉活動」の課題がある。
5. 高齢者が、住み慣れた身近な生活圏域で暮らし続けるために必要なことは、「ご近所のささえあい」、「身近な人の見守りと助言体制」、「コミュニティ組織体制の確立」、「身近なところでの「居場所」の開設」と、「ご近所福祉そのものである。そして、専門性と市民性の融合の視点で「相談体制や情報提供の充実」が挙げられている。行政と住民との「協働」の視点では、「地縁団体（自治会・町内会）の積極的な福祉活動の取り組み」、「市町行政の地域への積極的な歩み寄り」が浮かび上がっている。いずれにせよ、高齢者の加齢とともに、居住年数別では、年数が長いほど、さらに、身近な環境での個別的な「つながる関係」を強く求めている。「単身世帯」では、「コミュニティ組織体制の確立」よりも、具体的な「居場所」の開設等、より身近な生活圏域でのつながりを求めていることは特記出来る回答である。
6. 私たちの地域環境では、これまで、ボランティア活動における定義として、「自発性」「無償性」「連帯性」をもとに地域活動に取り組んできた。しかし、社会の仕組みが「介護保険制度の導入」とともに、その認識は大きく変化している。今回の調査の実施において、新たな設問項目として「無償性と有償性」について、高齢者に問いかけることにした。「生活上困ったときの“有償サービス”支援の利用」についての全体的な回答結果では、「説明を聞いた上で前向きに考えたい」と、約 6 割の回答であったが、「少し戸惑う」17%、「大いに利用したい」9%、「わからない」12%、「利用しない」3%の回答結果である。福祉活動の「有償化」については、今後さらに、これからの福祉のあり方を広く地域住民に問いかけ、地域社会全体に啓発していく課題がある。

7. 高齢者の地域環境を問う設問として、今日、県内各地域で高齢者等の孤立防止、身近な生活圏域における生活圏域の拠点づくりとして、「これまでの「居場所」から、これからの「居場所」のあり方」を問い質すことを狙いに、積極的に取り組んでいる「居場所の運営（環境）」を取り上げた。すでに、核家族化の時代を迎えて、家庭・家族機能（生み育てる・保護的・福祉的・教育的・情緒安定的・経済的）は、大きく変化をしている。「高齢者が望む、地域の居場所の運営（環境）」の全体的な回答から考察できることは、「語れる、対等で自由な環境が保障されていること」「参加者が主体であり、上下の関係がなく、対等な関係が維持されていること」「居場所が参加する住民をつなぎ、共助関係を維持できる」「地縁団体組織で継続的に維持できる運営基盤が保障されていること」で、「ボランティア主体、福祉施設等の依存」の回答は低い。性別の回答では、女性の方が、男性より、柔軟で自由な環境を求めている傾向にある。

7. 「ホッとする、安心した地域づくり」に関する意見・提言（自由回答）

ここでは、設問 33.の「ホッとする、安心した地域づくり」に関する、自由な意見をまとめた。回想的意見や、現実の意見、これからの託したい意見、身近なご近所から、社会全体からと、幅広い意見が寄せられている。全体で 85 件の意見を「年齢別」、「性別」でまとめた。

「年齢別」では、65～69 歳は 11 件、70～74 歳は 20 件、75～79 歳は 21 件、80 歳以上は 33 件、「性別」では、男性は 49 件、女性は 36 件の意見をいただいた。

➤ 65～69 歳 男性 (9)

- 1 偉そうな態度の人が一人でもいればまともにならない 不愉快になるだけ
- 2 子どもの通学の安全
- 3 自分の暮らしを「自立」させたいので、他への援助を考えたい
- 4 仲間と「わいわいガヤガヤ」といろいろな話をし、酒を飲むとき
- 5 犯罪のない地域
- 6 まだ若いと思っているので地域に依存する体制に違和感がある
- 7 ルールはあまり作りたくないが、均等に役割を分担するようにしたい
- 8 老人クラブ、自治会等の活動で世代を超えて創り上げる
- 9 若者世代をしっかりと大人社会が関わりをもつこと

➤ 65～69 歳 女性 (2)

- 1 気軽に話が出来地域
- 2 困った時にすぐ相談できる、ご近所さんがいたらいい

➤ 70～74 歳 男性 (13)

- 1 イベント・祭・etc、アルコールの力も必須
- 2 お気に入りのコースを歩くこと
- 3 核家族ではなく、昔のように大家族で生活できれば、家族の協力も得られ、各自がさみしい思いをしなくてもすむと思う
- 4 風通しの良い環境を一人一人が意識して育てる
- 5 自助・共助・公助の確立
- 6 心配事や困りごとなどをサポートできる身近なところ
- 7 地域に相談する身近な人がいること
- 8 町内で、早くコミュニケーションを高めたい
- 9 20 年前は、地域がまとまっていたが、今は、なかなか声をかけることもない 家の中で過ごすことが多い 誰もが気軽に話し合いたい
- 10 負担の無い集合体作り

- 11 ほとんどが顔見知り。
- 12 若い世代が地域を知る努力が必要
- 13 対等な関係を持つ

➤ **70～74 歳 女性 (7)**

- 1 屋外での顔の出し合い，活動等，人のいきあう賑やかな社会
- 2 お互いに声を掛け合う
- 3 近所とか友人には困りごとは相談したくない 公共の相談場所を作って宣伝してほしい
- 4 殺伐とした昨今，近所での声掛けでコミュニティを維持
- 5 積極的に声掛けをする人が欲しい（年配者は自分からの発信をしない）
- 6 歳をとったら，気の合う人だけで過ごしたい
- 7 何でも，話が出来ると友人が周りにいてくれるありがたさを，いつも感じている

➤ **75～79 歳 男性 (10)**

- 1 15 号台風時，私の地域では雨による被害はなかった
- 2 行政支援の充実
- 3 区画整理が実施され新旧住民の垣根がなくなった時，新しいコミュニティが生まれる
- 4 公民館が，もう少し気楽に対応し，気軽に活用できるようにしてほしい
- 5 ご近所で気がねなく，いつでも声を掛け合う世代を超えた地域
- 6 ご近所のささえあい
- 7 この地域づくりには，個人情報取得が前提となるが，これを阻む風潮が最大のネックであり寂しい限りだ
- 8 全体的に安全が保障されている地域
- 9 友人が居ること
- 10 老人クラブがなくなった お互い誰もが，心を拓くことが出来る地域づくり 「見守っているよ」「頼りにしているよ」とみんなで笑い合えることが出来ること 多くの人の助けを借りて助かっている 安全安心な街づくりを啓発している 率先して役員になる人がいない 地域を守る意識が少ない

➤ **75～79 歳 女性 (11)**

- 1 挨拶，会釈くらいしましょう
- 2 気を遣わずに雑談できる仲間がほしい
- 3 ご近所さん同士が気楽におしゃべりできたとき
- 4 困ったとき，何処へ相談すべきかわからない
- 5 主人がいない 80 歳ですが，自分のことは自分でできますが，手助けは必要 これからのことが心配です
- 6 常に挨拶できる地域
- 7 隣近所の親同士が子供を交えて良く話をしている
- 8 日頃の声掛けと見守り
- 9 仲間が欲しい
- 10 声を掛けあうこと
- 11 常に会話が出来ると地域

➤ **80 歳以上 男性 (17)**

- 1 外国人の交通ルール無視が多い
- 2 声掛けが容易にできること
- 3 子どもたちへの見守り隊がいてくれて安心
- 4 高齢者が安心して住める高齢者専用のアパートがあれば良い 若い人が多く住んでいる

が、コロナでコミュニケーションが取れない 「居場所」は、小学校の空き教室を使用して子どもたちとの触れ合いを深める

- 5 月1回の公会堂での居場所は、人とのコミュニケーションが出来てよい
- 6 隣近所の人達と家族ぐるみのコミュニケーションを強める
- 7 人と人との絆ができること
- 8 人の噂や嫌がらせのない地域であってほしい
- 9 若い世代の地域理解
- 10 声を掛けあう
- 11 若い世代が、高齢者に向き合う努力
- 12 高齢者が、若い世代の言い分をしっかりと受け止める家庭環境
- 13 家庭を大切にする
- 14 あまり若者に期待しない高齢者自身の努力
- 15 地域に進んで参加する
- 16 地域の伝統を伝える努力
- 17 誘い合って、積極的に地域行事に参加できる環境を創る

➤ 80歳以上 女性 (16)

- 1 2021年度の子供対象の調査は参考になった 福祉に関心を持つ子を育てる活動を続けてほしい
- 2 思いやりと寄り添い
- 3 家族がまず、しっかりした支え合いが出来ること
- 4 家族一人ひとりが支え合える環境作りの努力
- 5 気にかけてくれる人が周囲にいる地域
- 6 声掛けできる地域
- 7 ご近所が日頃から自由に話が出来るとよい
- 8 ご近所同士の支え合い
- 9 子どもたちの朝の挨拶
- 10 困ったとき（買い物・危険物の処理）に手助けしてくれる地域
- 11 世界平和は、住みよい地域や学校から
- 12 月一回のバスでの買い物とても楽しみにしています
- 13 同世代の仲間と久しぶりに笑顔で和える時（集会）
- 14 優しさを持った人がたくさんいること
- 15 若い世代がもう少し高齢者と向き合える努力
- 16 私のできることは、近所のゴミ拾い、犬の糞の片付けなどで通る人の笑顔を見守る

8. 調査協力者等から寄せられた意見

このたびの「調査研究事業」は、港地域づくり推進会管内（港第14・23自治会）の高齢者315名から調査の回答をいただき、ここに「調査報告書」としてまとめることができた。

会員自らが高齢者宅を訪問し、日頃の生活の様子をお聞きしながら、調査の回答をいただく中で、さらに高齢者の生活の現状から、地域社会に期待したい生の意見を伺ったり、民生委員児童委員の皆様や、自治会・町内会関係者等、調査に協力された皆様が取りまとめるにあたり、ご苦労されたことや、このたびの調査事業への思いや期待する尊い意見が本会に寄せられたので、その一部を集約して紹介する。

- 1 今は、多くの人たちのお蔭でここまで地域で生活をしている。こうした調査の回答を通じて、自分の想いを皆さんに発信できることは、とても嬉しく感謝する。一つ一つ、自分を振り返りながら回答していくと、とても勉強になる。（会員が訪問した92歳の方から）

- 2 日頃、地域で生活していても、こうしたコロナが長引くと、さらにご近所の皆さんとの付き合いが難しくなっている。今回、調査を頼まれて、自分自身がいろいろと考えていることを、まとめることが出来てうれしい。多くの高齢者が、もっと地域でお付き合いが出来ると嬉しい。(会員宅に調査票を届けに来られた 93 歳の一人暮らしの方から)
- 3 息子家族と生活をしているが、自分の意見がなかなか分かってもらえないことが多くなった。あまり、きつく言っても、気まずいので、それなりに言葉を慎んでいるが、もっと気軽に言い合える家庭環境をどうしたらつくれるのか、今回の調査の結果がわかったら教えてほしい。(依頼された調査票を居場所開所日に持参して、説明を受けながら回答された 85 歳の女性)
- 4 息子家族と同居しているが、勤めをしているため、日常的に会話も少なく、日中一人暮らしの状態である。もっと、こちらから話しかけをしたいと思うが、気を使ってしまう。(80 代の息子家族と同居している 80 代の女性が、調査票を回収した折の会話の中で)
- 5 同居している息子夫婦との会話もかみ合わないことがしばしばである。(80 代女性)
- 6 ご近所のことを話題に話しかけても関心が薄い。(息子夫婦と同居の 80 代女性)
- 7 区画整理事業で、ご近所も若い世代となっている。これまで、築き上げてきた近所の良さをこれから先も、維持してくれるのか心配である。(80 代女性)
- 8 今では、若い世代層が、高齢者を大事にしてくれないのでさみしい。高齢者の私たちが若い世代層に歩み寄れない努力不足もある。(80 代女性)
- 9 近所の子どもたちは、高齢者には、気軽に声を掛けてくれるが、親たちは、あまり声を掛けたり、挨拶をしたりすることがない。知らないご近所の親にも、声かけられる地域でありたい。どのような働きかけが必要か研究会の方で、考えてほしい。(80 代女性)
- 10 こうした調査の実施はありがたい。多少回答が難しい設問もあるが、説明を受けながら回答をしていけば勉強にもなる。(80 代男性)
- 11 地域社会で、若い世代と高齢者と向き合って、意見を言い合う機会を希望。(60 代男性)
- 12 調査依頼を早めにしたため、回収が思うようにできなかった。調査票の配布と回収時期の工夫。(80 代男性)
- 13 集会のときに、参加者に配布をして回答していただいた。協力的であった。(70 代男性)
- 14 仲間と話しながら記入したら、これまでの生活の話題が出て盛り上がった。(70 代女性)
- 15 何年か間隔で、こうした調査を繰り返し実施していく事も意義あることと感じる。(70 代男性)
- 16 長いこと、この地域で生活していても、現状がわからない。時々調査をしてほしい。(80 代女性)
- 17 調査結果を楽しみにしている。調査結果をみんなで話し合うことも大切。(70 代女性)



第4章 調査のまとめ

1. 「プロセス」重視から取り組んだ高齢者対象の調査の意義

本会は活動を、「さまざまな福祉・ボランティア活動の携わる人と市民と一緒に、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考え、その改善のために努力していく」とし、次の3つの「活動基調」を掲げている。

- 活動基調 1. さまざまな分野で活動する人が、専門分野と世代を超えて交流を図る。
- 活動基調 2. 会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に開かれた活動をする。
- 活動基調 3. 既存のコミュニティ・福祉組織活動から取り残された問題や新しく発生した問題を大切に、常に市民生活に密着した活動をする。

結成以来、「調査研究活動」、「地域総合型公開学習活動」、「見える化・わかる化活動」と大きく分けて3つの柱立てにより展開している。

とりわけ、「調査研究活動」の取り組みは、地域の現状や課題を知らずして、問題解決・改善に向けた、真の地域活動はあり得ないことを基盤に、これまで地域の福祉課題をテーマに、結成以来3年間、下記の内容で取り組んだ。

➤ 1年目(2019年度)

活動テーマ【港地域の“ご近所”を切り拓く 集まる居場所で地域ぐるみのささえあいを検証する】

約5,400世帯をもって構成されている「港地域づくり推進会」(港第14・23自治会)管内において、今日まで、地域や個々の人々のつながりの中で、気兼ねなく集まり、会話を交わし、ふれあい交流し、普段の拠り所としている「居場所的機能」を持つ55の既存の各種団体・グループを把握し、「集める居場所から集まる居場所」を課題提起した。

➤ 2年目(2020年度)

活動テーマ【港地域のご近所を切り拓くパート2ー協働による地域課題解決を探る】

1年目に取りまとめた調査結果をもとに、さらに把握に努めるとともに、管内関係団体や住民に機会があるごとに情報を提供し、改めてこうした既存の団体グループの様々な取り組みを地域住民が共有し、積極的に地域参加する機会を呼掛け、「ご近所福祉 その意識と実態調査」に取り組み、地域で顔の見える“近助”の関係づくりができる「協働による地域づくり」を働きかけた。

➤ 3年目(2021年度)

活動テーマ【港地域をつなぐ・ささえあう“ご近所福祉”を創る】

本会は2019年度に結成して2年間、地域の福祉課題をテーマに、大人社会を対象に調査研究活動に取り組んできた。2020年度に取り組んだ「ご近所福祉 その意識と実態調査」から、地域住民相互のつながりやささえあいが弱くなり、地域コミュニティへの関わりについて、その意識と実態が希薄化の傾向にあることが浮き彫りになった。

こうした地域環境で生活している、次世代を担う子どもたちの「思いやりの心」が、確実に管内地域に醸成されているか、加えて、厳しいコロナ禍の続く今日にあって、子どもたちの福祉に対する意識と実態の現状はどうかを問い質すこととした。身近な生活圏域において、地域の大人社会と向き合う子どもたちを対象にご近所や同居する高齢者(認知症高齢者含)、障がい児者等への思いやり等について、「基本属性」、「生活状況(子ども自身)」、「家庭・家族のこと」、「地域社会・地域活動のこと」、「体験事例」、「地域への期待」の各項目の意識と実態を把握し、子どもたちを取り巻く地域環境の課題を改善・解決し「共生社会」をめざした、地域社会(大人社会)に提言することを目的に取り組んだ。

この調査に取り組むにあたり、管内自治会・町内会をはじめ、民生委員児童委員協議会、管内2つの小学校、子ども会関係者の全面的な支援をいただき成果を上げた。

➤ 4年目(2022年度)

活動テーマ【港地域をつなぐ・ささえあう“ご近所福祉”を創る】

長引く厳しいコロナ禍で、尊い地域コミュニティは、さらに希薄化の傾向が伺われ、「共助」、

「自助」がますます退行傾向にある。こうした社会環境の中で暮らす、高齢者の現状を把握するとともに、コロナ明けに地域（ご近所）のささえあいの仕組みづくりに期待することは何か問い質し、これから、地域社会が果たす課題をまとめ、広く管内の住民に提言することとした。

「地域を知る」ことから本会の活動は始まり、「地域の課題」を把握し、浮き彫りにした「地域課題」を地域社会への問題提起をする中で、「地域ぐるみの居場所の検証」から「ご近所福祉の検証」そして「子どもを取り巻く地域環境の検証」と取り組み、今年度は「高齢者から地域づくりを検証」とつなぐこととした。

2. 会員自ら高齢者に向き合う調査から、「共生社会」を学ぶ

この4年間の活動として取り組んできた「調査活動」は、これまで、関係団体等に委ねることが多くあったが、今回の調査では、315枚の回収のうち、117枚（37%）を会員の努力により回収をすることが出来た。

さらには、高齢者と向き合う中で、日頃、地域を語り合うことが少ない高齢者から、このたびの調査を通じて、高齢者自身がこれまでの生活を振り返りながら、これからの地域社会への期待を込めた思いを直接聴くことが出来、さらには、本会の定例会議をはじめ、調査研究部会における議論を深めることが出来た。

高齢者からは、このたびの調査結果を広く地域社会に問題提起する発信への期待が多く寄せられた。

日頃から、「市民性と専門性の融合」を提唱している本会としては、市民の立場の活動であるが、「理論と実践の融合」も含めた意義ある調査研究活動となった。

3. 「協働」による地域づくりへの問題提起

これまでの3年間の活動から、常の強調してきたことは、「地縁組織」だけで、果たして「地域づくり」は出来るかを問いつづけてきた。地域が課題としている領域は幅が広い。

一般的に取り上げられている「地縁団体」（お互い様：自治会・町内会組織）の機能では、

(1) 問題解決機能…生活改善など、地域の問題解決に関する活動

交通安全、防犯、非行防止、青少年育成、防火・防災、消費者問題、資源回収、福祉

(2) 生活充実機能…地域の人々との交流と親睦の促進に関する活動

祭礼、盆踊り（納涼祭）、体育大会（運動会）、文化祭

(3) 環境・施設維持機能…地域の環境と施設の維持管理に関する活動

環境美化、清掃・衛生、集会所等の施設整備

以上の3つの機能が主にあげられているが、そのほかに「広報活動機能」、「行政・企業・関係団体連絡調整機能」、「統合的・調整機能」等も重要な機能として存在する。

こうした機能の中で、「福祉視点」で、多様化した福祉ニーズが浮上している今日、「地域組織化」の機能がここに来て、弱体化の傾向が伺える。啓発啓蒙中心のイベント化では、真の問題解決には至らない。改めて、「地域のニーズ」を「見える化」し、「地縁団体完結」の問題解決の限界から、管内にある、さまざまな「志縁組織」との「協働」の仕組みが必要と感じる。

このたびの「調査研究活動」は、決して本会だけで、取り組んでも意味がないと認識し、調査実施の過程において、「さわやかクラブ」「地区民生委員児童委員協議会」にも積極的に協力を呼び掛けた結果、調査の意義を理解していただき、一定の成果を得ることが出来た。

「地縁組織」には、その都度、呼びかけとともに、「協働」の意義を強調してきた。

調査結果を更に、共有していき、今回の調査テーマ「ホッとする安心した地域づくり」に向けた取り組みを努力していきたい。

4. 「共生社会」をキーワードに「参加する福祉」を探る

このたびの「調査研究事業」は、公益財団法人さわやか福祉財団の「地域助け合い基金助成事

業」の決定による「地域共生社会をめざす仕組み検証事業」を具体化したことから実現できた

事業の目的は「今日、地域コミュニティへの参画の希薄化とともに、家族機能やご近所のささえあい、制度や施策等公助ありきの意図的支援が当たり前のような社会環境になりつつある。加えて、長引く、厳しいコロナ禍下、ますます、地域コミュニティのつながりがなくなり、ご近所のささえあいの希薄さが浮き彫りになっている。こうした制約された社会環境の中で、生活している高齢者自身の現状や、地域社会の共助の実情を検証し、コロナ明けの地域社会をどのように望んでいるかを管内生活者の立場から把握し、高齢者の社会的孤立を防ぐとともに、高齢者等の積極的な地域参加を促し、これからの望ましい地域環境づくりを問い、地域ぐるみの支え合いにより、世代を超えた地域共生社会づくりの在り方を検証する。」とした。

そして、下記の6つの事業に取り組むことが出来た。

- (1) 「ホッとする、安心した地域づくりその意識と実態調査」と「調査報告書」の作成
- (2) 「地域共生社会・調査研究部会」の設置（10回開催）
- (3) 「協働団体との意見交換会」の開催 地域の団体等との連携
- (4) 「公開型研修会～地域共生社会を語る～」(調査報告会)の開催
- (5) 「ご近所福祉を創る集い」の開催
- (6) 「ホッとする、安心した地域づくり」に向けた広報啓発

5. 「地域を見える化」し、地域の課題を市民が共有する問題提起

時期が来ると、恒例の取り組みとして、行政や関係諸団体サイドで、無作為抽出で市民対象に各種調査が実施され、その結果が公表される。これらをもとに、活躍されている同じような専門家が、各地で分析を踏まえて、これからの市政や地域推進計画策定等が市民に示される。こうした調査結果を踏まえて、これまで諸計画が継続的に策定されても、地域で日々生活している住民にとっては、何か「絵に描いた○○」ともいえるようにも感じる。果たして、市民主体の地域づくりとは何かを、本会の活動を通して常に考えさせられる一面がある。本会が、これまで4年間取り組んできた調査の意義をここで改めて振り返ることが求められている。

本会の活動目標と活動基調から、市民が常に、自分の地域について関心を持ち、少しでも地域づくりに関わることが出来る働きかけに努めてきたかである。

「地域を見える化」する日常的努力はなかなか難しい中で、せめて「志縁組織」の本会が、何らかの形で、毎年度、住民サイドに向けた調査結果を「見える化」し、常に住民相互に課題を「共有」しあい、「共助」による地域ぐるみの活動への参加を促すことを、今後も地道に継続していくことが必要と実感する。

6. 高齢者の生活状況の考察からの提言

- (1) 長引く厳しいコロナ禍下における、高齢者の暮らし向き（ゆとり）は、経済的側面と精神的側面を踏まえた内容であるが、約6割は「ゆとりがある」と回答しているが、「ゆとりがない」回答は約4割を占めている。
- (2) 高齢者の主な不安要素をあげると、「自分や家族の健康」や「災害時の対応」「自分や家族の介護」、長引く厳しいコロナ禍下、「コロナの緊急対応」が浮き彫りになっている。自助努力とともに、コミュニティ組織における、課題解決に向けた仕組みづくりが課題である。
- (3) 今日では、複雑多様化した地域社会における公的支援体制は確立しているため、段階的には、公的機関の利用に移行していくが、まずは、高齢者自身が、身近な生活圏域で、自ら問題解決できる語れる地域環境を地域社会で構築していくことが望まれる。具体的には、「家族・家庭機能を維持すること」、「日常的に信頼関係を維持できる人間関係の確保」等である。こうした領域でも、男性の孤立傾向を防ぎ、地域参加できる地域環境を確保する課題がある。
- (4) 孤立を防ぎ、安心した生活を維持していくための身近な地域社会とつながる高齢者への日常生活の福祉情報の発信は、主には、各マスコミからのルートが挙げられているが、「家庭・家族機能」を基にしたルートは維持したい。身近な地域の信頼関係の確立とともに、人間関係を維持した友人による情報源も大きなルートである。新たに、高齢者に向けて、浮かびあ

がってきたのは、「スマホ・パソコン」による情報入手である。女性より男性の方が、活用度は高い。古くから、今日まで、依然とし「閲覧板」による情報源を活用しているが、確実にその役割を果たせるようにしていく課題は大きい。

- (5) 高齢者を取り巻く生活の安定（孤立防止）を図るには、「家族・家庭機能の確立」とともに、身近な地域社会における、信頼できる人間関係（友人）を維持する友人・仲間の確保の努力である。男性の広域的つながりを考えていく中で、身近なご近所からの孤立を防ぐためには、日頃から、身近な地域への参加の努力が求められる。

7. 高齢者の家庭・家族の考察からの提言

- (1) 高齢者からは、情緒安定・生活の場（環境）としての「休憩安らぎの場」「家族の団らんの場」、人をつなぐ「家族の絆を強める場」研鑽する「家族が共に成長する場」、包み込む「夫婦の愛情を育む場」と家族を大切にしている回答がほとんどである。生み育てる場「子どもを産み育てる場」、教育的「子どもをしつける場」、尽くす場「親の世話をする場」としての「家庭・家族機能」の重要性も明らかである。回答傾向からは「情緒安定的機能」が強く感じられる。
- (2) 「家族と食事をとる」回答が約8割強あり、家族との食事のとり方を通じて、高齢者を家族・家庭から孤立させない環境が読み取れた。単身世帯を含めて、地域社会全体で支え合う場づくりの課題がある。
- (3) 「家庭・家族の機能」や「親と子どもそれぞれの自立」、「親子関係」等、多面的に考察する意味から「子どもとの同居」を問い質したところ、約5割は「同居を望む」、約3割「同居を望まない」であった。女性より、男性の方が同居したい意向が強いことが伺えた。核家族化が進む今日において、改めて、「家族・家庭の機能」を再構築する課題の一つである。
- (4) 高齢者の立場から、家族を一番必要と感じる時は、「健康に不安を感じたとき」、「身近なことで相談をしたいとき」、「生活に不安を感じたとき」、「今、報告をしたいことが生じたとき」、「経済的な問題が生じたとき」などが浮き彫りになった。特に、「健康に不安を感じたとき」の意見が多いことは、日常的に、「健康重視」の社会の仕組みを含めて、家庭・家族のつながりから、ご近所、そして地域社会全体へのつながりのプロセス重視をもとに、発展的な問題解決へとつなげていきたい。

8. 高齢者の地域との関わり（意識）の考察からの提言

- (1) 約7割は「一人でも安心して暮らせる地域」と回答しているが、「一人でも安心して暮らせる地域ではない」回答が約3割ある。居住年数が短い層では、地域へのなじみのなさから安心ではない意識が伺えるが、長い居住年数だと、現状を踏まえたうえで、安心ではない状況の一面が伺える。
- (2) 地域の人との交流については、「地域の人々との交流は大切である」と総体的意識が伺える。特に、単身世帯では、強く感じている回答である。
- (3) 「“超高齢社会”の今の生活の支え」は、「家族の支え」が半数を占めている。ここでは、女性よりも、男性の方が、「家族の支え」の回答が多い。「自分自身での支え」は、単身世帯、女性の方が多く回答から、女性の自立心の高いことが伺える。
- (4) 「地域のコミュニティの考え方」について、本会のこれまでの調査結果（20歳以上対象の調査）からは、年々、希薄化の傾向が伺えるとしてきた。今回の高齢者からの回答では、「潤いのある生活を営む上で非常に重要な役割を持つ」が約5割と高い回答であった。高齢者層が、これからの地域コミュニティに期待する回答結果と伺えた。今後は、高齢者の積極的な地域参加、地域づくりに関わる働きかけを呼び掛けたい。
- (5) これから、参加してみたい地域活動は、生きがいを感じる「趣味や特技を生かせる活動」、健康維持のための「高齢者を対象にした健康交流の活動」が主にあげられているが、「特にない」の回答が15%ある。女性は男性よりも、また加齢とともに、積極的に「健康交流」をあげている。この結果をもとに、だれもが、地域参加できる環境整備を働きかけたい。

9. 高齢者の地域との関わり（実態）の考察からの提言

- (1) 高齢者の社会的環境の検証を、「時代性」、「地域性」、「文化性」、「個別性」から考察することができる。このたびの調査実施に当たり、「地域共生社会調査研究部会」において「調査票の組み立て」を協議した際に、こうした厳しい地域環境の今、高齢者のこれまでの生活を振り返りながら、その時代の良さをこれからの地域づくりにどのように活かせるかを取り上げることとした。回答結果から、まず、「家族」（家族との和やかなひと時・子どもたちの元気な姿）が一番多い回答状況であった。つぎに、「仲間」（健康・スポーツ・レクリエーション活動・趣味仲間との活動）、そして、ご近所（近所同士の交流）、コミュニティ活動（町内会活動・地域のお祭り・自治会活動（行事）・高齢者との交流（居場所）・サロン・メディア・イベント等）が描かれている。加齢とともに、回答結果では、「家族」から「仲間」へと広がっていることが伺える。
- (2) ご近所の人とのつきあいは、ここでも、男性のご近所との関係は、女性よりも消極的であること伺えた。加齢とともに、居住年数が長いほどご近所との付き合いは良い回答であった。世帯別では、単身世帯は、個人的つながりの自助努力が伺える。全体的には、「外で立ち話をする程度」「会えば挨拶する程度」が多い。「おすそ分け」、「相談に応じる関係を持つ」の回答も寄せられ、近所関係を維持していくうえで、「ご近所のしきたりに従う」意見もあった。「おすそわけする関係」「相談に応じる」と、ご近所同士のつながりを感じる意見も伺えた。長引くコロナ禍下、さらに「ご近所との関係」が希薄化している今日にあって、本会が、今日、「福祉文化の視点」で「ご近所福祉」の意義を強調している中で、今回の調査から、改めて、日頃の地域環境の中で、ご近所同士のコミュニケーション（挨拶・声掛け）を心掛け、共助の地域づくりに向けた、「ご近所福祉の再構築」の課題が伺える。

10. 高齢者の地域参加の考察からの提言

- (1) 高齢者の日頃の地域参加の状況は、約9割は前向きな回答結果である。就労状況にある高齢者層は、就労そのものが地域参加の回答と受けとめることが出来る。世帯状況から、「単身世帯」の地域参加の傾向は、「夫婦のみ」「複世代との同居世帯」よりも多いことが伺われた。
- (2) 高齢者の地域の行事や活動に参加している主な内容は、地縁組織で日頃から参加を呼び掛けている「清掃活動」「防災訓練」「自治会・町内会活動」や、「地域の祭り」「奉仕活動」が主に多く回答され、回答は少ないが、生きがいとしての「健康・スポーツ関連行事」「趣味活動」も挙げられた。
- (3) 「地域づくりへの参加の呼びかけについては、「積極的な参加」は少ないが、受動的に「前向きに参加する」意向の回答が約7割と多い。厳しい地域環境の中で高齢者層は、具体的な活動内容を理解したうえで積極的な参加が期待される。主な参加領域として、生きがいにつながる「健康づくりや生きがいづくり」をはじめ、「高齢者や障がい者への支援（買い物・家事・移送等）」「スポーツ・文化・レクリエーション等の活動」「子育てや子どもの見守り」等身近な福祉活動への関わり「自治会・町内会運営の参画」も活動範囲にあげている。今後における地域活動は、高齢者を排他的にすることなく、社会参加できる地域環境を整えたうえで、高齢者への積極的な働きかけが必要である。
- (4) 「参加したくない」約2割の回答は、「健康でない」現状を訴えている高齢者が約2割。「参加したいとは思わない」、「興味がわからない」、「参加のきっかけがない」、「一緒に参加する人がいない」、「情報が入らない」、「近くに活動がない」等の回答については、高齢者の社会参加の意義を日頃から働きかけていく地域環境整備（仕組み）を課題としたい。そして、いかにして、住み慣れた身近な地域において、高齢者の地域における役割を明確にし、地域参加を積極的に呼びかけ、つなぐ・つながる地域づくりを心掛けたい。

11. 高齢者の地域環境に関する考察からの提言

- (1) 高齢者が、安心（ホッと）できる場所（環境）として挙げたのは、「家庭・家族」である。次に「友人との付き合い」「趣味仲間」「ご近所」である。加齢とともに「家族・家庭」から「地域の居場所・サロン」や「趣味の仲間」「利用している福祉施設」と変化している。単身世帯では、生活の安定

- の維持のために「友人との付き合い」「趣味仲間」へと自助努力により、広がりを見せている。いかにして「家族・家庭機能」を維持することができるか、身近な地域社会の課題としたい。
- (2) 地域において、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスは、日頃から、家庭・家族を基盤として、さらには、身近な生活圏域で、見守り・声掛け（安否確認）、移動支援・同行（買い物・通院等）、話し相手、ゴミ出し、定期的なふれあいサロン（居場所）等、高齢者を取り巻く生活課題について、公助依存に終始することなく、日頃から、身近な地域で課題解決策を協議する環境整備が求められる。
 - (3) 高齢者の自立を基に、地域ぐるみのささえあいの環境を維持していくためには、身近なご近所同士で「一緒に活動する人（仲間）がいること」、「一人ひとりが気軽に参加できる活動の機会があること」の回答がもっとも多い。これは、男性より女性の方が積極的な意向を示している。「地域が抱えている課題の情報が提供されていること」の回答は、「地域課題の見える化・わかる化」を問いかけている。
 - (4) 地域ぐるみで見守り活動の支援体制の認識は、「支援体制の存在」認めている反面、「わからない」回答が4割あることから、ごく一部の関係者の範囲内での活動にとどまっている傾向が伺える。世代を超えて、地域全体への広がりに向けた働きかけが求められる。
 - (5) 高齢者が、住み慣れた身近な生活圏域の「ご近所」で必要と思われることは「ご近所のささえあい」「身近な人の見守りと助言体制」「コミュニティ組織体制の確立」「身近なところでの居場所の開設」と、「ご近所福祉」そのものの回答結果である。生活圏域で日頃から支え合う地域環境を生み出したい。そして、「専門性と市民性の融合」の視点で「相談体制や情報提供の充実」が挙げられている。「行政と住民との協働」の視点では、「地縁団体（自治会・町内会）の積極的な福祉活動の取り組み」「市町行政の地域への積極的な歩み寄り」が浮かび上がってくる。高齢者の加齢とともに、居住年数が長いほど、身近な環境で「つながる関係」を強く求めている。取り巻く環境から考察できることは、「単身世帯」においては、「コミュニティ組織体制の確立」という、広範囲な取り組みよりも、より身近な生活圏域でのホッとできる安心できる、具体的な「居場所」の開設を強く望んでいる。
 - (6) 今回の新たな調査設問として「無償性と有償性」について問いかけた。これまで、ボランティア活動は、「自発性」「無償性」「連帯性」を定義として、地域活動に取り組んできた。福祉を取り巻く状況が大きく変化し、介護保険制度の導入等により、「ボランティアの有償化」等が浮き彫りになっている。「生活上困ったときの“有償サービス”支援の利用」についての回答結果は、「説明を聞いた上で前向きに考えたい」と約6割の回答があった。今後さらに、福祉活動の「有償化」は、これからの福祉のあり方を大きく変える課題と考えられる。関係機関・団体のさらなる住民への歩み寄る説明が求められる。
 - (7) 核家族化の時代を迎えて、家庭・家族機能（生み育てる・保護的・福祉的・教育的・情緒安定的・経済的）は、大きく変化をしている。県内各地において、高齢者等の孤立防止、身近な生活圏域における生活圏域の拠点づくりとして、積極的に取り組まれている「居場所」について、今回の調査項目を、あえて取り上げることにした。「これまでの“居場所”から、これからの“居場所”のあり方」を問い質すことを狙いに「地区住民同士がひと時を過ごす“居場所”はどのような運営（環境）であればよいか」を設問とした。
 - (8) 高齢者が望む、地域の居場所の運営（環境）の全体的な回答から考察できることは、「語れる、対等で自由な環境が保障されていること」「参加者が主体であり、上下の関係がなく対等な関係が維持されていること」「居場所が住民をつなぎ、共助関係を維持できる」「地縁団体組織で継続的な運営基盤が保障されていること」で、「ボランティア主体、福祉施設等の依存」の回答は低い。「居場所」の課題として大きく取り上げられるのは、男性が居場所に来ない、と話題になる。今回の回答でも、女性の方が男性より柔軟で自由な環境を求めている傾向が伺えた。本来、居場所は「家庭・家族」が原点であるとも言われている。今回の調査課題では、「家庭・家族」から、地域を組織化し「地域を家庭化する機能」により、いかにして生活圏域における福祉課題に向け、住民それぞれの立場で課題を解決することができるかを考えなければならないことを提起したい。いずれにせよ「居場所とは」「今なぜ、居場所か」を正したい。

【焼津福祉文化共創研究会】 2022 年度事業経過報告

(協働団体：静岡福祉文化を考える会関連活動を含む)

月/日	経過記録
03/26	➤ 「3月(第36回)定例研究会」開催(2021年度総括, 2022年度活動計画協議)
03/28	➤ 「焼津福祉文化共創研究会通信 No.31」発行, 関係方面に送信
04/16	➤ 「令和4年度焼津市V連総会」及び「代表者会議」出席
04/19	➤ 「焼津福祉文化共創研究会通信 No.32」発行, 関係方面に送信
04/20	➤ 「4月港地区民生委員児童委員協議会定例会議」で「通信」配布
04/23	➤ 「静岡福祉文化を考える会第200回委員会」開催(@静岡市清水区追分寄って亭)
04/30	➤ 「4月(第37回)定例研究会」開催
05/03	➤ 「さわやか福祉財団助成事業要項」取り寄せと書式データ加工(Word文書)依頼
05/04	➤ 「さわやか福祉財団助成事業」申請申し込み書作成作業(~5/9)
05/08	➤ 「研究会通信 No.33」編集・発行
05/14	➤ 「5月(第38回)定例研究会」開催
05/16	➤ 「研究会通信 No.33」各団体等へ配布及びメール送信作業 ➤ 本日より, 「公益財団法人さわやか福祉財団助成事業申込書」及び「焼津市赤い羽根みんなのしあわせ助成事業助成申請書」作成作業開始
05/21	➤ 静岡福祉文化を考える会主催「第1回公開型研修会」及び「第201回委員会」において, 本会との「協働」について説明 ➤ 「焼津市V連絡協議会代表者会議」出席
05/25	➤ セイコー社(印刷業者)に, 助成事業申請にあたり「調査報告書見積書」作成依頼
05/27	➤ 焼津市関連団体等に「調査報告研修会」を8月中旬開催で検討したい旨を連絡
05/28	➤ 地区民協会長に, 今年度の調査研究事業への協力打診
05/29	➤ 「(公財)さわやか福祉財団助成事業申込書」及び「焼津市赤い羽根みんなのしあわせ助成事業助成申請書」作業実施 ➤ 「研究会要覧」(初版)内容修正の必要性あり, 修正組み替え作業依頼
05/31	➤ 焼津市社協へ「焼津市赤い羽根みんなのしあわせ助成事業助成申請書」提出(本日最終締切日)
06/01	➤ (公財)さわやか福祉財団へPDF化して助成事業申込書を送信作業実施 →財団より申し込みのデータ受信した旨の回答あり(後日, 審査会結果を連絡)
06/02	➤ 「公益財団法人さわやか福祉財団」へ, レターパックにて「補足資料」を発送
06/07	➤ 焼津市社協より, 「焼津市赤い羽根みんなのしあわせ助成事業」に関する「審査会」を開催の通知あり(6月17日15:00~@焼津市総合福祉会館3F多目的ホール)
06/10	➤ 「研究会通信 No.34」, 「6月定例研究会レジュメ」仕上げ, 配布作業
06/11	➤ 「6月(第39回)定例研究会」開催
06/12	➤ 6/17 焼津市社協・助成事業審査会プレセッションに向けた連絡調整作業(市社協)
06/15	➤ (公財)さわやか福祉財団より, 助成決定(¥15万)の連絡有, 会員及び関係方面に連絡済 ➤ (公財)さわやか福祉財団事務局へ, 助成決定のご配慮のお礼連絡済 ➤ 静岡県内「さわやか静岡関係者」に, 財団助成決定報告及び今後の支援依頼 ➤ (株)セイコー社に, (公財)さわやか福祉財団助成決定の報告及び, 見積書に基づく発注を時期が来ればお願いする旨手紙で連絡
06/16	➤ 港地区民協会長大石様に, ①8/20公開型研修会開催への協力, ②今年度の「調査研究事業」への協力を依頼 ➤ 焼津市赤い羽根みんなのしあわせ助成事業審査会スライド完成, データを焼津市社協に送信済
06/17	➤ 焼津市赤い羽根みんなのしあわせ助成事業審査会出席(原崎洋一氏), 終了後会員に報告 ➤ 港地域づくり推進会事務局, 港第14自治会長へ, 8月20日調査報告研修会, 調査研究事業の協力を依頼
06/20	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座“ご近所のささえあい”を誰が担うか?」報告書作成企画
06/21	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座“ご近所のささえあい”を誰が担うか?」当日の展開表検討

月/日	経過記録
06/22	➤ (公財) さわやか福祉財団助成事業助成金振込有, 「調査実施」の細部検討作業実施
06/23	➤ (公財) さわやか福祉財団助成事業「調査実施」の「調査部会」設置具体化
06/24	➤ 「2022年度静岡県社会教育委員全体研修会」(静岡市・あざれあ)において, 「子ども対象調査結果」を紹介, 大人社会の子どもへの向き合い方を「福祉と教育の融合」を視点を説明
06/25	➤ 港第14自治会町内会長会議において「報告研修会」及び「調査実施」について, 協力要請
06/26	➤ 「調査票」の組み立てについて検討, 管内福祉施設連絡会に事業協力呼び掛け]
07/01	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座“ご近所のささえあい”を誰が担うか?」看板・表示修正
07/02	➤ 焼津市社会福祉協議会より「焼津市赤い羽根みんなのしあわせ助成事業」採用通知あり
	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座“ご近所のささえあい”を誰が担うか?」ポスター&チラシ編集
07/03	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座“ご近所のささえあい”を誰が担うか?」当日レジュメ修正
07/04	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座“ご近所のささえあい”を誰が担うか?」サイト修正
07/05	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座“ご近所のささえあい”を誰が担うか?」具体的展開表検討
07/06	➤ 「研究会通信 No.35」発行, 関係方面へ配布・送信
	➤ 焼津市社協との連絡調整(助成決定お礼と事業開始の報告)
07/07	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座“ご近所のささえあい”を誰が担うか?」ポスター&チラシをもとに, 参加呼び掛け作業開始(学校, 子供会, 町内会等)
	➤ さわやかクラブ会長へ講座案内と調査協力要請
07/08	➤ 講座講師依頼事前了解と正式文書(藤下氏・石津氏), 近隣地域関係者へ講座案内文書送付
07/09	➤ 「7月(第40回)定例研究会」開催
	➤ 「赤い羽根みんなのしあわせ助成事業」助成金請求書送付
07/10	➤ 港第14自治会第12町内会組長会議にて「講座」及び「調査」について説明し, 協力を依頼
07/20	➤ さわやかクラブやいづ連合会会長より, 講座参加の連絡あり
	➤ 「7月定例港地区民生委員児童委員協議会会議」に出向き, 本会の活動の報告, 赤い羽根共同募金協力のお礼等をし, 今後の「講座」及び「調査」への協力を依頼
07/21	➤ 公益財団法人さわやか福祉財団へ, 助成事業の経過報告とともに, 「地域ニアが子どもたちと共に遊ぶ どう遊ぶQ&A」冊子50冊, 「ともあそびへのおさそい」冊子50冊申込
07/23	➤ 協働団体「静岡福祉文化を考える会役員会」にて, 本会の活動状況を報告(協働団体との意見交換2回目)
	➤ 協働団体「静岡福祉文化を考える会・公開型研修会」において「ご近所福祉を創る集い」展開
07/25	➤ 港第14自治会町内会長会議において, 本会の活動への支援(赤い羽根共同募金助成)のお礼・報告, 「講座」及び「調査」の協力とともに「調査研究部会」への参加を呼掛け
07/26	➤ さわやかクラブやいづ連合会会長と意見交換, 「調査」の協力を了解していただく
07/30	➤ 「第1回地域共生社会調査研究部会」開催
07/31	➤ (公財) さわやか福祉財団へ助成決定後の事業の動きを報告
08/01	➤ 管内福祉施設連絡会へ, 本会事業の協力名義確認
08/06	➤ 「第2回地域共生社会調査研究部会」開催, 「研究会通信 No.36」発行, 配布・送信
08/15	➤ 「みんなで創る福祉講座」外部講師との連絡調整
08/20	➤ 「8月(第41回)定例研究会」, 「みんなで創る福祉講座」開催
08/21	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座」外部講師及び協力呼びかけ団体等への礼状送付
	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座報告書」執筆・編集作業(～9/15)
08/22	➤ 焼津市社会福祉協議会へ「講座」開催報告とお礼の電話
	➤ 「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」調査票最終校正・仕上げ・印刷
08/23	➤ 「みんなで創る福祉を学ぶ講座参加者アンケート」集計
08/24	➤ 学校・関係団体等へ「みんなで創る福祉を学ぶ講座」開催報告(関連資料添付)
08/25	➤ 「焼津福祉文化共創研究会通信 No.37」発行(関係方面へメール送信)
	➤ 港第14自治会町内会長会議において, 講座報告・御礼及び「調査事業」協力依頼
08/26	➤ 「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」調査票発送準備(依頼文書作成)
08/28	➤ 「さわやかクラブ連合会やいづ」滝澤会長に講座協力お礼と調査協力依頼

月/日	経 過 記 録
09/03	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「講座報告書」作成に関する協議（シブヤ工芸社） ➤ 「第3回地域共生社会調査研究部会」開催，調査配布状況とデータ入力作業確認
09/07	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「さわやかクラブ 連合会やいづ」滝澤会長と協議
09/08	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 調査票回収開始により，本日より「データ入力」作業開始
09/17	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 本日現在調査票回収 102 枚（目標: 200 枚），データ入力作業開始（36 枚済） ➤ 「9 月（第 42 回）定例研究会」開催
09/20	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「講座報告書」仕上がり
09/21	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 9 月港地区民生委員児童委員協議会定例会にて，講座報告・御礼及び調査事業協力呼びかけ
09/25	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 関係方面に「講座報告書」配布作業（送付文書）
09/30	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 焼津市社会福祉協議会へ「赤い羽根みんなのしあわせ助成事業実施報告書」提出 ➤ 「焼津福祉文化共創研究会通信 No.38」発行・配布・送信 ➤ 菊川市協議会会議にて，本会の取組状況（「講座」「調査」）について，「共助」をテーマに説明
10/01	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「第4回地域共生社会調査研究部会」開催
10/05	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 関係方面へ，本会活動状況報告
10/08	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「10 月（第 43 回）定例研究会」開催
10/10	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 港第 14 自治会第 12 町内会組長会議で，調査協力のお礼と経過報告（調査票回収 171 枚）
10/11	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 焼津市社会福祉協議会に「自治会単位の基礎データ」資料提供依頼（来年度の取り組み関連）
10/14	<ul style="list-style-type: none"> ➤ さわやかクラブ 滝澤会長との連絡調整
10/15	<ul style="list-style-type: none"> ➤ コミュニカレッジにおいて，本会の活動を説明，「若者発ご近所福祉かるた」及び調査活動を紹介
10/19	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 10 月港地区民生委員児童委員協議会定例会にて，改めて講座報告・御礼及び調査協力依頼
11/02	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 調査票回収: 315 枚，調査協力団体にここまでの調査研究活動の経過報告
11/03	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 本日までの調査集計及びクロス集計表を作成
11/05	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「第5回地域共生社会調査研究部会」開催
11/17	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「11 月（第 44 回）定例研究会」開催，「焼津福祉文化共創研究会通信 No.39」発行
11/26	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 第 214 回静岡福祉文化を考える会委員会開催，第 21 回静岡県福祉文化研究セミナー開催
12/03	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「第6回地域共生社会調査研究部会」開催
12/17	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「第7回地域共生社会調査研究部会」開催
12/24	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「12 月（第 45 回）定例研究会」開催，「焼津福祉文化共創研究会通信 No.40」発行 ➤ 「Our Life No.143」（静岡福祉文化を考える会）発行 ➤ 「焼津福祉文化共創研究会調査報告書」印刷業者に入稿
01/07	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「第8回地域共生社会調査研究部会」開催，静岡県域版調査報告書印刷業者入稿
01/14	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「1 月（第 46 回）定例研究会」開催，1 月焼津市 V 連代表者会開催 ➤ 「焼津福祉文化共創研究会通信 No.41」発行，「焼津福祉文化共創研究会調査報告書」納品
01/28	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「静岡福祉文化を考える会調査報告書」納品・配布
02/04	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「第9回地域共生社会調査研究部会」開催
02/15	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査報告書」（焼津福祉文化共創研究会）発行・配布
02/18	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「2 月（第 47 回）定例研究会」開催，「地域共生社会を語る」研修会開催
02/22	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査報告書」（静岡福祉文化を考える会）発行
02/25	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「第3回静岡福祉文化を考える会・公開型調査報告研修会」開催 ➤ 第 215 回静岡福祉文化を考える会委員会開催 ➤ 「焼津福祉文化共創研究会通信 No.42」発行 ➤ 港地域づくり推進会関連会議において，焼津福祉文化共創研究会事業報告とお礼
03/04	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「第10回地域共生社会調査研究部会」開催
03/15	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 港地区民生委員児童委員協議会会議で，焼津福祉文化共創研究会事業報告とお礼
03/18	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「3 月（第 48 回）定例研究会」開催，「焼津福祉文化共創研究会通信 No.43」発行
03/25	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「静岡福祉文化を考える会第 216 回委員会」開催
03/28	<ul style="list-style-type: none"> ➤ （公財）さわやか福祉財団へ助成事業「実施報告書」提出，関係機関・団体へ事業報告

【焼津福祉文化共創研究会】2019年度事業報告(活動1年目)

活動テーマ:港地域のご近所を切り拓く「集まる居場所」で地域ぐるみのささえあいの検証

1. **事業実施期間** 2019年4月1日～2020年3月31日
2. **活動範囲** 焼津市港地域づくり推進会管内(港第14・23自治会,約5,000世帯の中学校区)
3. **会議等**
 - 関係団体との打ち合わせ会(活動の円滑化)
 - 会員による定例研究会(原則毎月第2土曜日)
 - 本会今年度事業展開のため適宜「調査部会」開催
 - ◆ 会議等は、港第14自治会内デイサービス百の木石津内研究会事務局内で開催
4. **関係者研修会の開催**

2019年10月28日、港第14自治会第12町内会「北川原公会堂」において、静岡県コミュニティづくり推進協議会専門委員及び事務局を迎えて、本会の事業の取り組みを説明するとともに、これからの福祉コミュニティの構築について、自治会・町内関係者、民生委員、市社協、会員16名が出席して意見交換を行った。
5. **冊子「港地域の“ご近所”を切り拓く ホットする、つながる・ささえあう“あつまる居場所”をめざして—港地域の団体・グループ紹介集—」の作成**

「港地域づくり推進会」(港中学校区:第14・23自治会・約5,000世帯)管内における、今日まで意図的に組織化され、取り組まれている「居場所的機能」をはじめ、既存の活動団体・グループ、サークル活動により、地域住民同士がふれあい交流し、「地域の拠り所」の機能を有している現状を、本会会員が2019年8月1日～2019年12月28日の約5カ月間において調査し、地域住民に、「真の居場所」を問題提起し、これからの地域づくりに活かすための情報提供をした(A4版,56ページ,200部作製)。
6. **「検証報告書」の作成**

「港地域の団体・グループ紹介集」で把握した「シート」をもとに、さらに参加状況地域住民世代別、領域別、社会参加状況等を分析・考察し、その結果を明らかにし、管内のそれぞれの地域で取り組まれている多種多様な居場所を「港地域ぐるみの居場所」としてさらに「見える化」する作業に発展させて、これからの地域づくりについて提言し、継続的な活動につなげる目的で作成した(A4版,84ページ,200部作製)
7. **焼津福祉文化共創研究会通信発行**

広く、本事業に関係機関・団体及び地域住民に広報啓発するため、「焼津福祉文化共創研究会通信」を計画的に発行し配布。
今年度は、9月創刊号から、原則月1回発行(100部)で第6号まで発行した。
特に、「協働」を掲げる本会では、メール配信で、関係機関団体に送信した。
8. **今年度の事業に関わった関係人員**

延べ、260名。

内訳:	(1) 研究会会員	14名×8回	112名
	(2) 団体・グループ協力者	2名×55団体	110名
	(3) 調査に関する検討会	2名×5回+10名	20名
	(4) 関係者研修会		18名

◆ その他、「研究会通信」による関係機関・団体多数

9. 活動の成果と問題点（課題提起）

- (1) 2016年度～2018年度まで3年間にわたり、いかに、「共助・近助の地域を再構築することができるか」を目的に、住民主体の企画運営により、「港地域ささえあい講座」（港第14・23自治会による組織体・港地域づくり推進会主催）を開講、この講座運営に関わった実行委員有志と地域活動に関心を持つ市民（14名）が、これまでの講座の成果をさらに地域づくりに活かそうと、2019年4月に「志縁団体」として、「焼津福祉文化共創研究会」（福文共）が誕生した。

初年度にして、静岡県コミュニティづくり推進協議会及び焼津市共同募金会の助成事業により、これまで、住民主体で取り組んだ尊い実践講座の3年間の取り組みの総括から

- ① 語れる地域環境の醸成（世代を超えた地域総合型学習形態の仕組みづくり）
- ② 「地縁組織」と「志縁組織」の融合による地域づくりの取り組み
- ③ 「専門性」と「市民性」の融合（管内福祉施設連絡会とのネットワーク化と地域介護力UP）
- ④ 当事者組織化の支援
- ⑤ 具体的な地域の生活支援策の把握
- ⑥ 管内のささえあいの仕組みづくり
- ⑦ 総合的支援組織の再構築（トータルコーディネート機能）
- ⑧ 地域を「見える化」する広報啓発
- ⑨ 制度施策を理解する地域福祉教育環境の醸成
- ⑩ ご近所福祉の復活

等「10の地域課題」を浮き彫りにし、この地域課題から「地域ぐるみの居場所」解決に向けて、『港地域のご近所福祉を拓く 集まる居場所で地域ぐるみのささえあい検証事業』に取り組むことができた。こうした地域を診断する事業を展開し、改めて地域住民の現状を把握することができた。

- (2) 今年度取りまとめた結果をもとに、さらに把握に努めるとともに、管内関係団体や住民に機会があるごとに関連福祉情報を本会から提供し、こうした既存の団体グループの様々な取り組みを地域住民が共有し、積極的に地域参加する機会を呼掛け、地域で顔の見える“近助”の関係づくりができる「協働による地域づくり」として働きかけ、本会の活動基調に基づき、広く住民に「集まる居場所」の意義を広め、[地域総合型学習の場]を具体化し、次年度の活動につなげる課題がある。
- (3) 管内における地域住民が集まり、ふれあい交流している「地域の拠り所」をまとめ、地域全体で共有し、地域の絆を深めることの認識を高める必要性を痛感する。
- (4) 地域住民一人ひとりが地域参加の機会を持つことにより、社会の問題となってきた中高年の閉じこもり社会を防ぎ、男性の地域参加を促し、積極的に仲間づくりをし、「地域ぐるみの居場所」を啓発する必要性がある。
- (5) これまで、長い地域づくりの歩みの中で、世代や領域を超えて、様々な「地域の拠り所」があることを地域全体で再認識する呼びかけの必要性が感じられる。
- (6) 「集める居場所」から「集まる居場所」（楽しむ・交流する・学び合う）について、地域住民への意識を高めることを積極的に働きかけなければならない。
- (7) 「公助の社会」から「共助の社会」について問題提起をさらに呼びかける啓発活動に取り組む。
- (8) 本事業を通じて、関係機関やグループ等との連携（ネットワーク化）と共に「共創社会実現」をさらに試みる課題がある。
- (9) 「地域を家庭化する」試みを呼掛け、住民相互のつながりを呼びかける。
- (10) 身近な地域住民に対して、地域活動に関する関連福祉情報の提供の機会を引き続き努力したい。
- (11) 多様な福祉ニーズが浮上している今日にあって、ささやかながら、本会のような「志縁組織」をもって課題解決につなげられるように、「地縁組織」関係者に積極的に働きかけたい。

【焼津福祉文化共創研究会】2020年度事業報告(活動2年目)

活動テーマ:港地域の福祉課題を「見える化」するご近所福祉の意識と実態を検証

1. **事業実施期間** 2020年4月1日～2021年3月31日
2. **活動範囲** 焼津市港地域づくり推進会管内(港第14・23自治会, 約5,000世帯の中学校区)
3. **会議・研修会等**
 - (1) 定例研究会 … 6回(2020年9月～2021年2月〔毎月土曜日 19:00～21:30〕)
 - (2) 自治会関係者会議 … 4回(2020年9月～2020年12月〔毎月25日, 19:00～20:00〕)
 - (3) 町内会関係者会議 … 5回(2020年9月～2021年1月〔毎月10日〕)
 - (4) 調査研究部会 … 5回(2020年7月～2021年1月, 7/21, 8/8, 8/30, 10/3, 11/11)
 - (5) 公開型研修会 … 2回(11/15, 2/28, 13:00～16:00)
4. **「一人・家族・地域がつながり合う, これからの“福祉力”を探る—ご近所福祉その意識と実態調査」実施**

今回の調査研究活動は, 厳しいコロナ禍を契機に, これまでのご近所の支え合いから, これからの支え合いについて, 「静岡福祉文化を考える会」との協働調査により, 全県域と焼津市港地域の地域性をもとに, 住民の意識と実態を把握し, これからの「港地域のご近所福祉」の在り方について, 調査個票の作成検討から考察までのプロセスを住民主体で取り組み, これからの港地域の課題を整理し, その改善・解決に向けた提言を取りまとめることを目的に実施する。
5. **調査報告書「ご近所福祉その意識と実態調査報告書」の作成(A4版, 80頁, 200部作製)**

厳しいコロナ禍を契機に, これまでのご近所の支え合いから, これからの支え合いについて, 「静岡福祉文化を考える会」との協働活動により, これからの「港地域のご近所福祉」の在り方について, 調査個票の作成検討をはじめ, 調査協力依頼から考察までのプロセスを住民主体によって取り組み, 全県域と焼津市港地域の地域性をもとに住民の意識と実態を把握し, これからの港地域の課題を整理し, その改善・解決に向けた提言を関係方面に報告する目的で作成。
6. **焼津福祉文化共創研究会通信による広報啓発**
 - (1) 日本福祉文化学会 (HP関連の日常的連携維持)
 - (2) 静岡福祉文化を考える会 (「ご近所福祉調査」関連協働作業継続, HP連携維持)
 - (3) 港第14自治会第12町内会関連 (定例居場所開所, 歳末助け合い助成事業協力)
 - (4) 静岡県コミュニティづくり推進協議会 (助成事業日常的連携維持, 通信送信)
 - (5) 焼津市V連絡協議会 (通信配布)
 - (6) 自治会及び地区民生委員児童委員協議会関連 (通信配布)
 - (7) 管内福祉施設連絡会 (通信送信)
 - (8) 港公民館 (港地域づくり推進会) 関連 (通信送信)
 - (9) 焼津市社会福祉協議会 (通信送信)
 - (10) 焼津市行政関連 (地域包括ケア推進課, 地域福祉課) (通信送信)
7. **本会とのブログのリンク**

「静岡福祉文化を考える会」との連携のもと, 「日本福祉文化学会 HP」と「焼津福祉文化共創研究会ブログ」のリンクが, 2020年7月の日本福祉文化学会理事会で承認され, 2020年8月3日以降, 本会の活動法状況を広く啓発できるようになった。
8. **今年度の事業に関わった人員**

延べ, 704名

内訳:	(1) 調査協力者	… 345名
	(2) 自治会関係者会議 (4回×17名)	… 68名
	(3) 町内会関係者会議 (5回×11名)	… 55名
	(4) 民生委員児童委員協議会関係者会議 (3回×24名)	… 72名
	(5) 公開型研修会参加者 (第1回26名, 第2回30名)	… 56名
	(6) 調査研究部会 (5回×6名)	… 30名
	◆ 定例研究会参加者 (通算12回)	… 延べ110名

9. 活動の成果

(1) 事業の活動状況

本事業は、住民を主体に、「調査個票の作成」、「調査の展開」、「データ入力」、「単純・クロス集計分析」等、会員相互の連携で、手づくりの調査活動に取り組むことができた。年間計画に基づき、「定例研究会」他に、関連団体との連携、本会内に「調査研究部会」を新たに設置し、事業の円滑化に努めた結果、住民に対してIT（HP、ブログ）による地域問題を発信する広報啓発領域が拡大され、身近な地域問題への関心が高まった。

(2) 調査の回答状況

約5,000世帯をもって構成された「港地域づくり推進会」（港第14・23自治会）管内における「ご近所福祉その意識と実態調査」事業に取り組んだ。

コロナ禍の厳しい状況下であったが、会員の創意工夫により、360枚の調査票を配布し、150枚の回収目標の事業計画であったが、地域住民の関心度は高く、回収率95.8%、345枚の調査票を回収できた。年代別、性別、領域別、居住歴別、家族構成別等幅広い基本属性をもとに、管内住民の意識と実態を把握することができた。主には、男性47.8%、女性51.3%と男性からの積極的な回答が得られた。ほぼ、既婚者、持ち家の住民からの回答であった。年代別では、60代～70代は26%前後、20代～30代は7%前後、40代～50代は13%前後とやや関心が薄い状況が明らかになった。

(3) 調査報告書による改善解決に向けた呼びかけ

関係機関・団体等との協働（専門性と市民性の融合）により、調査結果を「ご近所福祉その意識と実態調査報告書」（A4版、88ページ、第1章～第5章の組み立て）として取りまとめ、広く調査に協力いただいた関係機関・関係者に呼びかけ、「集まる居場所」をもとに、「公開型研修会」を開催し、調査活動の意義とプロセスを通じて、調査結果から浮き彫りになった課題を共有し、改善解決に向けた呼びかけをすることができた。

(4) 「地縁団体」と「志縁団体」との「協働」

管内自治会、民生委員児童委員協議会、町内会等に、調査に協力をいただき、今回の考察結果を情報提供することにより、今後において「地縁団体」と「志縁団体」との「協働」がさらに一歩改善の兆しが見えてきた。

(5) 次年度計画への反映

浮き彫りになった「地域課題」を広く地域住民に情報提供する機会ができた。さらに、具体的な活動展開をするために、次年度の活動計画策定に反映する糸口ができた。

10. 今後に向けた課題

(1) 地縁団体との協働の重要性

「地域を知る」、「地域活動の見える化・わかる化」を本事業で、広く地域団体・関係者に働きかけることはできた。しかしながら、地縁団体の現状で、任期1年または2年で退任する当て職の関係者に、いかに、継続的につなげることができるか、現状ではなかなか難しい側面がある。引続き、「地縁団体」との協働連携を維持し、本会（「志縁」）の活動の取り組みを積極的に啓発し、地域活動に、ともに参画する地域づくりに向けて、地域住民に積極的に働きかけなければならない。

(2) 若い世代への情報発信

本事業により明らかになった「課題」を、日常生活の中で、改善・解決するための情報提供の仕組みをさらに検討していかなければならない。そのために、「本会ブログ」と管内自治会HPとをリンクし、若い世代層に、いつでも情報を発信できるように努力したい。
✓ すでに、作業は進んでいる。焼津市社会福祉協議会HPに、各種団体とリンクする仕組みを明確にすることが望まれる。

(3) 活動結果の積極的な提供

関係機関・団体（行政等）が、「地域」をどこまで把握し理解しているのかである。こうした活動結果を積極的に提供することが必要と感じられる。また、常に情報を共有できることを期待したい。

【焼津福祉文化共創研究会】2021年度事業報告(活動3年目)

活動テーマ:港地域をつなぐ・ささえあう“ご近所福祉”を創る

1. 2021年度本会活動の着眼項目

- (1) 世代を超えて「地域ぐるみの居場所」を創る「地域総合型学習」の場
- (2) 「ご近所」を地域の話題とし、地域社会の課題提起ができる場
- (3) 「専門性と市民性の融合」を基に、「協働」による課題解決改善に取り組む場
- (4) 地域住民の「ご近所福祉 その意識と実態調査」結果から浮き彫りになった議題を議論し合う場
- (5) 地域のささえあいの仕組みづくりを「理論と実践」活動のプロセスで取り組む場
- (6) 活動財源確保

2. 事業実施期間 2021年4月1日～2022年3月31日

3. 活動範囲 焼津市港地域づくり推進会管内(港第14・23自治会, 約5,000世帯の中学校区)

4. 会議研修等

- (1) 定例研究会…12回開催(原則毎月第2土曜日 18:30～21:30)
- (2) 自治会関係者会議…延べ6回出席(港第14・23自治会関係者会議で調査説明報告)
- (3) 町内会関係者会議…延べ7回出席(関係町内会関係者会議で調査説明報告)
- (4) 調査部会…14回開催(静岡福祉文化を考える会との協働による取り組み)
- (5) 管内学校及び子ども会関係者連絡調整…延べ8回実施
- (6) 港地区民生委員児童委員協議会定例会議出席説明報告…延べ4回
- (7) 公開型報告研修会…コロナ感染対策の結果、今年度は開催見合わせ(準備完了)。

5. 「“福祉”ってなに? 244名の子どもたちに聞きました調査」の実施

地域コミュニティが希薄化している中、次世代を担う子どもたちの「思いやりの心」が確実に醸成されているか、大いに気になる場所である。加えて、厳しいコロナ禍の続く今日にあって、子どもたちの福祉に対する意識と実態の現状はどうか、問い質す時期を迎えている。

この度の調査では、身近な生活圏域において、地域の大人社会と向き合う子どもたちを対象にご近所や同居する高齢者(認知症高齢者含)、障がい児者等への思いやり等について、下記(6)に挙げる調査項目の意識と実態を把握し、子どもたちを取り巻く地域環境の課題を改善・解決し、「共生社会」をめざして、地域社会に提言することを目的に取り組む。

6. 「“福祉”ってなに? 244名の子どもたちに聞きました調査報告書」の発行(A4版, 80ページ, 200部)

結成して、3年目を迎えた「焼津福祉文化共創研究会」は、これまで一貫して「地域の福祉課題を把握して地域を知る」、「地域社会へ課題提起をする」をもとに、実践活動の大きな柱立ての一つとして、年度ごとに地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組んできた。

初年度の「地域ぐるみの居場所検証」から、2年目は大人社会を対象に、ご近所の支え合いを把握する「ご近所福祉その意識と実態調査」に取り組み、地域住民相互のつながりやささえあいが弱くなり、地域コミュニティへの関わりについて、その意識と実態がさらに希薄化していることが浮き彫りになった。

こうした、地域環境で生活している、次世代を担う子どもたちの「思いやりの心」が、確実に醸成されているか、加えて厳しいコロナ禍の続く今日にあって、子どもたちの福祉に対する意識と実態の現状はどうか問い質す時期を迎えた。このたび、「2021年度“赤い羽根”みんなのしあわせ助成事業」のご支援をいただき、身近な生活圏域において、地域の大人社会と向き合う子どもたちを対象にご近所や同居する高齢者(認知症高齢者含)、障がい児者等への思いやり等について、「基本属性」、「生活状況」(子ども自身)、「家庭・家族のこと」、「地

域社会・地域活動のこと」、「こんな福祉との出会いがありました」、「地域への期待」（自由な意見提言）の調査項目の意識と実態を把握した。

これまでの調査研究活動のプロセスを継承し、子どもたちを取り巻く地域環境の課題の改善・解決をめざして、地域社会に提言する調査研究活動の分析結果を、さらに管内の学校、関係団体に、これからの地域づくりを子どもからの提言として公表するとともに、調査に協力いただいた各子ども会世話人や、各種研修会等における研究協議資料として有効活用し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて、いかにして福祉コミュニティを構築するかを問題提起し、地域住民一人ひとりの意識改革に努めるために「調査報告書」を作成した。

7. 調査研究事業

(1) 「地域ぐるみの居場所」検証事業（継続事業）

- 2019年度に実施した検証事業の継続的取り組みとして、55の団体・グループをさらに掘り下げ、項目白紙欄の補充等も含めて、管内における「地域ぐるみの居場所」の把握に取り組んだ。
- 紹介集の更なる充実と共に、管内の「居場所の意義」を推進する努力をした。

(2) 「ご近所福祉 その意識と実態調査」事業（継続事業）

- 2020年度に実施した調査結果及び考察を、静岡福祉文化を考える会との協働により、さらに議論を深めて、地域の実情把握による課題解決に向けて取り組んだ。

(3) 「150名の子どもたちに聞きます “福祉”ってなに?調査」事業

- 大人社会の地域コミュニティへの希薄化の今日、港地域づくり推進会管内の小学校5・6年生を対象に、生活全般、家庭・家族、地域社会、地域参加等の意識と実態調査を実施し、これからの地域づくりへの提言の一助とする目的で実施。

8. 研修事業

(1) 「ご近所福祉検証学習会」（公開型研修会）の開催（継続事業）

- 2020年度に取り組んだ「ご近所福祉その意識と実態調査」について、地域住民とともに、「若者発 ご近所福祉かるた」を教材にして、定例研究会等で随時実施。
- 助成事業支援団体（県コミ推協、焼津市社協等）、県及び市行政関係方面に研究会通信を通じて情報提供。

(2) 地域をつなぐ協働の努力

- 管内福祉施設連絡会との地域支援、生活支援に関して、研究会通信を通じて情報提供。

(3) 現場実践研修を協議

- 「若者発 ご近所福祉かるた」の活用による「近助」の在り方について、定例研究会で議論。
- 地域コミュニティ組織または、福祉事業所・施設等における「近助」の在り方を定例研究会で議論しながら、地域ぐるみのささえあいと地域参加を議論。

(4) 調査研究考察報告

- 調査研究事業として取り組んだ結果を研究会通信で、関係方面に発信。

9. 広報事業

- (1) 本会ブログによる、活動を通じた課題提起（日本福祉文化学会 HP を主体とした、静岡福祉文化を考える会ブログとのリンクによる発信。）
- (2) 焼津福祉文化共創研究会通信の発行（No.19～No.31、13回発行）
- (3) 積極的なマスコミへの情報提供

10. 協働事業

- (1) 管内福祉施設連絡会との協働事業
- (2) 静岡福祉文化を考える会との協働事業
- (3) 焼津市V連絡協議会との協働事業

- (4) 各種団体・グループとの協働事業（港地域づくり推進会，港第14・23自治会，管内子ども会，管内小学校（2カ所），民生委員児童委員協議会等）

11. 関係機関・団体等との連携

- (1) 静岡県社会福祉協議会，焼津市社会福祉協議会への情報提供・連携
- (2) 「静岡福祉文化を考える会」及び「日本福祉文化学会」との情報の共有と活動の協働（「地方発 福祉文化の創造」の実践に基づく）
 - 各種事業の取組についての情報提供
 - 各種事業の実践活動の共有
- (3) 関連機関・団体，大学・専門学校への情報提供
 - 焼津市V連絡協議会との連携（定期総会出席，定期V連代表者会議出席と情報提供）
- (4) ふじのくに未来財団への情報提供
- (5) 静岡県コミュニティづくり推進協議会への情報提供
- (6) その他，必要に応じて，関係機関・団体に情報提供

12. 活動を振り返る（成果と課題）

- (1) コミュニティ意識が希薄化している社会で子どもたちは，大人社会に向けてどのように訴えているかを把握することができた。年間計画に基づき，定例研究会は，限られた会員の出席に，今年度は「調査部会」を明確に位置付け，活動の進行管理をすることができた。
- (2) 活動を通じて，「福祉文化」を「見える化」，「わかる化」，「見せる化」に努め，ブログにその都度考察した資料をUPした。その結果，この1年間の活動を県内外に発信することができた。また，講座開講から本会誕生後の3年間をまとめた内容の「あしたの日本を創る協会」発行の「まちむら」第155号・第157号に掲載できた。
- (3) 特に，調査活動のプロセスでは，関係機関・団体等との協働（専門性と市民性の融合）の在り方を検証することができた。今年度は，子どもを取り巻く地域環境について，これからどのように再構築すべきかを，広く課題提起することができた。
- (4) 制約された地域活動において，会員それぞれがどのように関わる必要があるか，課題が浮かび上がった。「理論と実践の融合」を掲げている本会の活動の方向性を改めて認識し，さらに発展していく活動に努力していくことを確認できた。
- (5) 「地域を知る」そして，そこから浮き彫りになった地域課題を改善し，解決していくための活動はいかにあるべきか，広く地域団体・関係者に働きかけるにあたり，地縁団体の現状で「協働」，「連携」を維持し，本会（「志縁」）の活動の取り組みを積極的に啓発し，地域活動に，ともに参画する地域づくりに向けて，地域市民に積極的に働きかけなければならない。
- (6) 計画した地域活動を実現していくためには，活動資金（財源確保）の課題が大きい。そのためには，地域社会にしっかりと問題提起をしていく提案をしなければならない。単に，自己満足的な活動に留まっていたのでは発展性がない。約2年間，厳しいコロナ禍で，活動が制約される中，活動の原点をもとに，地域課題（テーマ）を掲げていくことが求められる。コロナ明け，地域住民はどのような地域社会を期待するのだろうか，コロナで「これからの真のコミュニティ像」をどのように描いたことかを把握していく課題もある。また，今年度の調査結果から浮き彫りにした「地域への提言」を検証することも必要である。単に，提言することに留めず，いかに地域社会に働きかけをしていくかの取り組みも活動に含めていかなければならない。そのためにも，早急に財源確保に向けた努力をしていきたい。今年度は，調査結果をもとに開講する予定であった「公開型調査報告研修会」を延期した。すでに，調査報告書を配布しているが，子供会や自治会・町内会役員が交代した次年度の早い時期に，新たな呼掛けで，「これからの地域づくり」を学び合う仕掛けをしていきたい。

【焼津福祉文化共創研究会】2022年度活動計画

活動テーマ:わかる・見える実践活動で“福祉文化としてのご近所福祉を探る

改めて、市民主体で取り組んだ、尊い実践講座の3年間の取り組みの総括から、次の「10の地域課題」を浮き彫りに、本会が誕生した。

- (1) 語れる地域環境の醸成（世代を超えた地域総合型学習形態の仕組みづくり）
- (2) 「地縁組織」（お互い様）と「志縁組織」（使命感）の融合による地域づくりの取り組み
- (3) 「専門性」と「市民性」の融合（管内福祉施設連絡会とのネットワーク化と地域介護力UP）
- (4) 当事者組織化の支援
- (5) 具体的な地域の生活支援策の把握
- (6) 管内のささえあいの仕組みづくり
- (7) 総合的地域支援組織の再構築（トータルコーディネート機能）
- (8) 地域を「見える化」する広報啓発
- (9) 制度施策を理解する地域福祉教育環境の醸成
- (10) ご近所福祉の復活

厳しいコロナ禍下、「共助・近助の地域の再構築」を目的に、活動の原点をもとに、市民有志で結成した本会の活動は、尊い「焼津市赤い羽根共同募金地域福祉促進助成事業」と「静岡県コミュニティづくり推進協議会・コミュニティ活動集団助成事業」により、地域住民に検証してきた活動を報告し、意義ある活動を展開し、ここに3年間活動を維持できた。

■ 1年目(2019年度)

活動テーマ:「港地域の“ご近所”を切り拓く 集まる居場所で地域ぐるみのささえあいを検証する」

約5,000世帯で組織化されている「港地域づくり推進会」（港第14・23自治会）管内において、今日まで、地域や個々の人々のつながりの中で、気兼ねなく集まり、会話を交わし、ふれあい交流し、普段の拠り所としている「居場所的機能」を持つ55の既存の各種団体グループ」を把握し、「集める居場所から集まる居場所」を課題提起できた。

■ 2年目(2020年度)

活動テーマ:「港地域のご近所福祉を切り拓くパート2ー協働による地域課題解決を探るー」

1年目に取りまとめた結果をもとに、さらに把握に努めるとともに、管内関係団体や住民に機会があるごとに情報を提供し、改めて、こうした既存の団体グループの様々な取り組みを地域住民が共有し、積極的に地域参加する機会を呼掛け、「ご近所福祉その意識と実態調査」に取り組み、地域で顔の見える“近助”の関係づくりができる「協働による地域づくり」を働きかけた。

■ 3年目(2021年度)

活動テーマ:「港地域をつなぐ・ささえあう“ご近所福祉”を創る」

この2年間にわたり考察・実践してきた活動のプロセスから、改めて、港地域の現状を踏まえて、地域を家庭化し、世代を超えて誰もが地域づくりに関われるご近所を“地域の居場所”としていく活動に取り組み、子どもを対象に管内関係団体・学校関係者の協力により、尊い子どもたちからの意見を大人社会への提言としてまとめることができた。

■ 4年目(2022年度)

活動テーマ:「わかる・見える実践活動で“福祉文化としてのご近所福祉”を探る」

これまでの3年間の活動から浮き彫りにした地域課題を改めて再考しながら、真の問題解決に向けた具体的な検証を試みる。

1. 活動の着眼項目

- (1) 世代を超えて「地域ぐるみの居場所」、「ご近所福祉の構築維持」を創る「地域総合型公開学習」の場
- (2) 常に、地域社会に向けた課題提起と協働による活動ができる場
- (3) 「専門性と市民性の融合」を基に、「協働」による実践的課題解決改善に取り組む（地縁団体と志縁団体の融合）
- (4) 3年間の調査結果・考察から浮き彫りになった課題を議論し合う場（コーディネート資質の向上）
- (5) 地域コミュニティの活性化に向けた仕組みづくりを「理論と実践の融合」により継続的活動に取り組む場
- (6) 常に、地域社会に積極的に活動が展開できるように「活動財源確保」に努める

2. 役員会の開催

- (1) 実務型役員会運営に徹し、一丸となって、活動の進捗状況管理と検証に努める。
- (2) 定例研究会開催日の前に、活動計画に基づく運営について、協議の場を持つ。
- (3) 様々な地域実践活動から、「地方発福祉文化の創造」を問題提起する。

3. 定例研究会の開催

- (1) 原則、毎月第2土曜日、18:30～21:00を定例開催日とする（別添活動計画表参照）。
- (2) 各種活動の状況に応じて、臨時研究会をもって、円滑な運営に努める。

4. 事業関連部会設置と開催

- (1) 本会活動の活性化と円滑に展開するために、事業別部会を設置して運営する。
- (2) これまでの3年間の活動の取り組みから、「調査研究部会」、「広報部会」、「研修部会」を必要に応じて設置する。
- (3) 各部会で議論した内容は、活動に成果につなげるように、その都度定例研究会で、さらに議論を深める。

5. 主な活動の取り組み

(1) 調査研究事業

① 「地域ぐるみの居場所」検証事業（継続事業）

- 2019年度実施の検証事業の継続的取り組みとして、55の団体・グループをさらに掘り下げ、項目白紙欄の補充等も含めて、管内における「地域ぐるみの居場所」の把握に取り組む。
- 「紹介集」の更なる充実と共に、「居場所の意義」を推進する努力をする。

② 「ご近所福祉 その意識と実態調査」事業（継続事業）

- 2020年度実施した調査結果及び考察を、「静岡福祉文化を考える会」との協働により、さらに議論を深めて、地域の実情把握による課題解決に向けた取り組みをする。

③ 「“福祉”ってなに？ 244名の子どもたちに聞きました調査」検証事業

- 2021年度実施した調査結果及び考察を基に、学校教育や地域行事などにおいて、「若者発 ご近所福祉かるた」の有効活用と意見交換を試みる。

④ 「共助社会の再構築」の検証

- 長引く厳しいコロナ禍下における生活の孤立化現状と地域社会全体での取り組みを地域社会に働きかけ、改めて「共助社会の再構築」を検証する。

(2) 研修事業

① 公開型研修会として「ご近所福祉検証研修会」の開催（継続事業）

- これまで3年間取り組んだ「地域ぐるみの居場所検証」、「ご近所福祉その意識と実態調査事業」、「子どもから大人社会への提言」等から浮き彫りになった課題を活動テーマに、地域住民福祉教育教材として「若者発 ご近所福祉かるた」を活用し、地域参加を提起していく。
- 助成事業支援団体（県コミ推協・焼津市社協等）、県及び市行政関係方面に案内をする。
- 本会会員の提案をもとに、内容の工夫と具体的な役割分担をもって実現につなげる。（進行、プログラム参加、運営演出、資料作成、広報啓発）

② 地域をつなぐ協働研修会

- 管内福祉施設連絡会との「地域支援」、「生活支援」に関する協働研修会の開催

③ 現場実践研修会

- 「若者発 ご近所福祉かるた」の活用による「近助」の在り方を学び合う機会を持つ（学校教育）
- 地域コミュニティ組織または、福祉事業所・施設等における「近助」の在り方を議論

しながら、地域ぐるみのささえあいと地域参加を議論し合う。

④ 調査研究考察報告研修会

➤ 調査研究事業として取り組んだ結果を報告し、啓発研修の機会とする。

⑤ 会員による「地域との共生」をテーマとする発表

(3) 広報事業

- ① 日本福祉文化学会 HP を主体に、静岡福祉文化を考える会ブログとの連動による本会ブログにより、広く活動を通じた課題提起を発信
- ② 焼津福祉文化共創研究会通信の発行
- ③ 積極的なマスコミへの情報提供

(4) 協働事業

- ① 管内福祉施設連絡会
- ② 静岡福祉文化を考える会
- ③ 焼津市 V 連絡協議会
- ④ 管内各種団体・グループ
- ⑤ 管内学校教育及び社会教育領域

6. 関係機関・団体との連携

- (1) 静岡県社会福祉協議会、焼津市社会福祉協議会及び近隣社協への情報提供・連携
- (2) 「地方発 福祉文化の創造」の実践を基に、静岡福祉文化を考える会及び日本福祉文化学会との情報共有と活動の協働を探る。
 - 各種事業の取り組みについての情報提供
 - 各種事業の実践活動の共有
- (3) 関係機関・団体、大学・専門学校及び管内学校教育・社会教育領域への情報提供
- (4) 焼津市 V 連絡協議会との連携
 - 定期総会出席
 - 定期 V 連代表者会議出席と情報提供（通信配布）、問題提起による活動活性化の提言
- (5) ふじのくに未来財団への情報提供
- (6) 静岡県コミュニティづくり推進協議会への情報提供
- (7) 管内福祉施設連絡会、地域包括支援センターとの連携と情報共有（通信配布）
- (8) 港地域づくり推進会（事務局：港公民館）及び管内自治会（町内会）への情報提供
 - 通信送信
- (9) 各種活動状況報告港地区民生委員児童委員協議会への情報提供
- (10) 公益財団法人あしたの日本を創る協会への情報提供
- (11) 公益財団法人さわやか福祉財団への情報提供
- (12) その他、必要に応じて関係機関・団体に情報提供



公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い募金助成事業
焼津福祉文化共創研究会 2022年度「地域共生社会を目指す仕組み検証事業」
テーマ:高齢者とともに、地域共生社会を拓く～ホッとする地域づくりは誰が担うか～
「地域共生社会調査研究部会」設置要綱

1. 設置目的

今日、地域コミュニティへの参画の希薄化とともに、家族機能やご近所の支え合いは、制度や施策等公助ありきの意図的支援が当たり前のような社会環境となりつつある。

加えて、長引く厳しいコロナ禍において、ますます地域コミュニティのつながりやご近所の支え合いも弱くなっている。こうした制約された社会環境の中で生活している高齢者自身の現状や、地域社会の共助の実情を把握するとともに、コロナ明けの地域社会をどのように望んでいるかを管内の高齢者の立場から検証する目的で「ホッとする、安心した地域づくりその意識と実態調査」事業を実施する。

調査に関する地域社会の現状認識、計画に基づく円滑な調査の展開協議（調査個票作成、調査集計・分析、調査結果考察、調査報告書編集、調査公表検討等）の議論を深めるとともに、調査結果をもとに、高齢者の積極的な地域参加を促し社会的孤立を防ぎ、世代を超えた地域ぐるみの支え合いにより、地域共生社会づくりの在り方を探ることを目的に設置する。

2. 構成

専門性と市民性を融合した住民主体を基本に、本会会員及び本事業に関心を持つ関係者の自発的な参画による構成で運営。

3. 協力

さわやかクラブやいづ連合会

4. 設置期間と研究会開催日

(1) 設置期間

本事業活動期間（2022年6月16日～2023年3月31日）

(2) 開催時期（会場は全て北川原公会堂）

回	開催日時	研究協議内容（概要）
1	07月30日（土）18:30	研究会の位置づけと方向性、地域の現状、課題整理
2	08月06日（土）18:30	調査実施計画協議（調査実施要項・調査個票・調査票配布）
3	09月03日（土）18:30	調査実施上の課題反響、調査集計作業
4	10月01日（土）18:30	調査回収状況、調査集計作業、協働の課題
5	11月05日（土）18:30	調査集計作業&考察作業（意識と実態と提言）
6	12月03日（土）18:30	調査から見えた意識と実態と地域づくりの課題考察①
7	12月17日（土）18:30	調査から見えた意識と実態と地域づくりの課題考察②
8	01月07日（土）18:30	調査報告書ページ仕立て作業、入稿、報告研修会計画
9	02月04日（土）18:30	調査結果の検証、報告研修会の具体化
10	03月04日（土）18:30	研究会総括（成果）、さわやか福祉財団へ報告

5. 研究部会の運営・連絡先

(1) 研究部会運営 「焼津福祉文化共創研究会」

(2) 研究部会連絡先

〒425-0041 焼津市石津 751-1 焼津福祉文化共創研究会 代表 平田 厚
TEL & FAX: 054-624-1924 携帯: 090-4861-4547

【焼津福祉文化共創研究会】2022 年度地域共生社会をめざす仕組み検証事業 「ホッとする、安心した地域づくり その意識と実態調査」実施要項

1. 調査の目的

本会は、2019 年度結成以来、地域の福祉課題をテーマに、大人社会を対象に調査研究活動に取り組んできた。これまでの調査考察結果から、地域住民相互のつながりやささえあいが弱くなり、地域コミュニティへの関わりについて、その意識と実態が希薄化の傾向にあることが浮き彫りになった。さらに、長引く厳しいコロナ禍で、尊い地域コミュニティの希薄化による「共助」、「自助」が衰退傾向にある地域環境の中で、管内に暮らす高齢者の現状を把握するとともに、コロナ明けに期待する地域（ご近所）のやさえあいの仕組みづくりについて地域社会が果たすべき課題を提言することを目的に実施する。

2. 実施主体 焼津福祉文化共創研究会

3. 協力（交渉中）

管内民生委員児童委員協議会、地縁団体（自治会・町内会）、さわやかクラブ...etc.

4. 調査対象

「港地域づくり推進会」管内（港第 14・23 自治会）の 65 歳以上の高齢者約 200 名の調査票回収を目標に実施。

5. 調査依頼&配布方法

(1) 会員（現在 11 名×各 20 枚）	…	220 枚
(2) 地域実践者等に依頼	…	20 枚
(3) 志縁団体等	…	50 枚
(4) 地縁団体等	…	60 枚
Total		350 枚

6. 調査項目

(1) 基本属性	(5) 地域社会との関わり（実態）
(2) 生活状況（高齢者自身）	(6) 地域参加の動向
(3) 家庭・家族のこと	(7) 地域環境
(4) 地域社会との関わり（意識）	(8) 提言（自由な意見提言）

7. 調査展開

- (1) 調査項目・調査票検討 … 2022 年 07 月～2022 年 09 月
* 本会定例会及び調査研究部会（地域共生研究部会調査）等を中心に検討。
- (2) 調査票完成 … 2022 年 09 月 30 日
- (3) 調査依頼（実施期間） … 2022 年 09 月 30 日～2022 年 10 月 30 日
* 回収まとめ…2022 年 10 月 31 日
- (4) 入力期間 … 2022 年 10 月 10 日～2022 年 11 月 30 日
- (5) 分析&考察 … 2022 年 10 月 30 日～2022 年 12 月 01 日
- (6) 報告書完成 … 2023 年 01 月 30 日
- (7) 公表&報告 … 2023 年 02 月中旬
* 公開型研修会、関係機関・団体等の各研修会で実施。
* 本会通信で経過報告及び考察概要紹介。

8. 問い合わせ先

〒425-0041 焼津市石津 751-1 焼津福祉文化共創研究会 代表 平田 厚
TEL & FAX: 054-624-1924 携帯：090-4861-4547

- 設問 17 あなたがこれから参加してみたい興味のある地域活動についてお答え下さい。
- ①趣味や特技を生かせる活動 ②環境美化に関する活動 ③高齢者を対象とした健康交流の活動
 ④世代間交流できる学習活動 ⑤世代間交流できる文化芸術活動 ⑥身近な地域問題に関する活動
 ⑦その他 () ⑧特になし
- 設問 18 あなたの人生を振り返り、あの時は良かったと、いま感じる内容について、主なものを3つまでお答え下さい。
- ①家族・スゴボー、レタリコミュニケーション活動 ②家族との和やかなひと時 ③子どもたちの元気な姿
 ④近所同士の交流 ⑤趣味仲間との活動 ⑥町内会活動・行事 ⑦自治会活動・行事
 ⑧老人クラブ ⑨地人会 ⑩PTA ⑪町会のお祭り ⑫環境美化活動 ⑬運動会
 ⑭青年団(青年会・青年学級) ⑮高齢者との交流(居場所・サロン・ミニゴルフコース等) ⑯趣味活動
 ⑰学習・習字活動 ⑱子供会 ⑲その他 () ⑳特になし
- 設問 19 あなたの、ご近所の人とのお付き合いについて、主なものを2つまでお答え下さい。
- ①遠くに出掛する機会 ②外で立ち話をする機会 ③「おすそ分け」する機会を持つ
 ④田舎にたむろる関係を持つ ⑤お茶や食事と一緒にする ⑥趣味を共にする ⑦晴れの日に駆け寄る
 ⑧理事やちよっとした行事も頼める関係を持つ ⑨ご近所のおしきりに使う ⑩特になし
- 設問 20 あなたは、ご近所に頼りたくていて行き来する意がありますか。
- ①多くある ②何軒かある ③1軒くらいはある ④まったくない
- 設問 21 あなたは、地域の行事や活動に参加していますか。
- ①積極的に参加している ②時々参加している ③ほとんど参加していない
 ④積極的に参加していない ⑤特になし
- 設問 22 設問 21で「①積極的に参加している」「②時々参加している」と答えた人に向います。
- あなたが、主に「参加している内容」を3つまでお答え下さい。
- ①清掃活動 ②地域の祭り ③PTA・子ども会活動 ④防災訓練 ⑤健康スポーツ関連行事
 ⑥文化祭関連行事 ⑦奉仕活動 ⑧交遊会活動 ⑨自治会・町内会活動 ⑩趣味活動
 ⑪その他 ()
- 設問 23 あなたは、「地域づくり」を進める活動に参加協力の呼びかけがあったとき参加しますか。
- ①ぜひ参加したい ②呼びかけがあれば参加してもよい ③参加したくない
- 設問 24 設問 23で「①ぜひ参加したい」「②呼びかけがあれば参加してもよい」と回答の方にお伺いします。
- 主な活動内容を3つまでお答え下さい。
- ①子育てや子どもの見守り ②高齢者や障害者への支援(買い物・家事・移送等)
 ③地域づくりや生きがいづくり ④介護者や介護を必要とする方への支援
 ⑤自治会・町内会等運営の事業 ⑥防災・防災等生活安全に関する活動
 ⑦スポーツ・文化・レタリエーション等の活動 ⑧世代を越えた趣味・地域行事等交流活動
 ⑨青少年健全育成活動 ⑩高齢者以上の見守り ⑪生活改善(環境美化・緑化・まちづくり等)
 ⑫生涯学習(異業種・同業・シニア人材センター)
 ⑬教育・文化活動(学習会・子供会育成・町土産物等) ⑭その他 () ⑮特になし
- 設問 25 設問 23で「③参加したくない」と答えた人にも、主な理由を3つまでお答え下さい。
- ①時間がない ②興味がおかない ③自分に合った活動がない ④趣味でない ⑤費用がかかる
 ⑥近くに活動がない ⑦情報が入らぬ ⑧一緒に活動する人がいない ⑨参加のきっかけがない
 ⑩参加したいと思わない ⑪社会的動きが鈍くなる ⑫その他 ()
- 設問 26 あなたの一番安心(ホッと)できる場所についてお伺いします。
- ①家庭・家前 ②近所 ③友人との付き合い ④趣味仲間 ⑤地域の「居場所・サロン」
 ⑥利用している福祉施設 ⑦社会教育施設(公民館・図書館) ⑧その他 () ⑨なし

- 設問 27 今後、あなたが地域において、望んだ状態において、望んだ状態を維持していくために必要と思われる支援・サービスについて、主なものを3つまでお答え下さい。
- ①見守り・声かけ(互見活動) ②移動支援 ③同行(買い物・運送等) ④文庫 ⑤配達 ⑥子育て支援
 ⑦ゴミ出し ⑧調理 ⑨宅配がなされたらいいサービス(配達等) ⑩乗換(車取り) ⑪災害時の手助け
 ⑫話し相手 ⑬趣味・娯楽の提供 ⑭健康な介助・介護 ⑮介護 ⑯高齢者の見守り ⑰高齢者の健康
 ⑱健康な生活 ⑲その他 ()
- 設問 28 あなたは、ともに助け合う地域づくりに関して、どのような理由があれば活動しやすくなると思いますか。
- ①地域が抱えている課題の解決が提供されていること ②一緒に活動する人(仲間)がいること
 ③一人ひとりが役割に参加できる活動の機会があること ④仲間や活動に関する情報の入手がたやすい
 ⑤長年仲間や活動仲間が絶えず参加していること
 ⑥ボランティア体験など、公共的な活動に参加しやすい仕組みがあること
 ⑦距離などにより、時間的なゆとりが出来ること
 ⑧公共的な活動を積極的に評価し、支援する仕組みがあること ⑨どんな環境でも活動したいとは思わない
 ⑩その他 ()
- 設問 29 あなたの地域には、「地域ぐるみで見守り活動」をする気持ちはありますか。
- ①地域が一体となって積極的に取り組んでいる ②ある程度地域住民が取り組んでいる
 ③どこからかという消極的な取り組みである ④ほとんど活動はしていない ⑤おこなわない
- 設問 30 あなたが、今の地域で暮らし続けるために必要と思われることについて、主なものを3つまでお答え下さい。
- ①コミュニティ組織体制の確立 ②ご近所のみで見守り活動 ③身近な人の見守りと活動体制
 ④相談体制や連絡体制の充実 ⑤福祉人材の養成 ⑥NPO法人等が主体となる居りこごえ支援体制
 ⑦身近なところでの「居場所」の開設 ⑧企業・学校・高齢社会での「福祉教育」の推進
 ⑨自治会の地域への連絡的な取り組み ⑩自治会主体の地域への積極的な取り組み
 ⑪地域団体(自治会・町内会)の積極的な福祉活動の取り組み ⑫その他 ()
- 設問 31 あなたが、生活しやすくなったときの「有償サービス」支援の期間についてお伺いします。
- ①大いに利用したい ②医師を聞いたうえで都向きに考えたい ③少し利用したい ④利用しない
 ⑤わからない
- 設問 32 あなたの地域において、前区住居間士がひと時を過ごす「居場所」はどのような運営(運営)であればよいと思いますか。
- ①自由にいつでも出入りできる運営 ②ボランティアによる計画的な運営
 ③自治会・町内会等の主体的な活動としての運営 ④利用者が主体となる運営
 ⑤利用者が主体で運営する運営 ⑥福祉施設が地域貢献活動として運営する運営
 ⑦その他 ()
- 設問 33 あなたの「ホッと」する、安心した地域」についてのご意見を委員書にご紹介下さい。

ご協力ありがとうございました。

「徳津福祉文化共創研究会」事務局
 〒425-0044 徳津市日新町 15-17
 百の木のデザイン・ビジネスセンター内
 Tel. 054-623-3685 Fax. 054-656-3731
 徳津事務所 毎月発行、有料発行、郵購も可 郵購手数料 送料付き 平成28年

Life-Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ 焼津福文共通誌第38号

● 2022年夏から秋にかけて、「東海情報告書」を出版し、「『ご近所のささえあい』を誰が担うか調査報告書」を出版し、「『ご近所のささえあい』を誰が担うか調査報告書」出版を上げる
 本会4年間の活動...「恵福南」ご近所「子ども共創」プロセスを検証

長らく、新しいコロナ禍で、社会全体に停滞感がある中、「ご近所支援」の重要性が再び認められる時期。また、介護保険制度がスタートして以来、地域が抱えている福祉課題は、公営施設や「ご近所」で支えられてきた。そして、地域が抱えている福祉課題は、公営施設や「ご近所」で支えられてきた。そして、地域が抱えている福祉課題は、公営施設や「ご近所」で支えられてきた。

2016年頃から3年間、地域の福祉課題をテーマに、大人の活動と子育て活動の両方を軸に「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2016年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2017年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2018年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2019年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2020年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2021年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2022年)と続いた。これは、地域の福祉課題をテーマに、大人の活動と子育て活動の両方を軸に「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2016年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2017年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2018年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2019年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2020年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2021年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2022年)と続いた。



「調査報告書」の構成(4.4P)は、下記の通りです。
 ＊第1章 総論 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第2章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第3章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第4章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第5章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第6章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第7章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第8章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第9章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第10章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第11章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第12章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第13章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第14章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第15章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望

「2022年度 公益財団法人さわやか福祉財団地域助け合い基金助成事業」経過報告② 「ホッとする、安心した地域づくり」その意図と実態調査」は、調査結果から回収作業に入る

本会は、2019年度以降、3年間、地域の福祉課題をテーマに、大人の活動と子育て活動の両方を軸に「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2019年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2020年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2021年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2022年)と続いた。これは、地域の福祉課題をテーマに、大人の活動と子育て活動の両方を軸に「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2019年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2020年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2021年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2022年)と続いた。これは、地域の福祉課題をテーマに、大人の活動と子育て活動の両方を軸に「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2019年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2020年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2021年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2022年)と続いた。

№	配布の地域・団体	配布枚数	備考
1	焼津福祉文化共創研究会(協賛)	115枚	115枚×10冊=1150冊
2	焼津福祉文化共創研究会(協賛)	120枚	9冊×2冊×6冊=108冊
3	さわやかクラブ(協賛)	156枚	156枚×2冊×5冊=1560冊
4	さわやかクラブ(協賛)	85枚	85枚×2冊×5冊=850冊
5	恵福南(協賛)	50枚	50枚×2冊×5冊=500冊

また、調査報告書「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2022年)は、調査報告書(2021年)と同様に、回収の報告もあわせて掲載し、回収率を54.5%に引き上げた。回収率は、300%。

- 徳津福祉文化共創研究会 事務局(10月1日～10月31日)
- 9/1 「徳津福祉文化共創研究会事務局(37号)発行
- 9/18 「第3回地域福祉共創研究会(10月)」開催「調査報告書」配布状況(子ども9人の参加)
- 9/19 「調査報告書」作成に関する協議(シブヤク社)
- 9/27 「さわやかクラブ(協賛)」配布状況と回収率の報告
- 9/28 「さわやかクラブ(協賛)」配布状況と回収率の報告
- 9/29 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 9/30 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 9/31 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/1 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/2 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/3 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/4 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/5 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/6 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/7 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/8 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/9 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/10 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/11 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/12 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/13 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/14 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/15 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/16 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/17 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/18 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/19 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/20 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/21 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/22 「調査報告書」配布状況と回収率の報告
- 10/23 「調査報告書」配布状況と回収率の報告

「徳津福祉文化共創研究会」事務局(10月1日～10月31日)は、調査報告書(2022年)は、調査報告書(2021年)と同様に、回収の報告もあわせて掲載し、回収率を54.5%に引き上げた。回収率は、300%。



「徳津福祉文化共創研究会」事務局
 〒425-0044 徳津市日新町 15-17
 百の木のデザイン・ビジネスセンター内
 Tel. 054-623-3685 Fax. 054-656-3731
 徳津事務所 毎月発行、有料発行、郵購も可 郵購手数料 送料付き 平成28年

Life-Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ 焼津福文共通誌第38号

● 2022年夏から秋にかけて、「東海情報告書」を出版し、「『ご近所のささえあい』を誰が担うか調査報告書」を出版し、「『ご近所のささえあい』を誰が担うか調査報告書」出版を上げる
 本会4年間の活動...「恵福南」ご近所「子ども共創」プロセスを検証

長らく、新しいコロナ禍で、社会全体に停滞感がある中、「ご近所支援」の重要性が再び認められる時期。また、介護保険制度がスタートして以来、地域が抱えている福祉課題は、公営施設や「ご近所」で支えられてきた。そして、地域が抱えている福祉課題は、公営施設や「ご近所」で支えられてきた。

2016年頃から3年間、地域の福祉課題をテーマに、大人の活動と子育て活動の両方を軸に「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2016年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2017年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2018年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2019年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2020年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2021年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2022年)と続いた。これは、地域の福祉課題をテーマに、大人の活動と子育て活動の両方を軸に「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2016年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2017年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2018年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2019年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2020年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2021年)、「ご近所のささえあい」を誰が担うか調査報告書(2022年)と続いた。



「調査報告書」の構成(4.4P)は、下記の通りです。
 ＊第1章 総論 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第2章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第3章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第4章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第5章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第6章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第7章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第8章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第9章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第10章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第11章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第12章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第13章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第14章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望
 ＊第15章 調査の経緯、調査の目的、調査の意義、調査の方法、調査の結果、調査の結論、調査の今後の展望

№	配布の地域・団体	配布枚数	備考
1	焼津福祉文化共創研究会(協賛)	115枚	
2	焼津福祉文化共創研究会(協賛)	120枚	120枚×2冊×6冊=1440冊
4	さわやかクラブ(協賛)	156枚	
5	さわやかクラブ(協賛)	85枚	
6	恵福南(協賛)	50枚	
8	さわやかクラブ(協賛)	156枚	
9	さわやかクラブ(協賛)	85枚	
10	さわやかクラブ(協賛)	156枚	
11	さわやかクラブ(協賛)	85枚	
12	さわやかクラブ(協賛)	156枚	
13	さわやかクラブ(協賛)	85枚	
		計	120

学び・経験・出会い・チャンスの領域
世代を超えて、地域ぐるみで“焼津発 福祉を文化に”
焼津福祉文化共創研究会



【焼津福祉文化共創研究会事務局】
〒425-0044 焼津市石津町 15-17
デイサービスマスの木内 焼津福祉文化共創研究会
TEL: 054-367-2878 FAX: 054-367-2884

「焼津福祉文化共創研究会」誕生のプロセス

2016年度～2018年度まで、3年間取り組んできた「焼津地域ささえあい講座」を開催した当時、「なぜ、焼津地域ささえあい講座なのか?」「なぜ、この講座を立ち上げたのか?」「また動員の課題か?」等、さまざまな疑問が地域のあるところから聞かれた。

介護保険制度により、これまで高いこと行われていた「共助」は、いつの間にか、私たちの身近な地域社会から消失され、「公助」「専門性」だけで、私たちの生活は保障される。報酬に比べ、人々の意識も大きく転換している。そんな時代を迎えたからこそ、社会の大きな課題提起を、私たち地域住民が改めて認識する学びが求められた。公助の視点から、「地域支援」、「生活支援」の高齢者が抱えている今、制度の限界から、再び地域での支え合いの仕組みを考え、実践することから、私たち地域社会の主体性から「お互い様」、「ささえあいの精神」を復活したいと想い、「講座」を再開しようとした原点がここにある。

「講座」の運営を、住民主体で取り組み、「地域の福祉課題」を主体的に身近に学び合い、問題意識を持つことがこの講座に求められていた。



地域と志縁の協働による福祉コミュニティ再構築に向けた始動

3年間取り組んだ「焼津地域ささえあい講座」の実行委員及び地域福祉活動に関心を持ち、地域を変えたいという若年層の市民等有志14名が参画し、

- ① 話れる地域課題の醸成
- ② “地域団体”と“志縁団体”の「融合」による地域づくり
- ③ “専門性”と“市民性”の「協働」による地域づくり
- ④ 当事者等の支援を促す
- ⑤ 管内のささえあいの仕組みづくり
- ⑥ 総合的支援推進組織の構築
- ⑦ 地域を「豊か化」する取り組み
- ⑧ 制度効果を理解する地域福祉教育の推進
- ⑨ ご近所福祉の復活（日本語のささえあいの構築づくり）
- ⑩ 世代を超えた「地域総合型学習形態」の仕組みづくり #66

講師から得た思いこれからの地域課題をもとに、「焼津地域の支え合いを考えよう」と、2019年4月に誕生した。

これから、私たちの地域を誰が担うのかではなく、私たち一人ひとりが参画して取り組むための仲間づくりを目指す。さらには、「焼津朝議」（自治会、町内会=お互い様）の復活も、「志縁組織」（目的・使命等による活動単位=ミッション）として、事務局が「協働」で取り組み、地域課題の解決にも努める。

● 目的

本会は、さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人々と市民が一緒に、地域が抱える生活全般の問題を考え、その改善・解決に向けて努力をする。

● 活動基調

- (1) さまざまな分野で活動する人が、専門分野と世代を超えて交流を図る。
 - ✓ 「市民性と専門性」、「理論と実践」、「教育と福祉」を「融合」する努力。
- (2) 会員だけが中心・閉鎖的)に集うのではなく、広く市民に関わられた活動をする。
 - ✓ 「地域総合型研修会」、「公開型研修会」で市民性を高める努力。
- (3) 既存のコミュニティ・福祉協議会活動から取り戻された問題や新しく発生した問題を大切にし、特に市民生活に直撃した活動をする。
 - ✓ 「調査研究活動」を推進し、地域課題を取り直し、その考察等を地域社会に提言。

● 達成して3年間のプロセス

新しいコロナ禍で、「共助・近助の地域を再構築」を目的に、活動の原点をもちに、市民有志で結成した本会の活動は、早い「津都市赤い羽根共助委員会地域福祉促進助成事業」と「神岡南コミュニティづくり推進協議会 コミュニティ活動推進助成事業」により、地域住民に検証してきた活動を報告し、思案ある活動を展開し、ここに3年間の活動を維持してきた。

➤ 1年目（2019年度）

活動-Y（「津地域の“ご近所”を切り拓く 集まる地域ぐるみの交流会を開催する」約5,000世帯で組織されている「津地域づくり推進会」（第14・23自治会）管内において、今日まで、地域や個々の人々のつながりの中で、気兼ねなく集まり、会話を交わし、ふれあい交流し、管仲の焼り所としている「居場所的機能」を持つ55の既存の各種団体・グループ等を把握し、「集める居場所から集まる居場所」を課題提議。

➤ 2年目（2020年度）

活動-Y（「津地域の“ご近所福祉を切り拓く”-1-2-居場所による地域課題解決を導く-」1年目に取りまとめた結果をもちに、さらに把握に努めるとともに、管内関係団体や住民に機会があることに情報を提供し、改めて、こうした既存の団体グループの様々な取り組みを地域住民が共有し、積極的に地域参加する機会を母掛け、「ご近所福祉その場」と「居場所」に取り組み、地域で誰の見える“近助”の関係を築き上げることができる「居場所による地域づくり」を働きかけた。

➤ 3年目（2021年度）

活動-Y（「津地域をつなぐ・ささえあう“ご近所福祉”を創る」この2年間にわたり考察・実践してきた活動のプロセスから、改めて、津地域の現状を踏まえて、地域を活性化し、世代を超えて、誰もが地域づくりに関わられる“近所系”地域の居場所”としていく活動に取り組み、子どもを対象に、管内関係団体・学校関係者の協力により、若い子どもたちからの意見を大人社会への提言としてまとめることができた。

● 2022年度の取り組みは…

- 活動-Y（「わかる・見える実践活動で“福祉文化としての“ご近所福祉”を創る」これまでの3年間の活動から浮き彫りになった地域課題を再考しながら、真の問題解決に向けた具体的な解決策を試みる。
- 活動の推進点
 - (1) 世代を超えた「地域ぐるみの居場所」、「ご近所福祉の構築維持」を創る「地域総合型公開学習」の場
 - (2) 第三、地域社会に向けた講師と協働による活動ができる場
 - (3) 「専門性と市民性の融合」を基に、「居場所」による実践的課題解決策にに取り組む場（総務団体と市民団体の融合）
 - (4) 3年間の「調査結果・考察」から浮き彫りになった課題を講義し合う場（コーディネート委員の角上）
 - (5) 地域コミュニティの活性化の仕組みづくりを「理論と実践の融合」により実践的活動に取り組む場
 - (6) 第三に、地域社会に積極的に活動が展開できるように「活動財源確保」に努める。

➤ 活動内容

- (1) 委員会の開催
- (2) 定例研究会の開催
 - ✓ 原則、毎月第2土曜日、18:30～21:00を定例開催日とする。
（別添活動計画表参照）
 - ✓ 各種活動の状況に応じて、臨時研究会をもつて、円滑な運営に努める。
- (3) 事業関連委員会設置と開催
- (4) 主な取り組み
 - ① 調査研究事業 ② 研修事業 ③ 広報事業 ④ 協働事業

【ご一緒に「福祉文化活動」に参加しませんか??】

福祉・ボランティア活動や地域づくりに関心のある方、ぜひご参加ください。
本会定例会は、原則、毎月第2土曜日 19:00～21:00です。地域活動型・居場所の社会化をめざす、管内介護事業所を会場事務局として、理論と実践を融合し合う学びの場を創ります。

- 会費：1,000円
- 入会ご希望の問い合わせ先：
 - 〒425-0044 津都市石津町15-17 ティーユー・ビス吉の木内
 福祉福祉文化共創研究会 TEL: 054-623-3665 FAX: 054-656-3731

入会申込書

志望理由											
氏名											
性別・年代	男	女	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	
住所・連絡先	〒										
TEL						FAX					
E-mail											
職 業											
● 入会の動機、これからの活動に努むこと等を自由にお書きください。											

焼津福祉文化共創研究会規約

第1章 総則

第1条（名称）この会は、焼津福祉文化共創研究会と称します。

第2条（事務所）この会の事務所（連絡先）は「☎425-0044 焼津市石津向町 15-17 百の木ディサービス内（054-623-3665）」に置くこととします。

第2章 目的・事業・活動基調

第3条（目的）この会は、さまざまな福祉・ボランティア活動や福祉職に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考えその改善のために努力していくことを目的とします。

第4条（事業）この会は、前条の目的を達成するため、つぎの事業をおこないます。

- ① 情報交換活動
- ② 啓発・広報活動
- ③ 人的交流
- ④ 研究会・講演会・セミナーなどの開催
- ⑤ その他、この会の目的を達成するために必要な事業

第5条（活動基調）この会の活動は、つぎのような基調を守っていくこととします。

- ① さまざまな分野で活動する人たちや福祉職に従事する人たちが、専門分野と世代を超えて交流を図ります。
- ② 会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に開かれた活動をめざします。
- ③ 既存の福祉組織の活動から取り残された問題や新しく発生してきた問題を大切に、つねに市民生活に密着した活動をめざします。

第3章 会 員

第6条（会員の資格）この会の目的に賛同し協力をする個人。

原則として国籍・年齢・職業等を問いません。

第7条（入会）会員になろうとする人は、所定の申し込み用紙によって手続きをすることとします。

第8条（会費）会員は、規約により会費を納入しなければなりません。

2.既納の会費は返済しません。

第9条（退会）会員は、いつでも役員会に通告し、退会することができます。

2.会費を1年以上滞納した人は、委員会において退会したものとしてみなします。

第4章 機 関

第10条（役員）この会の役員は、代表1名、副代表1名、事務局長1名、監事とします。

第11条（役員を選任）代表、副代表、事務局長、監事は、会員の中から互選し、会員全体会の承認を受けます。

第12条（役員の仕事）代表は、この会を代表して会務を総括します。

2.副代表は代表を補佐し、代表に支障が生じた場合には、
の職務を代行します。

3.委員は、事業・研究・広報・会計・事務局事務などの会務
を執行します。

第 13 条(役員の補充)役員が任期の途中で退任した場合には、委員会で補欠を選任することができます。

第 14 条(会員全体会)代表は、年 1 回は、会員の全体会を招集しなければなりません。

2.代表は、委員会が必要と認めたとき、または、会員の 3 分の 1
以上の請求があったときは、会員全体会を招集しなければなりません。

第 15 条(委員会)代表は、年 4 回程度、委員会を招集しなければなりません。

第 16 条(議 決)会員全体会の議事は、出席会員の過半数をもって決することとします。

第 5 章 会 計

第 17 条(経費)この会の経費は、会費・寄付金・その他の収入をもってあてます。

第 18 条(会費)この会の会費は、「社会人 年間 1,000 円」、「大学生以下年間 500 円」とし、原則
として 1 回払いとします。

第 19 条(決算)この会の決算は、委員会の議決を経たあと、会員全体会の承認で決定します。

第 20 条(会計年度)この会の会計年度は毎年 4 月 1 日から 3 月 31 日をもって終わるものとします。

第 6 章 規約の改正

第 21 条(規約改正)この規約の改正は、会員全体会において出席会員の 3 分の 2 以上の賛成をえ
なければなりません。

附 則 平成 31 年 4 月 1 日施行

令和 4 年度 焼津福祉文化共創研究会 会員 順不同

平田 厚 原崎洋一 橋本雄介 望月隆仁 原崎幸子

河野恵介 大澤雅晴 安倍孝至 平山和子 飯嶋論以子

橋本和子

事務局： 〒425-44 焼津市石津向町 15-17

ダイサービス 百の木 石津内

TEL 054-623-3665 FAX 054-656-3731

【焼津福祉文化共創研究会】3年間の成果物一覧

A. 2019年度 港地域の団体・グループ紹介集

「港地域づくり推進会」(港第14・23自治会)管内における、地域住民がふれあい交流し、「地域の拠り所」としている活動団体・グループ・サークル活動を紹介。

B. 2019年度 港地域の“ご近所福祉”を切り拓く ホツとする・つながる・ささえあう「集まる居場所」をめざして 検証報告書

「港地域の団体・グループ紹介集」で把握したシートをもとに、住民世代、領域、社会参加状況などを分析・考察し、「地域ぐるみの居場所」として、これからの地域づくりについて提言。

C. 2020年度 ご近所福祉その意識と実態調査報告書

1年目に取りまとめた結果を基に、既存の団体グループの様々な取り組みを地域住民が共有し、地域で顔の見える“近助”の関係づくりができる「協働による地域づくり」を提言。

D. 2021年度 福祉ってなに？244名の子どもたちに聞きました調査報告書

地域を家庭化し、世代を超えて、誰もが地域づくりに関われるご近所を“地域の居場所”としていく活動に取り組み、子どもたちからの意見を大人社会への提言としてまとめた。

E. 2022年度 みんなで創る福祉を学ぶ講座報告書

結成以来3年間の取り組みをもとに、「みんなで創る福祉を学ぶ講座“ご近所福祉のささえあい”を誰が担うか」として、住民主体による「共助」を学び合ったプロセスをまとめ、広く地域住民に啓発。



A



B



C



D



E

これからの“福祉”を考えるネットサイト



日本福祉文化学会 QR コード



港地域ささえあい講座 QR コード



静岡福祉文化を考える会 QR コード



焼津福祉文化共創研究会 QR コード



**公益財団法人 さわやか福祉財団 地域助け合い基金助成事業
焼津福祉文化共創研究会**

**2022年度「地域共生社会をめざす仕組み検証事業」
ホッとする、安心した地域づくりその意識と実態調査報告書**

- 発行：焼津福祉文化共創研究会
〒425-0044 焼津市石津向町 15-17
デイサービス百の木石津内 焼津福祉文化共創研究会事務局
TEL: 054-623-3665 FAX: 054-656-3731
- 発行日：2023（令和5）年2月18日（200部発行）
- 印刷所：株式会社セイコー社
〒425-0091 焼津市八楠三丁目 5-17
TEL: 054-626-5960 FAX: 054-626-5970